

後深草、龜山、後宇多、伏見四朝の戒師となれり其後又衰頽し足利義教のときに重修せしに應仁の兵火に罹り永正中廣明和尚、長州阿彌陀寺より來り十方を勸化してこれを再建し織田、豊臣、徳川諸氏を經、維新の際に及び一時大に衰頽せしか近年妙法院よりこれを兼帶し故梨堂相公實美其先考也成墳墓の所在にして大に力を修造に用ゐられ永世保存の法を立て居然西嶽の一名刹たり

佛殿 東向檜皮葺なり永享年中の造營なりといふ二尊院の額は後奈良帝の宸翰なり中央に彌陀釋迦の二尊各立像二尺五六寸春日作を安す是寺號の起れる所以なり又其側に著名なる法然上人足曳の影畫を安せり縁起の略に月輪禪閣深く上人に歸依し宅磨法眼に竊に其像を寫さしむ時に上人踞座せしを寫しを以て片足外に露はれたり後に上人其圖を持念せられしに自から改りて端坐の相となれり是より世に足ひきの御影と稱し偏に上人の奇特を感し畫史の名譽となせりと又佛殿の北に鷹司家西に二條家の祠堂あり

阿彌陀堂 本堂の北に在り彌陀尊を安す鷹司信子徳川綱吉公室の靈舎なり

龍女池 境前に在る小池なり正眞上人手つから龍女に圓頓戒の血脈を授けられ池中に千重の蓮花を生せしこと舊記に見えたり

優等寶物は釋迦文殊普賢像三幅傳張思恭筆、十王圖傳巨勢金岡筆、地藏菩薩像傳弘法大師筆にして其他三條西實隆公二尊院勸進卷及實隆實枝公條三公の畫像の宸翰題詩あるもの、唐繡十六羅漢圖十六幅等は希世の珍といふへし又法然上人の遺物中最も著名なるは神變舍利、臨終所着袈裟及び淨家七條教戒なり

三帝御塔 佛殿より西北の山にあり東面なり北は嵯峨中は土御門南は後醍醐の三帝なり其御由緒は今詳かならず

法然上人廟 後山に在り東に向ふ上人の塔並ひに其碑あり支那より齋す所といふ碑面文字磨滅して讀むべからず一説に湛空の墓なれども源空法然上人の名の高きか爲めに其文字を磨滅せしめ法然の廟とせしものなりと

三條忠成公墓 同所三條家の塋中に在り三重大石碑を建て面に題して贈右大臣從一位三條忠成公墓と題す

三條實美公瘞髮塔 忠成公墓の東に在り碑面に正一位大勳位三條實美公遺髮塔と大書す

三條西實隆公墓 法然上人塔の北にあり

伊藤仁齋及び東涯墓 同所伊藤氏の墓地に在り構造儒家の法式を用う

當山墓地に鷹司、二條及び三條、三條西諸家の塋域其外熊谷直之白房の臣吉田了意父子名醫香川太冲福井源需等の墓あり
 時雨亭舊址 小倉山の半腹にあり定家卿山莊中小亭の遺址といふ眺望最もよし
 有智子内親王墓 二尊院より常寂光寺へゆく道の側にあり
 落柿舎 有智子内親王墓の側にあり去來の舊址にして俳歌者流の羨稱するところなり
 前中書王の菟裘遺趾 兼明親王志を得ず龜山に隱居し菟裘の賦を作り給ひし舊址は此龜山の下にあり然れども今たしかならず親王の憶龜山の詞祭龜山神文は本朝文粹にあり

常寂光寺 葛野郡陸奥村

法華宗にして本國寺に屬す同寺十六世の僧日禪上人は即ち此開祖なり釋迦多寶二佛を本尊とす定家卿祠は境内の山腹に在り卿及び東照公の二小像を安せり

野の宮 同上

野の宮は齋宮の内親王三年の間此に住みて潔齋したまふ所なり齋宮は垂仁帝の朝皇女倭姫命をして天照皇太神を奉祀せしめたまひしにはしまり後鳥羽帝の御宇まで絶えず繼續したまひしに其後兵革の爲にいつの程にか廢絶せり齋宮女御の琴の音の和歌は此にてよみ給ひしといふ今清凉寺の西南民家の後竹林中に悠記、主基の両小祠あり祠前に黒木の鳥居小柴垣あり他に見ざる所なり

龜山殿舊址 葛野郡陸奥村

龜山殿は後醍醐帝の離宮にして龜山法皇も住みたまひしところなり今の天龍寺の内外皆其舊址に當れり天龍寺に當時の舊圖あり其全軀を見るへし龜山より嵐山に對し大井川を控かへ其上には御棧敷殿あり渡月橋は石柱曲欄の大橋にて今の所より一町許上流の方に架し嵐山に通せりかたはら公卿宮人及び附屬の邸宅四周に建ちならひ一時の繁華殆ど別都の觀ありしといふ建武の頃には一旦衰頽せしを足利尊氏僧疎石の勸めにより奏請して天龍寺とはなしたるなり龜山殿の時は嵐山、大井川ともに御庭前の物となりしものなるへし

天龍寺

高野郡 藤原村 宇

靈龜山天龍資聖禪寺と號す濟家五山の一なり此地當初は嵯峨皇后の建たまひし
 檀林寺に在りし所なりしか荒廢のち後醍醐上皇仙宮を營みたまひ龜山法皇こ
 れを離宮とし金殿玉樓甍をつらね公卿の邸館其側に滿ちしか其後曆應二年足利
 尊氏後醍醐帝追福の爲に大道場を創造し貞和初年に落成し夢窓國師を請し開祖
 とし勅願に準せらる其天龍と號せしは當時金龍此地に現はれし瑞あるに因ると
 そ在昔殿堂金碧を飾はめ莊嚴偉麗なりしか爾來幾度の兵亂に回祿し凄凉の色を
 呈せしに近年再び元治の却火に罹り僅かに堂宇を假建して其舊蹟を存す然れど
 も其規模の大なる尙西山に冠たる一大名刹なり

総門 南向官道の西側に在り門内左右子院多し中央一段高き所は佛殿の墟なり
 其北に法堂跡あり佛殿有に跡し法堂を用ひて佛殿
 假佛殿 南面元の選佛場なり方丈の東北に在り堂内瓦を敷き中央に須彌壇を設
 け本尊釋迦佛座像一尺餘左右脇士文殊普賢各座像一尺許を安し其他後壇に達磨臨濟百丈及
 ひ尊氏等の像を安せり

選佛場 一に雲居庵と稱す文殊菩薩を安す假方丈の西に在り近年新築する所の
 假堂あり區して獅子窟といふ常に數十人の學僧あり

假方丈 南向假佛殿と選佛場との間に在り
 境内廣大にして喬松古柏に錯り青苔徑を埋め其間に故殿堂の礎石の散點せるを
 認め人をして懷舊の念を發せしむまた舊方丈の林泉は開山國師の意匠を凝し經
 營せしものにして中心に清池あり曹源池と稱す池畔奇巖怪石參差として岸下に
 飛泉あり龜尾深といふ池中に小嶼を築く辨天島と名つくと中に龜頂塔の遺材其他
 補陀釣寂座禪班虎臥月被雲等の奇石あり又花時庭中より嵐山を望めは洞中より
 武陵を望むか如く秋晚紅葉池邊に滿ち霜後の風情いはん方なし

三秀院 本寺の塔頭にて本と堂宇ありしか元治の兵火に及し今假建築なり然れ
 ども嵐山に對し大堰川に俯し風景最も宜しきを以て花紅葉の候遊人最多し

本寺優等なる寶物は傳に顏輝筆といふ釋迦文殊普賢像三幅吳道子筆といふ淡彩
 畫觀音等とす其他法書名畫最も多し一々記するに遑わらず宸翰類には後醍醐帝
 開山に袈裟を賜ひし御文上下の宮の御文龜山法皇尊像御贊同龜山曉雪の御和歌
 又源親房公臨川寺文書夢窓國師寺規同遺物及び古文書甚多し古圖には龜山殿指

圖鈞命圖等あり又策彦和尙入明の記録類は當時の外交を證するに足るへし

後嵯峨龜山二帝陵 葛野郡嵯峨村

後嵯峨龜山兩帝陵は天龍寺假佛殿の西南にある實筐造の御廟是なり二字相並ひて西に面す又同所西北の山中に御茶毘所あり古木鬱蒼とし之を掩へり

鹿王院 同上

康曆年中足利義滿の創立にして覺雄山大福田寶幢寺と號し開祖は普明國師夢窓の法妙なり又寺後に一小刹を建て鹿王院と稱す即ち開祖の塔所至徳年間寶幢寺を禪家十刹の中に加ふ其後幾多の歲月を経て本寺は廢絶し當院のみ存せり故に寶幢寺の什寶古記多く本院に傳來せりと又鹿王と名つけしは當初白鹿の祥ありしに由る寛文中酒井忠知羽州庄内藩主之を重修す
佛殿 東面す本尊釋迦佛坐像二尺五寸を安し後壇に開祖普明國師像を安す其下は國師を葬る所なり上に後圓融院宸筆の榜を掲ぐ堂内に足利義滿の像あり其他これ等を署す

舍利殿 東向佛殿の東南にあり二重瓦屋なり殿の中央に須彌壇を設け其上に多寶塔あり内に佛牙舍利を安す寺傳に鎌倉將軍實朝靈夢に憑り宋國より傳來し相州圓覺寺に安せしか其後故ありて當院開祖に傳はり此に安置することゝなれりと其他方丈庫裏鐘樓及び中門總門覺雄山の遺物は殿等あり

曇華院 葛野郡嵯峨村

曇華院は舊尼宮の住院にして京都三條通にありしか維新變革後鹿王院の子院を買ひ此に移れり禪宗にて天龍寺末なり皇室の賜物等多し

臨川寺 同上

靈龜山と號し禪家十刹の一なり當寺初は龜山法皇の仙居なりしか後に後醍醐帝皇子世良親王の別墅となしたまひ薨去のまじ遺命に従ひ梵刹となし夢窓國師を開祖とす事は後醍醐帝の夢窓國師に賜ふ所の勅書に見ゆ寺域の大堰川に臨むより臨川寺の號あり
中門 總門の内にあり足利義滿書する三會院の額を掲けたり

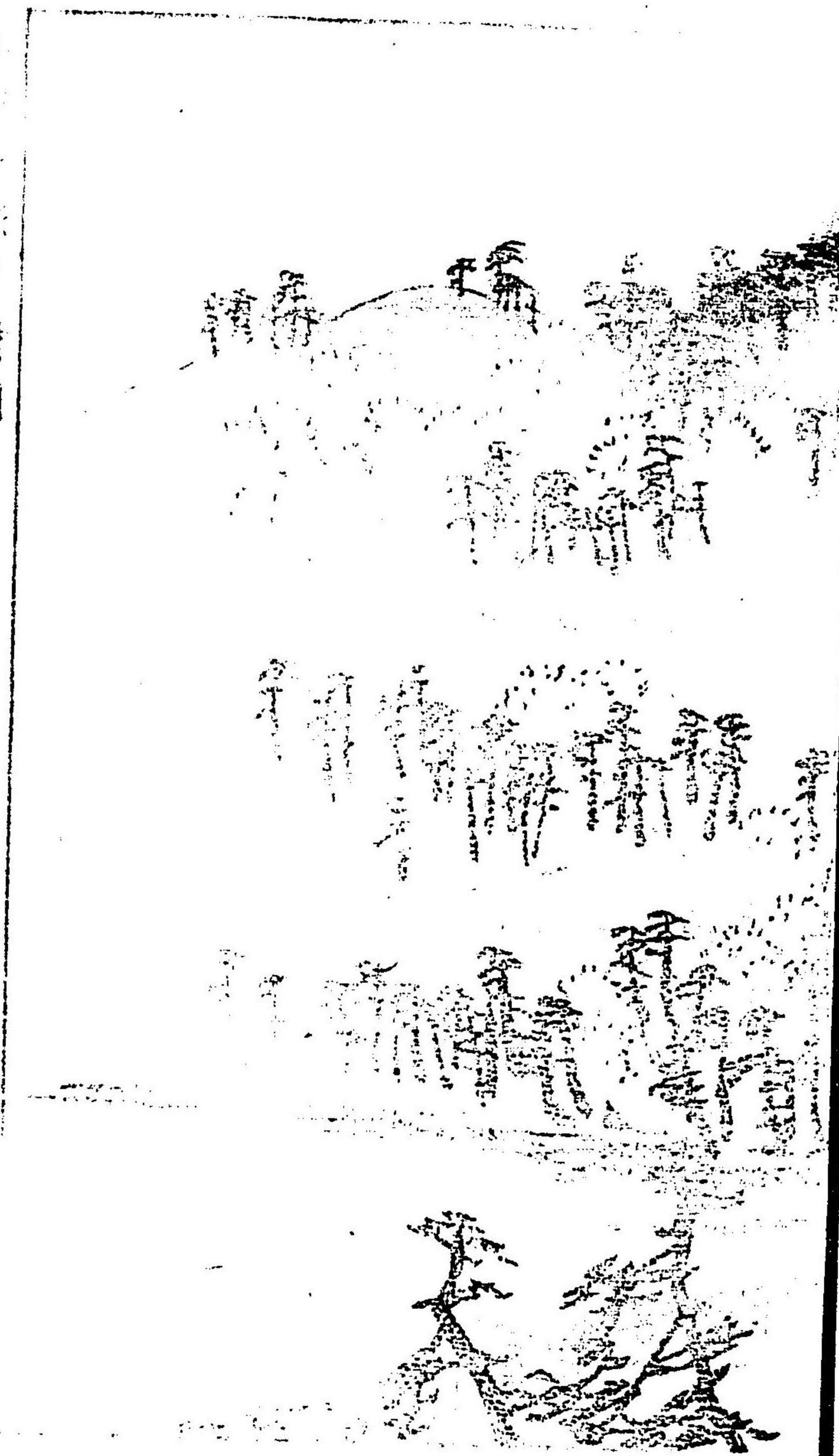
本堂 南面中央壇上に本尊彌勒佛七座八寸許を安し傍はらに地藏尊尺許二を安す
足利尊氏の持念佛なりと東壇に後醍醐帝の宸翰を安す

開山堂 本堂の中央に在り三會院これなり開山夢窓國師の像餘其子に在る長三尺
に命し作を安し其下に石龕を設けたり即ち國師の遺骸を葬る所なり前楹に後醍
醐帝宸翰の榜を掲げ左右に塔銘東院和名の碑銘の撰文なりあり其他後壇に佛國
佛光兩國師の影を安す

世良親王墓 本堂の後に在り高さ三尺ばかりの石塔なり親王は太宰帥に任せら
れしより都督親王ともいふ

嵐山 京野郡上山田村

京都第一の名勝にして海の内外にも又たくひあらしの山の絶景を記さんに嵐山
は丹波國南部より綿亘せる山脈の一部にして西北は小倉山龜山に對し峰巒重疊
こゝに至りて山勢開け嵯峨野に臨みて屏立す麓を流るゝ川を大堰川といふ水源
は遠く丹波北桑田廣河原村より出て上流を保津川といひ水尾清瀧二川に落合ひ
猿飛龍門大瀬等を経て大堰川となり桂川となり末は淀川に注ぐ



大堰川渡月橋圖





一帯の青山屏風を聯ぬるか如く麓を流るゝ清流は瑠璃を湛へて飽くまで清く只
さへ畫中の風景なるに山中櫻花多く毎年四月中旬抵四月十日より廿日まで大
とす盛り開の比は幾團の香雲暖雪淡靄濃霞の間に掩映し清流にうつれるなど繪に
も文にもうつしかたき景色はたゞ見たる人のみ首肯すへし傳へいふ此山の櫻は
むかし後醍醐帝吉野山より移させ給ひしとて御製に春ことに思ひやられしみよ
しのゝ花はけふこそ宿にささけれとあり此地の櫻は其名もとより高く世の知る
所なるか楓の景色の一段勝れたるを知るはまれなり秋晩霜酣にして大抵十一月深
紅淡黄青松緑樹の間に錯錯する景色は丹青映帯の妙を極むといふへし後鳥羽帝
の御製にも秋ふかし染めぬ梢はわらし山しくれにもるゝ青き一枝又初夏新樹の
翠を滴らし緑をみなさらす光景一段風人雅客の幽賞にかなひ三冬雪の晨のけし
きまた絶佳なりされは古來王公貴人より風流韻士の遊賞棲隱の地となり寛平法
皇の御幸をばしり白河法皇三船の御遊あり後醍醐院の離宮を營み給ひ龜山院の
皇居となり兼明親王の隱遁したまひしなとかきりなれば畧す師房卿の天下の
勝地は大堰川に過きたるはわらす城中の名區は醍醐野に若くはなしといはれし
も溢美にはあらず

渡月橋 大堰川に架す長百餘間むかしは今少し上流にかゝり結構宏壯なりしよし現時は土橋なれども山水との映帯其宜しきにかなひ風致を添ふ

戸難瀬瀧 嵐山の麓にあり一條の溪流岩石を摩して降る遠くこれを望むに練を曳くか如しまた嵐山畫中の勝に闕くへからざる一點染なり後鳥羽帝の御製にあらし山これもよしのやうつすらむ櫻にかゝる瀧の白いとあるは是なり

千鳥淵 戸難瀬の西北にあり盛衰記横笛の故事を傳へて名高し巨巖突兀として清流紺碧を湛へ嵐光翠色影を倒にして水中に落つ

大悲閣 千光寺といふ渡月橋より嵐山の麓大堰川に沿ひて七町ばかり西にあり本尊千手觀音の立像は惠心僧都の作脇壇に著名の水理家吉田了意の座像注衣を推し手にし巨巖とあり庭前に碑あり碑文は林道春の撰にして保津川疏鑿の始末

風景絶佳なり

鏡泉花廻湯 大悲閣の上流にあり温度華氏三十度硫黄性の冷泉にして浴場を作り遊浴に供す

保津川 大堰川の一部にして保津村を經るを以て此名あり水は両山巖石の間を流れ急流激湍舟を通すへからざりしを了意の開鑿せしより僅に舟筏を通し運漕の利便を興したるのみならず船にて上下すれば藤惺齋翁の撰む所の浪花隈觀瀾

吟猿峽、鷹巢、翠巖、石門、關島、船瀬、家山などの名勝あり沿岸奇景百出、唐土巫峽三峽の勝もこれには過ぎしと想はる就中初夏新緑の頃は兩岸の躑躅花さき亂れ碧流に映帯して美觀を極む

此川の勝を一覽せんとするには陸行丹波南桑田郡篠村字山本に至り舟に乗るか或は渡月橋より舟を雇ひ舟夫數人數十丈の繩にて舟を曳き廻り落合あたりに至り繩を解きて下るときは舟は急流に随ひ駛行矢の如く壯快いはん方なし但し巨巖怪石水中に突兀するを以て舟夫は篙を舞はし舵を轉し左右避察して僅に衝突を禦くまた奇觀なり

三軒茶屋 渡月橋の西にあり皆旗亭にして其名高し樓山より眺覽すれば嵐山大堰川の勝景眸中に入る

法輪寺 高野郡上山田村 渡月橋南高處

往古葛井寺といひしよし開基詳ならず貞觀十六年法林寺と改め後また林の字を

輪に改む真言宗にして中興開山を道昌法師といひ弘法大師の真言密旨を受け虚空藏求聞持法を修せんと一日日參籠の末示現に感し刻みたる虚空藏菩薩の像を當寺の本尊となす本朝三藏空藏勝士は左明星天右雨寶童子にて共に弘法大師の作といふ

樓門 東向、金剛力士を安す運慶の作といふ

小督局經塚 一に小督局の塔ともいふ何れか是なるを知らず

玉堂琴士碑 法輪寺門前にあり文政の頃著名の畫師にして撰文は頼山陽なり

涌蓮上人碑 同所にあり和歌を善くせし奇僧にして行事は崎人傳に見えたり

左甚五郎瀧 天文中甚五郎名工たらむことを祈願し此深布に浴したりといふ

蛇谷 堂後の山中にあり傳へいふ左甚五郎本尊の夢告により此所に大蛇を見て

雙龍を刻みたりと其彫物今に當寺に寶藏せり

境内地域は嵐山の東に山つゝきなれば四時の眺め飽くことを知らず本尊虚空藏

菩薩道昌を作して歷朝宮廷の御歸依厚く都俗童男女十三歳になれば虚空藏の福

智滿の智慧を授からむと春風麗日に乘し争ひ此に參詣すこれを十三參りといひ

衣香扇影途上に絡繹として繁華いはん方なし此外いさか櫻谷社、夢窓國師の座禪石香西

又六郎の嵐山城址及び藏王權現堂など皆山中にあり

月讀宮

高野郡松尾村字松窪

松尾の南に在り奉祀曆年詳かならず然れども其創立最も悠遠なるか如し上古は桂川の水濱に在りしか往々泛濫の虞れあるを以て齊衡年中今の地に遷祀せり史に云顯宗三年に月神人に告て宣はく我祖高皇產靈神は天地を鎔造するの功あり宜しく民地を以て奉すへしと依て歌荒うら槻田十五町今松尾の東の地を云を獻したまひ押見宿禰並並敷敷原原をして奉祀せしむと舒明帝二年に使を筑紫伊賀縣に遣はし神石功皇后の神跡により此石を祝して産月を延を求め神宮に納めたまふ文武帝大寶初功年行幸神石を觀たまふとあり桓武帝延曆廿一年始めて大社に列せられ醍醐帝延喜六年神階を正一位に進めたまふ朱雀帝天慶四年宮號を宣下したまひしこと等一々録するに違あらず闕郡無比の古靈廟なり本社は東面にして高皇產靈神、月讀尊を奉祀す

松尾神社

高野郡上山田村字松尾

本社はしめは松尾山中まつか瀬谷せやに在り上古より鎮座する所なり聖武帝天平年中始て大社に列せらる桓武帝延暦三年遷都の故を以て從五位を授けたまひ清和帝貞觀七年神田を獻し翌年正一位に進め封戸を増したまふ陽成帝元慶初年の告文に皇太神と稱し一條帝寛弘元年車駕親臨したまふ是れ松尾行幸のはしめなり其後後鳥羽帝建久四年御製の歌三十章を納めたまふ同六年源賴朝社頭に關し願文を捧げ黄金壹百兩神馬十疋を獻す往時神封千二百石あり大政維新の際更めて官幣大社に列せらる例祭四月二日元は上申日を用ふ私祭は四月中卯日五月上旬日を用ふ神與山邊寺の式あり世に松尾祭と稱し城西の一大盛儀なり古來神德顯赫靈驗最著なりとて世人畏敬し號して靈猛神といふ延暦中京都守護神となしたまひ是より後早潦災疫には必らず幣を捧げ使を遣はされ朝野の尊崇大方ならず特に造酒の神と稱し遠國の釀酒家の報賽頗る多し

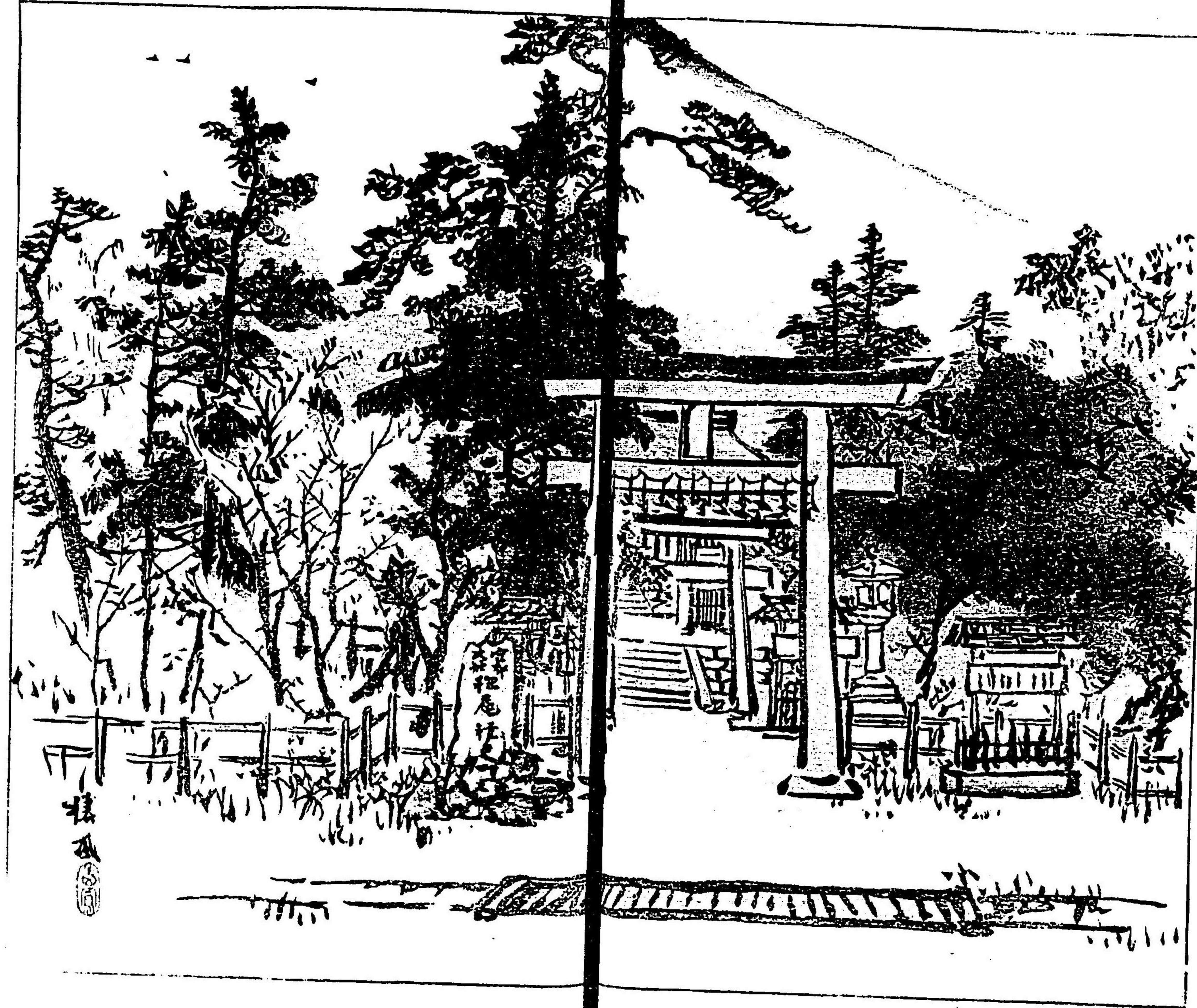
本社 東面大山あづま山やま昨命あま市杵島姫命いちきりまひめを祭る前に祝詞舎あり左右長廊を設け内に本宮北新宮南の二小祠あり神饗拜殿樓門神庫社務所神饌所鳥居等井然として建ならへり結構嚴肅なり

當社域は本郡の西南部に在り後山を雷峰と稱し老松巨杉森々として生ひ茂り神



松尾神社

松尾神社圖





さびたる靈境なり又社頭櫻楓柯を交へ春秋の景畫中の如し近來有志者等神苑會
を結ひ追次神苑を擴め水を引き花を栽る風致を添ふ

地藏院

高野郡松尾村字
下山田

相傳ふ此地もと衣笠^{イカサ}内府^{ウチノ}公^{キミ}長の山莊なり故に衣笠山と號せり初め天台なりしか
細川頼之これを再興し宗鏡禪師^{ソウキョウ}法^{ホウ}弟^{テイ}のを中祖とし竟に禪家となり天龍寺に屬せ
り往時は諸堂巍然たりしか應仁の兵火に罹り蕩盡し爾後小室を建て僅かに其遺
址を存するのみ俗に谷の地藏と稱せり

本堂 南面本尊地藏菩薩を安す近年新築する所なり

細川頼之墓 本堂の南に在り石柵をめぐらし其内に宗鏡禪師の墓と相併へり又

本堂の前に頼之の碑あり前年其五百年遠忌を修するに當り之を建つ篆額は細川

護美^{護美}文^文書^書本^本題^題なり撰文は細川潤次郎^{潤次郎}撰^撰院^院等の諸氏共に頼之の後裔に繫れりといふ

西芳寺

同上

禪宗濟家にして天龍寺に屬す往古は西方寺と稱し天平年中釋行基の開創する四

十九精舎の一なり一書に聖徳太子の草創に其後空海在住し高岳親王廢太子の後御落飾の後當寺に入りたまひ北條時頼細衣巡錫の日假寓せしといふ名刹たりしも其後大に荒蕪せしか曆應中夢窓國師これを再興し改めて西芳寺と號す蓋し祖師西來五葉聯芳の義に取るなり其後兵亂の爲め衰頽し數多の沿革あり以て今日に及へり

本堂 西芳精舎といふ又西來堂と號す維新後移築せしものにして阿彌陀佛を本尊とす立像二尺餘聖徳太子の作なり其後に古茶室あり頗る奇なり當寺林泉は夢窓國師の築造せし所にして山容水態自づから趣をなし園中に湘南亭潭北軒等の名あり境地清閑樹石蒼古また洛西の一名園たり

淨住寺

高野郡松尾村字下山田

開基は奥聖菩薩なり元弘年中兵燹にかゝり爾來廢絶すること二百數十年にして元祿年間鐵牛禪師之を再建せり

佛殿 東面本尊如意輪觀世音八寸許を安す天竺佛にして鐵牛禪師の威得せし所なりとそ同壇に阿彌陀地藏共の作を安せり堂前に祝國二大字の匾を掲ぐ開山禪師の書にして筆力雄勁なり

開山堂 佛殿の後小高き所に在り中に鐵牛禪師像を安せりその下は則ち埋骨場なり堂の北に其碑銘あり

眞如寺

高野郡松尾村字下山田

三代實錄に貞觀四年參議藤原良繩奏開す別墅一區山城國萬野郡に在り某先皇の爲に佛を造り經を寫し奉る親母紀氏田村出家して亦居住せり請ふ道場となし名を眞如院と賜はらむ之を允す云々當寺初は眞如院と號し現所より二町許往時は天台宗にして諸堂建つらなりしか元弘の戦に谷堂と共に劫火に罹り久しく荒廢せしを萬治年中日通上人京都妙徳寺第之を再建し日蓮宗となれり本尊正觀音長三尺餘は慈覺大師の作なり

梅の宮

高野郡梅津村

官幣中社なり奉祀年月詳かならず承和三年神階從五位を授け官幣に預かれり尋いて從三位に進めらる社傳に醍醐帝皇后橘嘉智子皇儲なきを憂ひ當宮に祈り遂

に皇子を擧げたまふ是を仁明帝となす嘉祥中瓊々杵彥火々出見尊及以外祖父清友公母后を合祀し橘氏の祖廟とし御尊崇他に異なれりと云ふ同后御臨産の時當宮の白砂を御禱の下に敷たまひ皇子御降誕あらせられしとて世俗今に至り産月にいたれば社頭の白砂を請ふて襟帯に佩ることあり

本社 南面祭る所は酒解神大若子神小若子神酒解子神の四座にして相殿に瓊々杵彥彦火々出見尊、大政大臣橘清友公、仁明皇后を奉祀す又若宮は本社の東に隣り瑞籬の内に在り中門は本社の正面にあり其南に拜殿あり又其南に樓門石鳥居其他社務所神饌所等皆備はれり

地域は西北に嵐山を望み西南に松尾あり寒人常に多し神林花木生繁り中に一條の清泉環流し自から風趣あり水邊多く燕子花を植う近時有志の人々力を協せ神苑會を結ひ花卉を増殖し泉石を修營するの擧あり

長福寺

葛野郡梅津村

大梅山と號すはしめは天台宗にして眞理尼の建立する所なり其後梅津清景左衛門右衛門稱月林和尚元は統法を茂古林に嗣き文に歸依し更に堂舎を増し田園を附し覺宗より智鑑大師の號を受はるに歸依し更に堂舎を増し田園を附し覺

に禪刹とせり月林和尚示寂後に普光大幢國師と號す後村上皇の近臣なり康永年中定額寺となれり

表門 東向長福寺の榜は世尊寺忠季卿の筆なり

佛殿 南面二重瓦屋にして殿内瓦を敷けり中央に釋迦左右脇土普賢文殊を安す

開山塔 佛殿の北に在り即ち普光大幢國師を葬る所なり三重の石卵塔あり

花園帝御塔所 塔頭別傳院に在り一に大寶輪と號す

寶物中絹本着色畫の涅槃像は最も優秀なるものなり

久遠寺

葛野郡川島村

俗に西山御坊と稱す本派本願寺の別院にして覺如上人の建立なり本堂は寶曆年中大谷よりこゝに移し阿彌陀如來を本尊とす

覺如上人墓 本堂の西北隅にあり上人は宗祖見眞大師より第三世にして觀應二年八十二歳にして入寂し此處に葬れり

高山寺

葛野郡西院村

日照山と號し淨土宗なり本尊地藏菩薩は惠心の作にして子安の尊像と稱す足利
尊氏の歸依するところとなり江州堅田より今の地にうつり洛陽六跡地藏廻りの
一となれり第一王生寺第二當寺第三建野寺第四神海和其後義政深く之を信仰
し安産の奇驗ありとし其名益々高し冠石は本堂の前に在り高さ六尺餘形狀冠に
似たるを以て名つく採松は本堂の後庭に在り姿勢奇雅古來園藝師の好模範とす
るところなり

王生寺 王野郎大内村字

寶幢三昧寺と稱す一條帝の正曆二年江州三井寺の僧快覽僧都白道の開基に係
る故に或は小三井寺と呼ぶ今大和唐招提寺に屬す其王生通に當るに依りて今の
名を通稱するに至れり世に王生狂言といふは中興の祖圓覺上人の創めし大念佛
にして毎年四月を以て之を行ふ即ち桶取花盜人紅葉狩等二十五番の猿樂なり言
語を用ひず動作に因る演戲奇古にして在昔俗流を勝ひ菩提の道に入らしむる方
便となせしものといふ

本堂 南面本尊地藏菩薩は座像三尺にして定朝か一千日を費して工作し鑿驗著

しとて其名世に高し四天王立像四尺許同上作六尺の脇侍たり外に閻魔王堂併せ安く受樂堂
等あり又當寺に藏する王生忠岑の遺硯といへるは其色紫にして縁に忠岑の字わ
り中世寺北の田間より出てしといふ
本寺の寶物は絹本着色の十王圖等なり

更雀寺 四條通大宮西

初め姉小路大宮の西なる勸學院の遺跡に在り此地に大樹あり諸鳥群棲せり故に
雀の森と稱せしと後今の地に移り森豊前守の再興せしよし森豊山と號す淨土宗
西山派にして東山禪林寺に屬せり又寺傳に延曆帝の勅願所にして國家鎮護の道
場なり故に往昔は堂塔莊嚴僧房軒を並へしか萬壽年中回祿し永長年間に至り藤
原茂明卿再營し後醍醐帝之を重修せしめ給ふ然るに又文和年間に類焼し應仁の
兵燹に罹れり僧淨春傳四方に勸化し終に堂宇を再興し西山上人の法脈を傳
ふ是より今の宗旨に改む寺傳に更雀といふ號の起りはむかし當寺の僧觀智法師
の夢感により名けしものといふ
本堂は南面阿彌陀佛坐像三尺を安す傍に地藏堂あり地藏菩薩脇士に多聞持國二

の共
作に
春日
を安
せり

西南部

源爲義塚

七條通千木

源義朝か鎌田正清をして其父爲義を弑せしめし所なり後人碑を立て之を吊ふ墓
碑今に存せり

六孫王神社

八宮野郡大内村字

相傳ふ此地元は桃園と稱し貞純親王の第なりしを六孫王經基に相承せり其葬す
るや此處に葬ひる今社後の林中一大石室あり是れ其遺骸を納めしものなりと應
和年間源滿仲社殿を創立せしか中古大に衰頹し大通寺の僧南谷和尚幕府に建官
し元祿年中これを再造せり寶永の始南谷再び幕府に請ひ祭祀を起す其儀頗る盛
觀なりしと當社舊時は大通寺の境内に在りて其管轄なりしに維新の初め全く分
離して神地となれり社格は郷社例祭は十月十一日なり

本社 祭神は六孫王經基公にして相殿に天照太神八幡太神を合祀す社傍に小祠

あり北は多田滿仲朝臣の靈を祀り南を五所神社といふ又貞純親王の廟は本社
東南隅に在り境内に神龍水といふあり本社の前に在る小池を稱す

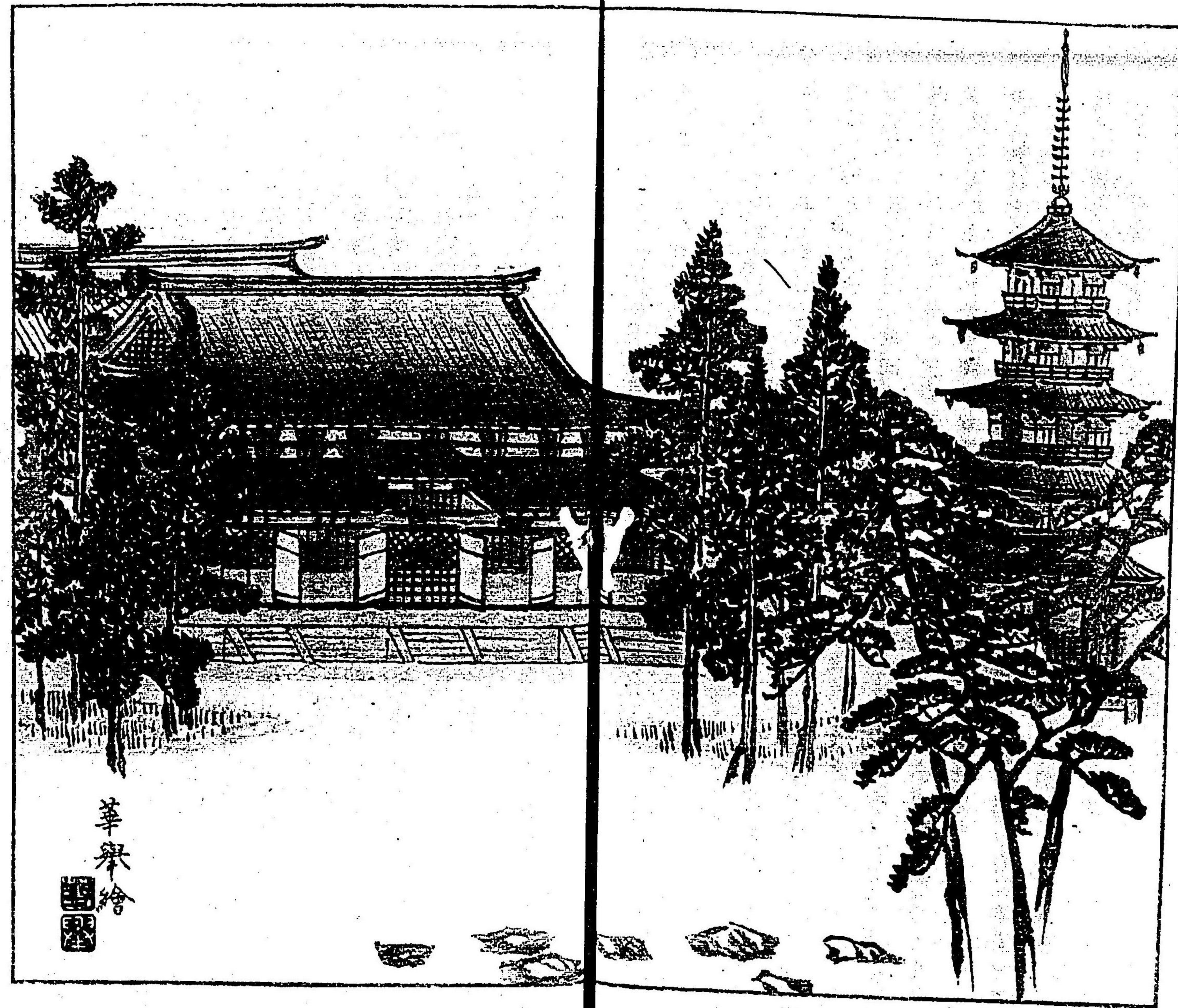
教王護國寺 九條四條通

東寺又左寺と稱す別に秘密傳法院の號あり桓武帝奠都のはしめ東西大宮に鴻臚
館を置きたまふ弘仁年中東鴻臚を弘法大師に賜ひ東寺となし西鴻臚を守敏に賜
ひ西寺となしたまふ大師新に灌頂院を創し傳法受戒の壇場に充つ天長年中師賢
相承の官符を賜ふ即ち東寺長者の初めなり承和二年三月廿一日大師高野山に於て示
寂す爾來此日を以て法繼を設け御影供と號し今に至りて絶ゆることなし本寺創
立以降幾度の變遷ありしも其地域依然として舊の如し建久年中文覺上人此を再
建し今猶は當時の建物あり中古に至るまで寺僧皆長寮に住せしが其後大に衰頽
せしとき行願和尚之を再興し始めて賢菩提院を立てこれに住す是より各自別房
をたて終に二十子院となり維新の際過半廢合せり本寺は眞言宗管長の輪次
法務を執る所にして都下屈指の古名刹なり

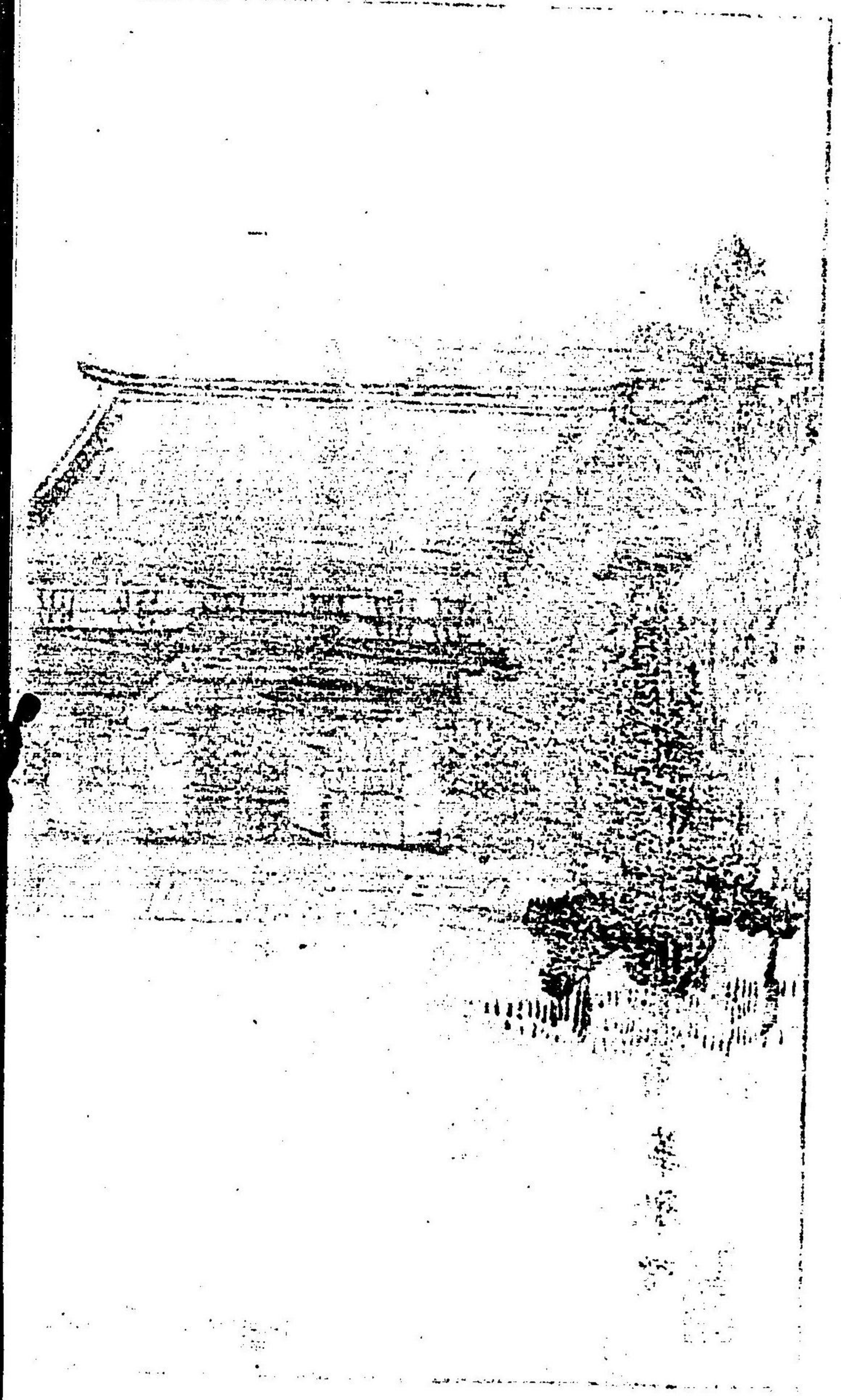
南大門 本寺の總門なり四ッ塚街道に面す往時は巍然たる樓門にして左右に丈



東寺圖



華舉繪



餘の金剛力士を安せしか今より廿年前に焼失せり近日大佛の崩門を買ひこゝに移すことゝなれり門前に長溝あり道を植う

金堂 南向なり二重瓦屋にして中央藥師佛丈餘八を安し臺座の四面に十二神將を排列せしむ脇士東に日天西に月天各立像六尺許なりすを安せり

講堂 南面金堂の北に在り本尊は大日如來七尺許東に金剛波羅密菩薩五尺許西に五大尊内不動像四尺許他は立像を安す

食堂 講堂の北にあり
 觀音堂 講堂の東北に在り南向せり中央千手觀音立像丈餘脇士東は毘沙門天

西は地藏尊各立像四尺餘作者
 洗手舎 觀音堂の北にあり其傍に矮松あり枝を四方に張り翠色滴るか如し

西院 即ち大師堂なり檜皮葺にして横を工字形に組み中分して北に開祖大師の影三尺許を厨子中に安し南に護法神を安すこれを護摩壇となせり相傳ふ堂

は即ち大師の住院なりと堂の坤位に焚庫あり其北に小堂あり大黒天を安す又其北に御供所あり

靈牌堂 大師堂の前にあり昨年新に建つる所なり桓武天皇の宸牌を安し奉る

方丈 灌頂院の北に在り南面なり即ち本寺長者の住所にして構造雅潔なり方丈の前に毘沙門堂あり

灌頂院 境内坤隅に在り古は諸堂に通ふ回廊ありしも今は其礎石のみのこれり蓮華門西方に在り常に閉ちて開かず寺中第一の舊門なり

五重の大塔 境内巽の隅にあり寺傳にいふ天長三年創立する所なり其後回廊に罹り尋て再建せしと金剛界四佛を安す高さ三十六間全國無雙の高塔にして屹然九霄を凌かんとするの勢あり現今のものは寛永年間徳川家光公の造營なりといふ

蓮池 東境一帯に在り俗に瓢箪潭といふ其形の似たるを以て名く水中一面に紅白蓮を種る水際に燕子花を栽たり花時遊人多し

慶賀門 東方の門なり勅使の参入あるところなり傳へ云ふ延元の役新田左中將此處を攻めし時閉させし後はこれを開かざることとなり不明門の稱呼起れりといふ

校倉 池の中島に在り寶庫なり古代の建築法により四方材木を組み立て釘を用ひざるより釘なし倉の名あり傳來の古文書を蔵すること無數にして都下に其比を見すといふ

四脚門 洗手舎の北に在り門の北に長溝あり蓮を植う中央に石橋を架せり是より一町許に又北門あり此間子院東西に並ひ立てり

観智院 四脚門の外にあり當寺第一の塔頭にして多くの古寫經佛畫寶器等を蔵す

本寺地域は市の西南端に在り境内喬松老杉森々蒼翠目に滿つ近年溝渠に多くの菡漚燕子花等を培養し薫風端午の後遊賞するもの多し又毎月廿一日即ち大師には遠邇の參詣群集し各種の商估露肆を張り廣封寸地なきに至る殊に例年四月三月の御影供及び二季彼岸等には最も雜沓を極め其熱鬧名狀すへからず

本寺及び塔中に蔵する所の寶物は頗る多くして枚舉に遑わらず就中優等なるものを擧ぐれば請來目錄師法大山水屏風、五大尊畫像、七祖像、高祖大師眞容、不動明王、傳弘法觀殿毘沙門天、持國天像、增長天像、廣目天、六觀音畫像、十二天圖屏、大師筆法風護法大菩薩、傳弘法聖僧文殊像、同夜叉神、同不動明王、同地藏菩薩、降三世明王、軍荼利夜叉明王、帝釋天、金剛夜叉明王、梵天立像、聖觀音像、舍利塔十一點、黑塗蒔繪箱、天蓋、弘法大師消息、弘法大師遺告、弘法大師略付法傳其他歴史の資料に充つへきもの多し以上本坊不空

網索基光 五大虚空藏菩薩傳 入唐聖僧 閻魔天傳 十一面觀音傳 日愛樂明王傳
 正實樓閣曼荼羅傳 不動明王像藥師十二神將傳 六字曼荼羅妙見傳 普賢
 延命傳 青面金剛傳 觀音銅像不空罽索畫像傳 閻魔天畫像傳 十一面
 觀音畫像傳 此外歴史上の参考となるへさもの多し以上

西寺 大内村字八條

東寺教王護國寺に對しての稱呼なり猶は南都に東大寺西大寺あるか如し中世西方寺
 と號せり弘仁年中嵯峨帝勅して西鴻臚館東寺の條下をを守敏僧都に賜はり寺と
 せし靈地なれと後代破壊して大抵田疇となり金堂講堂などの舊址空しく耕地に
 遣り織に一小庵を存するのみなりしか近年有志の人々佛堂を再建して西方寺の
 名を更め西寺に復稱す境内に守敏の塚あり

羅城門舊趾 東寺南門西三町餘

中古までは四塚民家の東に礎石遺れりといふ今詳かならず羅城門は古昔平安城
 の南大門にして今東寺南門跡より西五十丈千本通の南端にありて宇來生と呼
 ふ地は則ち其遺址なりといふ四塚に接せり

吉祥院天滿宮 和伊郡吉祥村

本社は菅原道真公を祭れり相傳ふ延暦の昔宮城を遷したまひしとき菅原清公卿
 御祭神の供奉せられ當地及び柴山の莊加賀等を賜はり是善卿祭神のを経て公に
 傳へられ三代相承の邑となり公左遷の後朱雀帝親ら公の肖像を彫造し此處に
 祠宇を建て之を奉祀せしめたまふ是れ公の神靈を鎮齋するの嚆矢なり其後公の
 夫人即ち吉祥女のこゝに間居せられしより終に地名となすにいたれりと維新の
 際吉祥院天滿宮と號し村社に定めらる社地大ならされとも樹木生茂り梅櫻楓等
 柯をましえ春秋の頃風景愛すへし境内に鏡の井といへるあり水質清瑩なり世に
 傳ふ菅公參朝のときつねに御姿をうつし給ひし所なりと

淳和帝火化所 乙訓郡向日町字物集女

承和七年淳和上皇崩御し給ふ此時遺詔して山陵を置く事を停めらる依て此所に
 火葬し奉れり宇物集女の南竹林の中に在り土人これを御厝所塚と稱し數株の古

松あり近年官内省より修造ありて壯麗なる事山陵に同し御火化所の南一町はかりに車塚といふあり御登をうつめしところなりといふ

向日町 乙訓郡

乙訓郡の中央にあり郡庁警察署高等小學校等あり西國街道の一驛にして商家軒をならへ旅舎などもあり旅客の往來少からず殊に近年鐵道の停車場京都一四哩 大坂一五哩を置かれしより旅客物貨の出入益々多し

向神社 同上

維新前は向日神社に作る相傳ふ養老二年の鎮座なりと貞觀元年正六位向神に従五位を授けたまふ明治十年郷社に列せられ同十四年府社に昇格せり社地を勝山と稱するは豊太閤征韓の途次社に賽し社司を召て地名を問はれしに故さらには勝山と答へしを太閤大に悦ばれしより終に山の名とせしといふ例祭は五月一日なり

本社 東面應永年中の古建築にして廻回の修繕を歴たれとも古式見るへし祭神

は神武天皇なり稻荷社を首め近年遷祀する所の末社數字あり石鳥居の神號類は小野道風書を摸したるものにして其眞蹟は庫中に藏せりといふ社地は向日岡の上に在り近時多くの櫻花を栽る鳥居のあたりより社頭にいたる兩側は老櫻相並ひ開花の頃は香雲爛熳たり又本社の南地勢高敞にして登臨によりしく葉花のときは黄金滿地の看ありまた古來紅葉すくなからず往々古歌に見えたり

眞經寺

乙訓郡向日町字 眞經井

相傳ふ昔時日像上人壯年の時京都に上り法華宗を弘めんとし到處に衆を集め法を演ずるに際し諸宗の僧徒これを妨げしは西國に下らんとて此に至りしに當寺即ち元の眞經寺なりの僧實賢等法義を難問せしも終に日像上人の説に服し其徒弟となり眞經寺を眞經寺と改め此時より法華宗に爲りしと云

本堂 南面中央に法華曼陀羅左右に日蓮日朗兩上人の畫影を掛く共に日像上人より當時の信徒に附與せしものなりとさけり

鬼子母神祠 本堂の巽に在り西面せり又境内坤隅に鐘樓あり

因に云北眞經寺は當寺の東五町ばかり字眞經井の内に在り同宗にして本堂鬼

子母神祠學寮等ありもと宗内僧徒の講學所とせり世に鶴冠井檀林と稱し此處より出つる學徒を鶴冠井派と稱し一時は熾盛なりし由なれといまは昔日の如くならず

長岡都趾

乙訓郡向日町字 鶴冠井

桓武帝延暦三年はしめて都を此國に奠めたまひし宮城遺趾にして古來地の字を大極殿と云ひ土中より往々古瓦を掘り出すこと伴蒿蹊の閑田耕筆にのせまた傍近の字地に御垣本御屋敷宮の前鞠場射場垣内猪隈院島坂等宮城に縁故ある名稱いまに存せり近來其故蹟を考定し大極殿の址を求め本年遷都紀念祭を機とし之を表彰せんとて土地の有志者各自に義捐しまた京都市の補資を得て數畝の地を買ひ一大石碑を立て花木を移植せり其題字は山階宮の御筆なり

願徳寺

乙訓郡向日町 北字願徳寺

一に法菩提院と稱し佛華林山と號す天台宗なり相傳ふ當寺は持統帝の建させたまひし名刹にて往古は法勝寺元應寺と並ひ稱し佛法昌榮の地なり一説に長岡寺はし

此寺なる元龜年間兵燹に罹り殿堂悉く灰燼に委せしか其後天正年間叡山の豪盛僧正これを再建せり

本堂 東面本尊正觀音座像三尺許作者を安置す又方丈には元三大師座像二を安置せり

長岡山陵

法菩提院の北少し西なる岡寺口より上風村に在り桓武帝の皇后平城、嵯峨兩帝の御母藤原氏藤原は乙牟婁の女の御陵にして延暦九年閏三月に葬め奉る所なり近時大に修理せられ松柏の間に櫻楓等を栽ゑ風致を添へたり

大原野神社

乙訓郡大原野村

村の西小鹽山の麓にて山を負ひ南に面し古林中にあり天長二年開院大師藤原冬嗣公平安京は皇后の氏神春日神社と相隔たり不便なるを以て近地に齋き祭り以て皇后の行啓に便にせんと奏請せられしかば仁明帝の嘉祥三年南都より春日の神を此に勧請ありて其社殿をも春日神社に倣ひて造營せしめらる仁壽二年其祭

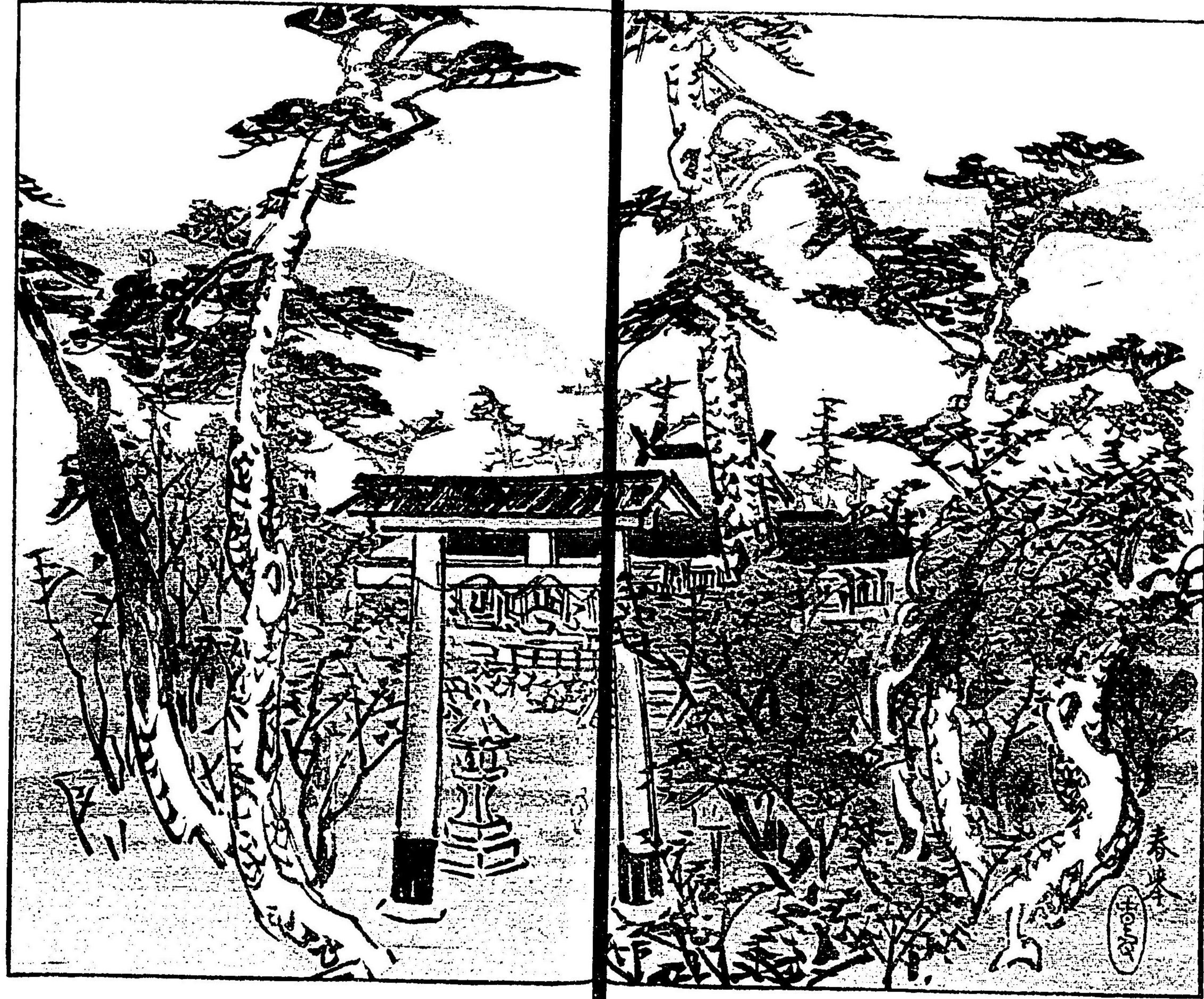
儀を制定し貞觀三年二月皇太后はしめて行啓あり大原野行啓此に始まる此より
 歴朝の行幸啓絶えず神領多く祭事も盛なりしも中世亂離の爲めに一旦衰頽せし
 か今の社殿は慶安年中後水尾帝の勅により建築せしめられ其後幾度も修理し今
 日に至れり社格は中古以來二十二社へ列せられ維新後官幣中社と定めらる例祭
 は三月八日にて勅使の参向あり境内池あり其四周及び島居より内の左右には櫻
 楓を交栽し其他樹木深沈幽靜閑雅最も神さひたり
 本社 南面四字相並ひ共に瑞籬の内にあり椋皮葺にして其構造は大略南都の春
 日神社に同じ祭る所は武甕槌命、甕主命、天兒屋根命、比賣神なり
 拜殿は本社の前に在り左右に瑞籬あり勅使の休憩所は拜殿の東に在り龍王祠は
 門外東傍に在り海神を祭る若宮は第二島居の内池東に在り輔佐の神三座を祀る
 といふ其外末社等略す

花の寺 乙訓郡大原野村

古來境内多くの櫻樹ありしより世人の稱せしものにて在昔は小鹽山大原寺と號
 し四宗兼學の精舎なりしか其後勝持寺と改稱せり元弘年中足利義隆氏當寺に在り



大原野村花の寺



大原野神社圖



寺なりを答ふ因て大に喜はしめ白鳳八年天武帝役小角に勅して開基せしめ延暦
 十年桓武帝傳教大師に諸堂を修補せしめ仁明帝の承和五年更に子院四十九宇を
 建立したまふ寺の今昔殿して本仁壽二年文德帝佛陀上人を大原野神社の別當職に補
 したまひ清和帝の貞觀十年勅願所となれり昌泰年中醍醐帝行幸せらる元弘三年
 足利尊氏方丈庫裡等を再營し天正年間織田豊臣の二氏より諸堂を修造せられ總
 川氏の古文書をも藏せり近年修繕費若干の官賜あり其他多くの喜捨を得て大に
 修理を加へ諸堂を舊觀に改めたり
 二王門 當山の表門にして南面せり仁壽二年の造營なりとそ左右金剛力士は運
 慶湊慶の兩作なりといふ
 本堂 二王門より三町ばかり北に在り南向本尊藥師佛座像二軀して一は二尺八寸八
 分なり小なるを大なる胎内に藏む二重厨子内に安す相傳ふ傳教大師の勅を奉して彫刻する所な
 りと又本尊後光に化佛の小像及び十二神將共に同作脇士に日月天立像三尺二分十二神
 尺三寸を安せり堂内もと小野道風の書勝持寺の額を掲ぐ筆勢俊邁近衛相國家照
 一見之を珍とし寺僧に命して鑿藏せしむ公卿を以て添給及ひ
 護摩堂 本堂の東に接す毘沙門天立像二尺六寸を安せり此堂もとは山上にありしと

不動堂 本堂の西に在り東向不動明王尺立像寸三を安せり寺傳にいふ役小角自作當山開創のとき自ら作る所にして古は當寺の本尊なりしと堂内に役小角像自作を安す岸下には石不動あり

西行庵 本堂の前に在り元は西の山上に在り圓位上人の像を安す其東に鐘樓あり西行櫻は其傍にありむかし上人手つから植ゑをかれし跡にうゑつぎたるものなり西行水は其側にあり西行薙髮の時用ひし水なりと傳ふ

方丈 本堂の東に在り中央に地藏尊を安す傳教の作なりといふ
長嘯塚 方丈の東敷町林中に在り長嘯子木下若狹守勝俊後に長閑居の跡なりとを

當寺淨境は小鹽山下大原野神社の西に隣り地僻にして境靜かなり古來歴聖の翠華を廻らしたまひ名士の樓運せしこと多し西行上人の歌に「花見にとむれつゝ人の來るときはあたら櫻のどかにそ有ける」又長嘯子の歌に「爰もまた炭こそやかね大原やあこかれいてしふる里の山」文治年中西行法師此地に觀遊せり其他古書に散見する所の勝地少からず今其一二を挙げんに「野沼は堂前西山下に在り瀬セツカ和井清水は西界を廻る小流なりとそ又堂前櫻花多く満開のとき寺は花中に埋もれて

花の寺の稱空しからず

弟國故都

乙訓郡大原野村

繼體帝の五年に都を山背筒城城址と考すに遷したまひ又十二年に弟國古弟國今乙訓なりに遷したまふこと史に見えたり然れども其遺址分明ならず古書に大原野社の北に内裏跡と稱する地名あり又同社の一鳥居より卯辰の方二町ばかりに御所屋敷とよふ所あり是ならんといふ或は上羽郡良の方いま御所屋敷と字する土地なりとて諸説紛々として一定しかたけれども今大原野より上羽上里の邊りに亘り其舊址ならんか尙ほ考ふへし因にいふ古來弟國都と長岡都とを混の遺址に其殘瓦を掘出して四郡の區別ははじめて判然せり

淳和帝陵

同上

御陵は大原山の上にあり花の寺の後より西北へ登る十四五町ばかりの所にありて東面せり經か墳といふ近來御修造ありて嚴然たる御陵とはなれり

金藏寺

乙訓郡大原野村字
長軒坂本上

俗に西岩倉といふ天台宗なり寺傳に延暦遷都の時法華經を納め給ひし岩倉のわ
りし所なりと其後加登上人これを中興す徳川桂昌院の由緒を以て寺祿二百石を
寄附し且踏堂を建立せり維新の改革に逢ひ數字の子院を廢せしも今猶は西山屈
指の名刹なり

二王門 長峰より坂路五町許西にあり東向左右金剛力士八尺を安せり安阿彌の
作といふ

護摩堂 二王門を入り北數十歩に在り不動明王一本に不動及ひ四尊を安し其傍
に鐘樓あり

本堂 護摩堂の北に在り南向なり本尊十一面觀音立像六尺一寸楠を厨子中に安
す脇士二十八部衆尺餘三を壇上に安し其他風雷の兩神は堂前長押の上に安す

開山堂 本堂の後に在り開祖隆豐禪師坐像を安せり

經塚 經堂の東北山中にあり石を圓形二段に築き上に高さ四尺許りの石を建つ
相傳ふ是れ往古法華經を納めし所なりと

桂昌院靈舍 開山堂の西北の高處に在り徳川桂昌院殿の追福の爲めに建つる所
なり

客殿 本堂の西傍なる石階を降り右側に在り東面にして構造雅潔其西に庫裡あり
此處より三帖寺に到る徑あり
り此處より三帖寺に到る徑あり

岩藏瀑 本堂の坪谷二町餘に在り當山の西界を流れて三段となれり故に第一第
二第三瀑布といふ

當寺境内は岩倉山の東麓高敞なる所を占ひ北面は秀嶺峻峯逶迤として相連り怡
も六曲翠屏を立て琳宮を圍繞するの觀あり東南は稍開濶にして京都伏見の諸山
及び本郡の形勝を望むへし又諸堂の間に櫻楓多く春秋とも騷客の筈を曳くもの
絶えず

三帖寺

乙訓郡小堀村字灰谷より坂路十五
町あり西岩倉より山路二十四町

天台宗なり長元年中源算上人の開祖にして其退隱の所なり後慈鎮和尚こゝに住
み終に當寺を西山上人大師に附す上人は淨土宗西山派の祖師にして後醍醐帝の
戒師となり勅願所の宣旨を賜ひて官寺となり中興せり在昔は往生院とよひしも

寶祚長久を祈る所に不祥の號なればとて改めて三鈷寺と稱す蓋し當山に三峯あり容ち三鈷に似たるを以て名つけられしといふなり又十等寺も其後兵革相續き諸堂及び四十九子院悉く退轉せしも本堂及び華蓋廟は依然たり天正年間當寺住職見空上人に常念佛再興の給旨を賜はりしも遂に舊時の如くなる能はず以て今日に至れり

本堂 東面近年再興する所なり中央に佛眼明妃畫幅性法像二尺六寸の圓なり圓所を厨子に安し左壇に寶冠釋迦二座三寸二尺右壇に阿彌陀二座長心同上共其他天台菩薩兩大師の像共長一尺三寸倚三寸金色不動一尺餘大日如來一尺餘等を安す佛壇の右厨子に西山上人の像を安せり

方丈 本堂の北に在り東向亦近時建つる所南壇に抱止阿彌陀如來立像三尺四寸を安す當寺古縁起にいふ宇都宮賴綱入道蓮生常に生身阿彌陀を拜せんことを願へり一日佛前に念誦して覺ゆす閉目す時に紫雲中に三尊二十五菩薩の示現を見る須臾にして空に歸らんとしたまふ蓮生其餘情を惜みて擁き留め覺めて是を觀るに年來信仰する所の本尊なり依て世人抱止如來と稱すと云々縁起は西三條道華蓋廟 當寺の西南隅善峯寺に到る途上に在り西山善惠上人の厝なり元は當山

半腹灰谷村より上にありて上人を葬りし所にして一寺を創し華蓋寺と號せしを建長年中宇都宮蓮生法師其傍に多寶塔を建て改めて觀念三昧院と稱せしか星霜を経て廢絶し其後此處に遷し堂宇を建てしなり
當寺は西山の半壁に在り風光明裕寺後松杉森々として靜閑なり寔に修道の靈區といふべし

善峯寺 乙訓郡小鹽村

天台宗にして後一條帝の御宇長元三年源算上人の開基にかゝり西國三十三所の一なり相傳ふ源算此山に登り石上に坐禪すること七晝夜忽然一人の老翁告くるに此處に闍若を開くべき旨を以てす然るに險阻にして如何ともなす能はず一夜群猪來りて地面を平坦にす終に三尾四谷を分ち寺院五十餘宇を建設す云々と中世慈鎮和尚をはしめ道興慈道尊圓の三法親王及び道玄大僧正も住まれたり世に西山宮御所殿敷跡といへりと稱せり爾後應仁の兵燹に罹り悉く灰燼に委し現時の堂舎は多く維新前に建營するところ其莊嚴園郡に比類稀なり
坐禪石 小鹽村より當山に登る阪路七曲の中程に在り開山上人登山のとき

観念坐禪せし所なりといふ

樓門 本堂の前壇に在り東面金剛力士像尺五許運慶の作なりとそ

本堂 樓門の西高き所に在り東向本尊千手觀音八尺は行圓法師の仁弘法師に命

し作られし所にして京都華堂の觀音と同材なりと脇士二十八部衆尺三を安す

經堂 八稜造りなり本堂の北石階の上に在り

多寶塔 二層閣なり同所經堂の東に並ひて大日如來尺餘一を安す

遊龍松 多寶塔の東南隅に在り五叙葉にして北西の両方に枝を張り蜿蜒地を蔽

へる形容によりて名つけしものならん

開山堂 多寶塔の東北に在り始祖の像を安す其傍に護摩堂鐘樓あり

阿彌陀堂 本堂の後に在り慈覺上人作る所の彌陀尊尺餘二を安せり其南に續き

て方丈庫裡等あり

藥師堂 阿彌陀堂の北に在り伽藍中の最高所なりて眺望快活風光絶佳なり本尊

石像藥師は開祖の作なり

釋迦堂 藥師堂の北に隣れり中央に石像釋迦五尺凡を安す

源算上人墓 境内字佛所墓に在り同所に覺快道覺慈道尊圓尊道五法親王の墳墓

あり本寺寶物中絹本着色泰元明王像を最も優秀なるものとす境域は三鉛寺に接し多くの櫻楓を栽る堂前に紅白躑躅あり西山の一勝區といふへし

十輪寺 乙訓郡小鹽村

小鹽山と號し天台宗にして善峰寺に屬せり創立年月詳かならず堂屋構造精巧にして上に瓦制擬寶珠を置く本尊は觀世音たり傳へ云花山法島願祖の初に鑿又地

藏尊を安す染殿后安産祈願の爲め近世花山家の香華院となれり因にいふ本寺の

西境なる林中に寶篋形石塔あり在五中將の塔と稱すれども考証すべき記録なし

其蓋甍齋趾蓋汲等同中將の設けられしものなりと口碑に傳ふれども想ふに地名

の小鹽より附會せしものならん

在原業平母塔 乙訓郡大原野村字

民家の後竹林の中に五輪の石塔あり業平の母伊登内親王の塔といふその傍に二基の石塔あり業平と其父君との塔なりといふ

乙訓神社 乙訓郡宇井内

式内名神大社なり鎮座年月を詳にせず火雷神一に大雷を祭れり旱天に雨を祈り
徴驗ありしことは舊史に見へたり延暦三年都を本郡に遷されしを以て從五位を
授けられ其後貞觀元年に從四位を授けらる一書にいふ賀茂建角身命丹波國神野
伴可古夜日女を娶り玉依日賣を生みたまふ日賣丹塗の矢に感し子を生みたまひ
外祖父の名に因り賀茂別雷と號けたまふ乙訓の社に坐す火雷命是なりといま角
宮と稱し同村の産土神とせり

粟生光明寺 乙訓郡乙訓村宇

報國山または念佛三昧院と號す淨土宗西山派の一本寺にして建久年中熊谷蓮生
法師創めて此地に草庵を營み其後西山上人之を増築し其師法然上人を開山と
なし身は第二世と稱せり縁起の略にいふ上人滅後十六年叡山の衆徒念佛宗の繁
茂をねたみ彈撰集を著はし隆寛律師のもとに送る隆寛また顯撰集を述へこ
れを反駁す山徒大に憤り三塔に告知し大衆蜂起して奏請して隆寛を遠流に行ふ

又上人の墳墓を發かんとの評議ありと聞き徒弟特綱に石棺を葛野郡太秦に匿す
明年安貞二年正月石棺より數條の光明かゝりやき進に粟生野の方を射たりければ
即ち當山に茶毘し舍利を拾ひて廟宇を建立し淨土一宗の宗廟とす云々四條帝の
とき勅して光明寺の號を賜ふ正親帝永祿年中繪旨に光明寺は法然上人遺厝の靈
地可謂淨土根元之地云々門内石碑に鐫めり淨土宗西山派の巨刹なり

本堂 東面法然上人自作糊張座像二尺許りなるを安す傳へいふ上人四國に左遷
の時母氏消息の故紙を用ひ船中にて造るところと左右脇壇に聖德太子熊谷蓮生
坊を安す又軒さき謂の彫刻は左甚五郎の作といふ六尺より力丈まで廻廊
阿彌陀堂 東向本堂の北に在り本尊阿彌陀佛立像六尺七寸ありて往復すへし
僧都一千牀の彌陀佛を作り江州堅田の水邊に堂を建て安置し堅田の千牀とて著
名のものなりしか末代散逸したるを蓮生坊一牀を得て回國の日も常に負ひ巡り
暫も身を離さゝりしを晚年此山に籠り安置する所なり

祖廟 本堂の後山上に在り東面せり内に石塔婆を建て其下に法然上人の舍利を
納む傍に蓮生坊の塔あり
深心院 祖廟の北に接す本尊は見真大師糊張の立像を安す蓋し其自作なりとい

ふ世に著名なり

方丈 東向本堂の南に在り中央に釋迦佛立像四尺許を安す故に又釋迦堂とも稱せり初めは金光院に安置せしか故ありて當寺に移せり御鉢の釋迦とて世に名高し寺棟起に當寺の盤尊釋迦佛時々結縁に頭陀を行したまふ依て御鉢の釋迦と號す云々ともあり

石棺 釋迦堂の前に在り法然上人を埋葬せし時に用ひ火化の後空棺として保存せしものといふ傍に老松一株あり紫雲松といふ

講堂 方丈の南庫裡の東の方に在りて西面せり文珠を安せり東南の二方に學寮あり北方に監督寮あり一宗僧徒の佛學を講論する所なり

閻魔堂 門前の側に在り閻魔院と號し閻羅王を安せり

當山地域は西山の麓にあり幽雅寂靜にして市塵に遠さかる全山松樹蔚然として翠色滴るか如し近ころ櫻楓等を雜植し秋晚霜錦燦爛目を奪ふ又地位高所にあれば浴内外の山水城市一々指掌すべく祖廟よりの眺嵐最も佳なり

長法寺

乙訓郡乙訓村字長法寺

粟生の南三町はかりに在り創造年月詳かならず開祖は千觀内供相模守國教良の孫にして天台宗なり本尊觀世音坐像尺餘を安せり寺寶に唐筆の絹木涅槃像尺許五寸強を藏せり釋迦牟尼佛涅槃に入りて後再たひ金棺より出て其母摩耶夫人に見ゆる所の圖にして千二百年以上のものなりといふ

寂照院

乙訓郡奥海寺村

本上山奥海印寺と稱す嘉祥の初め權少僧都道雄の開創に屬し眞言宗なり元慶年間清和法皇入御したまふこと舊史に見ゆ往時子院十字ありて定額の大寺なりしも今は衰頹して本院のみ存せり

二王門 南面金剛力士尺八を安置す運慶の作なり

佛殿 南面せり本尊は千手觀音立像三尺許を安し壇の四隅に四天王立像三尺許をかたを排立せり

乙訓寺

乙訓郡乙訓村字今里

著名の古刹なれども其開基詳かならず延暦四年廢太子早良親王此所に幽閉せられたまひまた弘仁年中僧空海別當に補せられしことあり其後寛平法皇宇多脱屣

のはしり行宮となしたまひしより法皇寺ともいふ宗旨は眞言なりしも中古寺僧
論争の事あり足利義満南禪寺の僧伯英に命じてこれを裁定せしめ此時より同寺
に隸し禪宗となりしか近世徳川桂昌院殿の由緒により諸堂を重修し眞言宗に復
せり

本堂 南向弘法大師坐像三尺許俗に合休大師と稱すを本尊とし左に興教大師坐像
三尺許俗に合休大師と稱すを配し右に理源大師坐像三尺許俗に合休大師と稱すを配し
を安せり

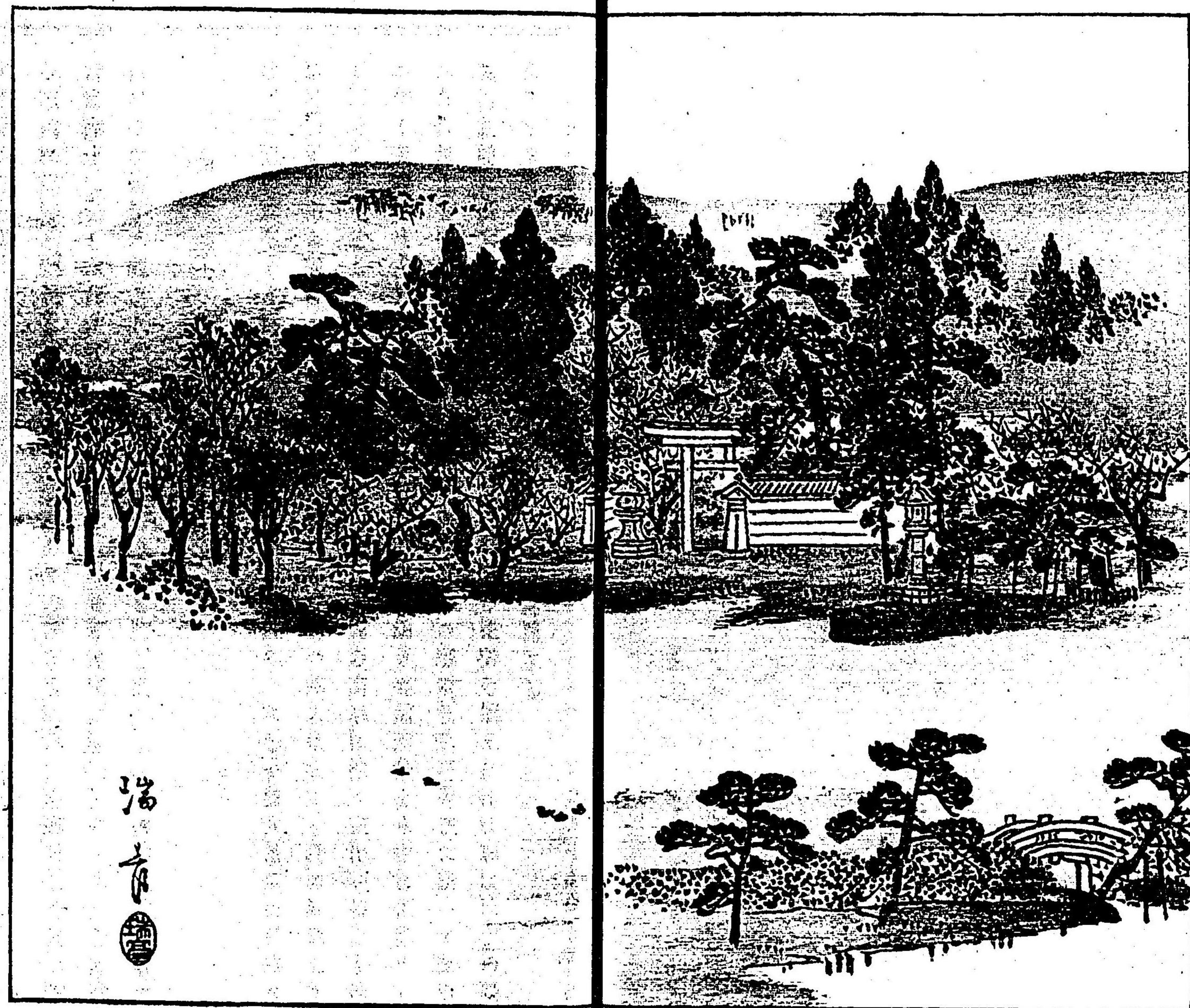
不動堂 本堂の東に並へり不動明王を安す其東に方丈庫裏等あり又本堂の前に
鎮守の小祠あり八幡宮とよへり

長岡天満宮 乙訓郡乙訓村字

社傳に據るに往古弘法大師の開基なり眞言宗の精舎あり世々徒弟等住職したり
しよし菅公幼年のころ長岡に閑居せし在原業平卿を音つれかりく伴ふて此精
舎にあそび詩歌管絃の催しなどあり昌泰四年菅公謫遷のとき寺僧別れを惜み淀
より鶴殿のあたりに送りしとき菅公自から小照をうつし授けたまふ菅公薨去の



長岡天満宮圖



瑞
音
印



この地に祠をいとなみ其の眞影を安置したりと、と星霜かさなりて寺院は荒廢したれども菅廟は儼然として存し都人參詣の絶間なし

境内社前に廣大なる池塘あり側らに數百株の花樹を植えたれば春は梅櫻の咲きみたれ堤上香雲彩霞をひらからし夏には著名の躑躅、杜鵑花、碧波に映りて燃ゆるか如く美觀いはん方なし秋の末に紅葉の霜に飽き碎錦團霞を水中に倒影するなと四時の眺め飽くことを知らず、特に地形は長岡の高阜に據り東山一帯より南は鷲峯山等諸山を望むへく春晩菜花の頃滿地布金の眺めはまた一段の好風光なり池邊二三の旗亭あり酒を呼ぶへし實に西郊名區の一にして都人散策の勝地なり

楊谷寺

乙訓郡 淨土谷 海印寺村

白河帝の御宇水觀上人の開基にして柳崑山と號し世人これを柳谷觀音と號す宗旨は淨土に屬し本尊千手觀音立像六尺許左右に將軍地藏、毘沙門天の二尊像を侍せしむ境内に楊柳水獨鈷水等の名蹟あり古來この觀音は眼病に應顯著しと云ひ傳へて遠近來り祈請するもの甚だ多し

土御門帝陵

乙訓郡海印寺村大字 金ヶ原

承久の變土御門上皇阿波に巡狩し寛喜三年同國板野郡の離宮にて崩御したまひしを火化し奉り天福元年御骨を御母后承明門院の金原法華堂に納め奉る是れ其處なり近年大に修造を加へられたり

神足神社

乙訓郡新神足村字 神足

延喜式に載たる古神祠にして齊衡元年官社に列せらる鎮座曆年詳かならず本社古兵衛の社の邊りに在り中例祭は六月は改曆前五日なり神足村の産土神なり本社 南面祭神詳かならず木居宜長壽は越津山時足神社内に古代の石造狛犬一對及び同石額一面を納む甚た古雅なり社前の拜殿は近年新築する所なり

石鳥居

本社の南に在り神足神社の傍は大勳位山階晃親王の筆なり

勝龍寺城址

乙訓郡新神足村字 勝龍寺

文明年間畠山義就の築くところなり一書に畠山氏の後松山池田天正年中山崎合戦のとき明智光秀敗朝して此城に入る其後廢壞すれども殘壘剩隍は神足村に踞りて今尙は存せり

圓明寺

乙訓郡大山崎村字 圓明寺 西北字 山寺

醫王山と號す開基創建ともに詳かならず本尊は藥師如來座像二尺餘 聖德太子作 脇壇には地藏菩薩を安す 當村往古は上山崎とよび九條光明寺公山莊を此地に設け 歴代相傳へ後捨て佛刹とせられしならむ在昔は莊嚴美麗の精舎たりしか 建武應仁の兵亂を経て今は蕭條たる山寺となれり 當寺本尊を山寺の藥師とよへるは土人の俗稱なり 又舊境内に一條相國實經公の墓あり

葛原親玉墓

乙訓郡大山崎村字 圓明寺

親王は桓武帝第三の皇子にして母は參議長野卿の女なり今案するに圓明寺村に親王の墓と稱する所二あり一は官道字小 泉川の西南に在る一堆の丘壠なり一は同所の西北即ち小倉神社處 竹林中に一小祠古來小倉神社の儀ありと云こわり此邊を

総て葛原とよへり二者其孰れか是なるを知らず

小倉神社

乙訓郡大山崎村字
四明寺

當社創建年月詳かならず上古は延喜式の大社なりしも現時は郷社にして近傍數村の産土神となり例祭は五月舊四日新五日にして神輿二基あり
本社 東面祭神は大山祇命にして春日四座の神を合祀す拜殿及び能舞臺ともに本社の前に在り皆茅葺にして構造甚た樸質なり石華表三所あり其他攝末社等の小祠あり

天王山

乙訓郡大山崎村

天王山は本州の西南端に屹立して山勢雄偉東北は九重の紫闕を望み西南は浪華の金城を瞰め河山泉岳脚下に朝し攝江播海陸裡に落ち近畿の勝區は一々指掌すへし風光絶佳にしてひかし延曆帝の聖詔に山河襟帯自然作城とのたまはせしに徴すれば當山の如きは南端の門關にして實に金湯の堅りなるへし故に古來英雄の此の要害を争ふもの少からず峯上今に城砦の跡あり元弘建武の頃赤松一族の

義旗を揚ぐる所にして文明年間山名赤松等城を築けり其後天正中豊太閤大義を唱へ明智光秀を討ち又近くは大政復古の際勤王諸士の此所に於て會桑の兵と戦ひ衆寡敵せずして自殺せしは世人の知る所なり或書に豊太閤當初此山に城を築かざり故に此山に移されし由を記せり故に記して後考をまつ
招魂碑 元治甲子の變真木保臣等十七名殉難の所なり天王山上石鳥居の傍にたてりまた諸士の姓名を題する碑石十七基を聯立せり此題名の碑は元は山下雙寺の前に在り後ち爰に移せり

酒解神社

乙訓郡大山崎村
天王山經頂

延喜式に自玉手祭來酒解神社は名神大社にして一名山崎神社とあり鎮座年代詳かならず天神八王子を祀る天王山の名もこれより稱せしならん例祭は五月八日にして神輿二基あり今は當村の産土神となれり

観音寺

乙訓郡大山崎村

妙音山と號し眞言宗にして創建年月を詳にせず雍州府志に本尊観音は行基の山崎大渡の橋を架するとき祈願の爲めに自から彫刻せしとて俗に橋懸観音と稱す

云々とありその後大に荒廢せしを中世木食上人これを再興し元治の兵燹に又烏有に歸し近年漸次新築して大に殿堂の莊嚴を加へたり又當寺に安置せる觀喜天は靈驗ありとて京阪二市をはしり遠近の參詣者多し又寶藏の金剛筆といふ山崎橋造の畫は最も珍らしきものなり

本堂 異向石鳥居より坂路を上り屈折して數百級の石階を拾ひ堂前に達すへし堂は舊攝州山崎村なる西觀音寺俗に谷の關を廢せしを以て其遺材を移し昨年新築する所なり本尊觀音立像五尺許聖德太子の作といふを安せり壇前左に二重の小塔あり五尺内に舍利を納り右の厨子に大日を安す

聖天祠 本堂の西南に隣れり即ち當寺の鎮守にして中央厨子に觀喜天を安せり祖堂 聖天祠の東南に在り弘法大師の畫影を安す其傍に浴油堂あり佛饌所なり其他方丈庫裡假書院寶庫茶所等あり

當寺は天王山の半腹に據り下は渡江に臨み布帆風に飽きて中流を駛せ漁唱棹歌前岸に相和し雨奇晴好よろしからざるなく四季の風光盡くる時なし殊に前面清沼數十頃紅蓮を種ゑ荷香南風に薫するときは眺望はまた一段なり境内十二勝ありとも累す

寶積寺 乙訓郡大山崎村

世に寶寺といふ一に山崎寺と稱す補陀落山と號す眞言宗なり相傳ふ聖武帝の本願に依り神龜四年中に天平建立し行基を開祖となしたまふ其後一條帝の御宇寂照入道江定基大之を中興し後小松帝の嘉祥年中に至り定觀寺となれり在昔子院十二字ありしも星移り物換り今は衰頽す然れども院宣古文書數十通を藏む那中屈指の古名刹たりまた當寺に小野道風畫の古額あり又有名なる寺寶打出小槌は俗に龍神の化現し來りて聖武帝に獻せしものなりといふ

二王門 東南に向ふ左右に金剛力士作者未詳を安す

三重塔 門内右側在り大日如來作像未詳を安せり

本堂 塔より西北に在り異の方に面せり中央に十一面觀音聖武帝立像六尺七寸の脇士に不動毘沙門各立像六尺はしめは行基の作なりしを安し又外に大黒天尺許三沙門像行基弘及ひ堂外に寶頭留像大像三尺六寸行基の作にしてを安せり又閻魔大王像は山崎村谷の閻魔堂の廢せしときこゝに遷しよといふ堂の右傍に鐘樓あり

九層石塔婆 堂前に在り聖武帝の御塔なりといふ

妙喜庵 乙訓郡大山崎村

當初は山崎宗鑑三郡支那の榎みし草庵なりしかいつの程にや東福寺に屬し濟家の僧これを守り禪宗となれり本尊十一面觀音を安す天正年中豊公資積寺を本營とせられしときつれゝの餘り當庵に曉まれ千利休此所に茶を點し獻り若室今に存せり又其傍に一株の老松あり拙摺と稱し其名高し

離宮八幡宮 同上

清和帝貞觀初年に僧行教大和國大住の豊前國宇佐より奉祀する所なり此地に晉て河陽の離宮ありしにより名つく其翌年また雄徳山に遷座すといへとも猶ほこゝにも祭りしものなるへし明徳年中足利義滿の神領制書に東は圓明寺西は水無川を限る一に往古の例に従ふ文字あり在昔神殿の殿格なりしを想ふに足れり舊社殿は慶長年中豊臣秀頼の再營にしてはなはた美觀なりしも惜むへし古來廢藏するところの文書記録と共に元治元年の兵火に回祿し現在祠宇は近年新造するところにして僅に其遺址を存するのみ

本社 南面祭るところは男山八幡宮に同じ

石島居 官道の傍に在り當時の遺物は但この一基あるのみ離宮八幡の傍は行成卿の筆蹟なりといふ

關戸祠 乙訓郡大山崎村 關戸町

城攝境の北官道の左側に在り北面せり祭神は詳かにせず相傳ふ往年此所に關門あり關戸院と稱すとこれ其遺趾ならむ一書に斯社はしめは水無瀬川の北岸陸時の國界に在り一年洪水の爲めに漂ひて此處に來る山崎土人社を建て關戸明神と號し終に山城の南境と爲すとあり

與杼神社 紀伊郡淀村字下島羽より淀 に入り桂川の末流を渡る

一に淀姫神社と稱し又水垂神社の名あり社記に應和年中僧千觀肥前國佐嘉即ち佐郡河上神即ち與度日を勸請す時に村上帝勅して正一位淀姫大明神の號を賜ふ云々是より先清和帝の貞觀元年從五位を授けたまふこと舊史に見えたり明治六

年郷社に列せらる水垂下津納所の産土神とせり祭日は十月廿三日にして神輿二基あり

本社 南面豊玉姫命高皇産靈神速秋津姫神を祭れり拜殿攝社末社及び石鳥居等あり祠宇壯麗なり又神地は淀川の北岸に在り上下の船中より望めば古木鬱蒼の間に儼然たる社頭を認め風光頗る佳なり或る説にいふ荒木田社は即ち本社神林を稱せりと古來多く歌人の吟詠に上り古名勝の一なり

羽束師社

乙訓郡羽束師村字志水村

延喜式内の大社なり社傳に雄略帝の御宇に奉祀し天智帝の朝に大織冠鎌足公をして再建せしめたまひ桓武帝延暦三年本郡長岡へ御遷都に當り重修を加へたまふ平城帝大同初年神封四戸を定めたまひ同年中齋部廣成奏聞して攝社十一字を建て貞觀元年風雨を止めんことを祈らしめたまふとあり著名の神廟なり今は郷社に列らる例祭は四月中巳日にして神輿二基あり志水古川、菱川、種瓜四ヶ村の産土神とせり

本社 南面祭神は高御産日神、神御産日神の二柱なり

攝社 本社の後後に在り一字十二座を合祀せり又拜殿は本社の前に在り其他神輿、庫、鳥居等あり

羽束師社 即ち本社鎮座の神林にして古歌に多く詠めり古來著名の社なり

名越高家墓 羽束師社南二町許古川村字血はらに在り高家元弘年間官軍と戦ひ此所にて敗死せり

實相寺

紀伊郡上島羽村

法華宗にして京都妙覺寺に屬し開基を大學大僧正とす本堂は南面なり松永貞徳の墓との前に在り來り展するもの多し

戀塚

同上

戀塚は偈文覺か袈裟の爲りに築くところなりといふ今戀塚寺の内に高數尺の石卒塔婆あり表に渡邊左衛門尉源渡妻袈裟御前秀玉善尼裏に天養元年六月文覺上人開基戀塚根元の地嘉應二年建立とあり

鳥羽離宮跡

紀伊郡鳥羽村字竹の山

鳥羽上皇寛治元年此に離宮を造營したまふ境域を芹川の北より竹田に限り百餘町に及ぶ内に北殿南殿田中殿馬場殿車殿春の山秋の山等ありしか今は舊蹟も荒廢し四邊田圃の字に宮殿の名を留むるのみ

眞幡寸神社

紀伊郡下鳥羽村

或書に眞幡寸神は蘇神なりとあり社傳に云ふ古來本社の徽章に日月星三光の章を用ふるは御蘇の遺制を襲ふなりと祭神は息長帯日賣命八千弋神の二座に當時の御蘇を添へて鎮齋せり桓武帝美都の日國常立命を附祀したまふ醍醐帝弘仁七年官社に列せられ白河帝寛治元年始めて御幸あり更に伊勢八幡加茂松野稻荷春日の七社を合祀し給ふ世に城南總社また城南宮とも稱す孝明帝文久三年石清水神社行幸のとき風箏を當社へ投げさせたまひ慶應四年幕兵の京師に入らんとするや官軍當社の社に據て防戦し大勝を奏す今上天皇親征浪速へ行幸のとき御駐營あり現時府社にして式内眞幡寸社と公定せらる

本社 南面息長帯日賣命八千弋神を祭り後に國常立命天照大神磐田別後別雷命大山咋命天忍穗耳命彦火瓊杵命宇氣毛智命天兒屋根命を合齋せり境内に若宮八幡宮三照宮大國主命天満宮及稻荷住吉春日粟島四神等の小祠あり前殿拜殿神樂舍神輿食給馬舎等備らざるなく近年修補を加へ結構莊嚴なり

竹田

紀伊郡竹田村

都下東洞院油小路等を南下して伏見に到るの順路なり昔は眞幡寸の庄と呼ひ今も其名を安樂壽院北門の傍に遺せり御製などありて古名所の一なり

不動院

同上

當院は大治五年鳥羽帝の勅願により創建するところにして興教大師に勅し本尊不動明王を刻せしめたまふ皇城鎮護の爲めに北向に安置し北向山不動院の號を賜ふとそ其後近衛帝久壽年間再興し田園寺領を給附したまひ殿堂幾々たる名刹なりしか應仁の亂に悉く兵燹に罹り寺領も湮没し舊記も散失し其沿革を詳かにせず歴朝の御崇敬淺からず數次の回縁に再建又は修營を加へられたり現在佛堂

は正徳二年靈元帝の叡慮にて東山帝の故宮を賜ひ移築したるものなり近時大に修補を加ふ本尊不動明王を安ずまた美福門院御墓は當院門前近傍に在り

安樂壽院 紀伊郡竹田村

鳥羽上皇保延三年城南離宮の北殿を棄て佛刹となしたまひ覺行法親王を導師とせられしは即ち當院なり宗旨は眞言にして古義新義を兼ね
本堂 境内北位に在り在昔五層の塔なりし故に本御塔とよへり本尊胸邊に卍字あり卍字阿彌陀と稱す此堂の下に白河法皇宸筆の法華經を藏り當院の鎮護といふ又藥師堂には行基菩薩藥師如來を安す
五輪堂 鳥羽法皇經を藏む三昧佛は釋迦彌陀藥師にして弘法大師の作なり
新御塔 本堂の南に在り始め五重塔なりしを改め作りしより本御塔に對して新御塔と稱せり本尊地藏菩薩は美福門院の持佛なりしとそ脇壇に鳥羽帝宸影並に美福門院八條女院の御影を奉安せり
二重塔 豊臣秀頼の建立にして阿彌陀佛を本尊となせり
本院の優等なる寶物は絹本着色孔雀明王像なり

菖盤梅 鳥羽法皇離宮に於て園菖を禁しその器を集めてこの樹下に埋めたまひしより此名あり故に寺中は古來園菖を禁したりといふ

白河帝陵 紀伊郡竹田村

竹田村の西字淨菩提院に在り外國の内更らに池を繞らし陵前松櫻多し

鳥羽帝陵 同上

安樂壽院に在り石棚の中に石塔一基を立てらる

近衛帝陵 同上

鳥羽帝の陵と同一く安樂壽院境内に在り中に寶藏形二層塔を建つ結構最も莊嚴なり

金光寺 七條通東洞院東

寶蓋山と號す空也上人の開基にして世に一夜道場又七條の場道ともいふ一遍上

人諸州を行脚せしとき久しく此處に錫を留め日毎に踊躍念佛を勤修したり是より時宗と改まりたりとなむ本尊は阿彌陀佛にして勢至觀音の二尊脇士たり脇壇に一逼上人淨阿上人等の像を安す傳へいふ此地はむかし佛師法橋定朝の邸址なりしと

南部

宇治町

久世郡に在り本標より凡四里

久世郡の東北にある市街なり南北の要衝にあたる歴史上に著名にして于遲菟道氏すぢうさみちなど書けり菟道稚郎子うさぢのわいらこ皇子此地に居たまひしことありしより宇治宮と稱せり皇極帝近江比良宮に行幸の時行宮を造らせたまひ宇治の都といひしことありむかしは南都より東國に通ひ又京都に入る要衝にして事あるの日必ず此橋を拒守せしことなど数々歴史に見ゆまた土地の幽靜にして且つ山水の風景に富みたれば城西嵯峨野と同じく古來帝王貴族の離宮別業を營み高人隱士の幽栖せしもの甚た多かりしこと人のよく知れるところなり酒樓客舎は概ね川に臨みこれを建つ中につき菊屋萬屋等最も著はる

製茶は全國第一にして其名内外に著しむかし明惠上人宋より茶の實をもとめ栴尾山と背振山とに蒔きしを後此地にうつしたるより始まる近年貿易のひらくに隨ひ其産出製造最も進めり其紀念碑として平等院に大碑をたてたり又朝日燒あ

り茶人の好むところなり

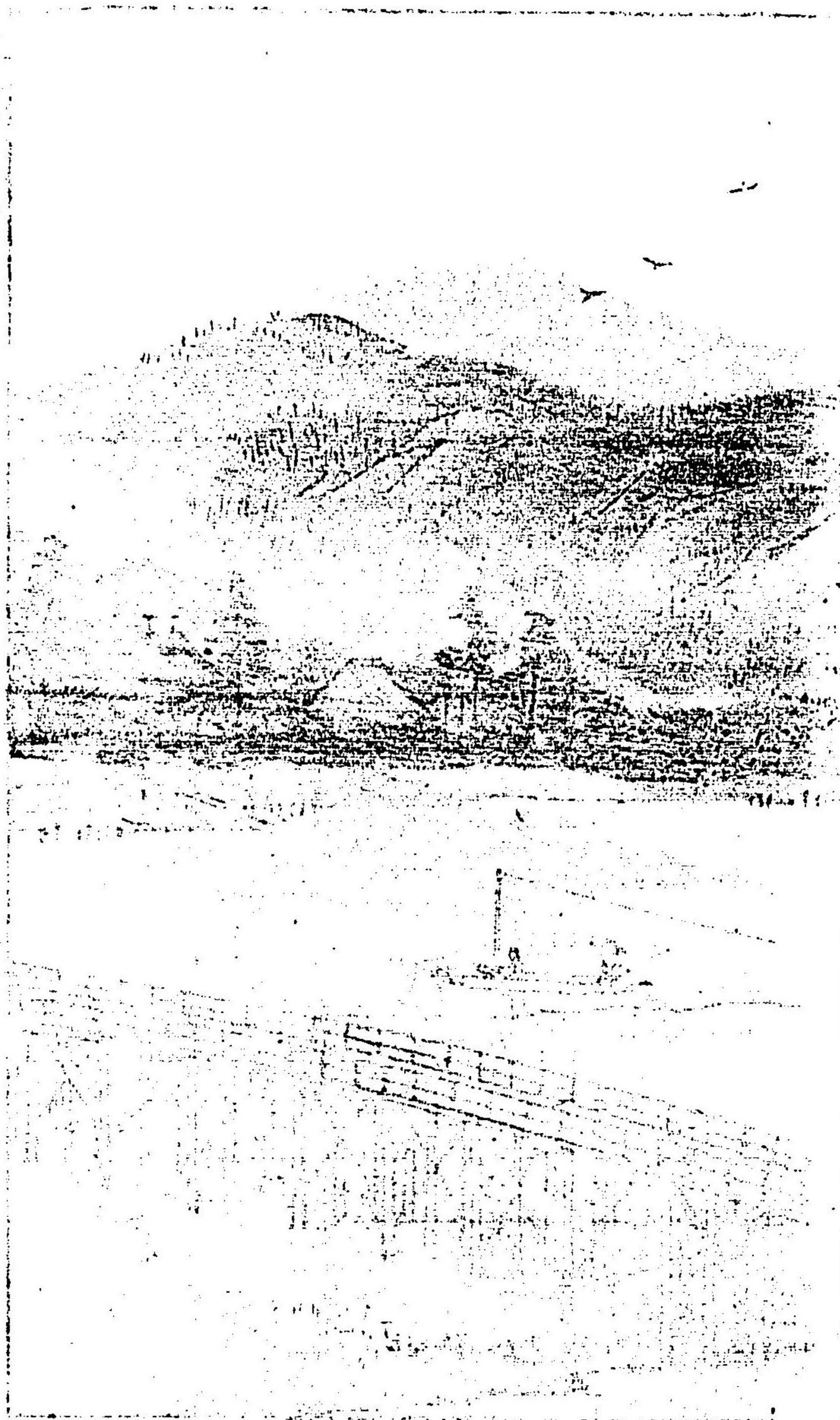
宇治川

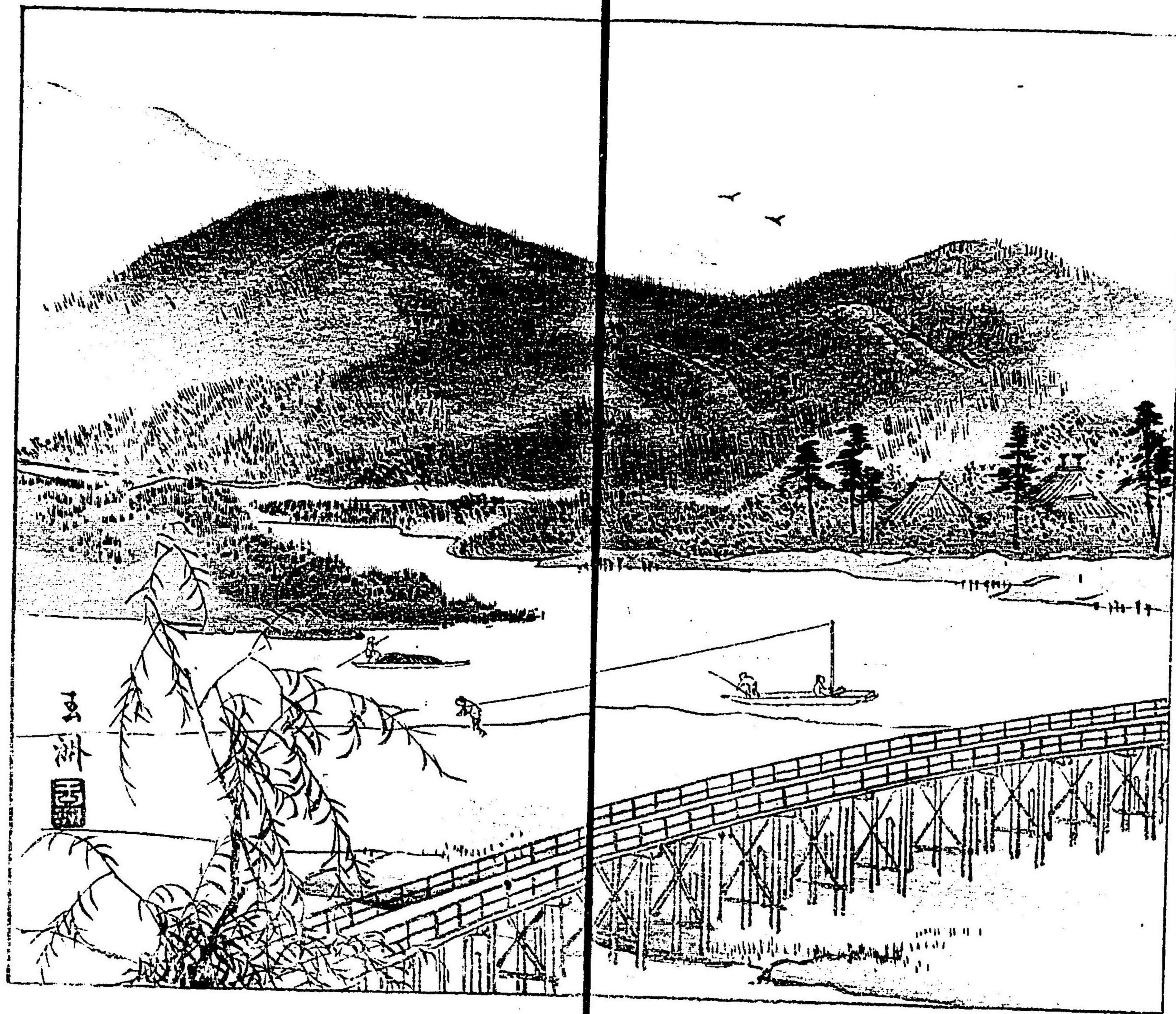
琵琶湖萬頃の波積水濺蕩し溢れて出づるもの唯宇治川の一路あり上流を勢多川となす江州勢多橋のあたりより石山の麓を過ぎ河身たちまち狹窄して流勢頓に急に千曲萬折兩山屏立の間を流過し宇治橋にいたり山形開けて水勢漫に渺々たる大川となり伏見を過ぎ淀川に合す山水清絶奇絶名状すへからす山城の大川は西に桂川あり東南に宇治川あり桂川は明姫を以て勝くれ宇治川は雄壯を以てまざる共に相下らぬ名勝といふへし就中宇治橋より勢多川にいたる數里間は巨巖怪石龍蹲虎伏急流これに逢ふて怒る變態萬狀今左に著名の勝景一二を擧ぐ

橋小島崎の址 橋の西なる橋姫社のありし邊なりといふ佐々木梶原先陣をあらそひしところなり

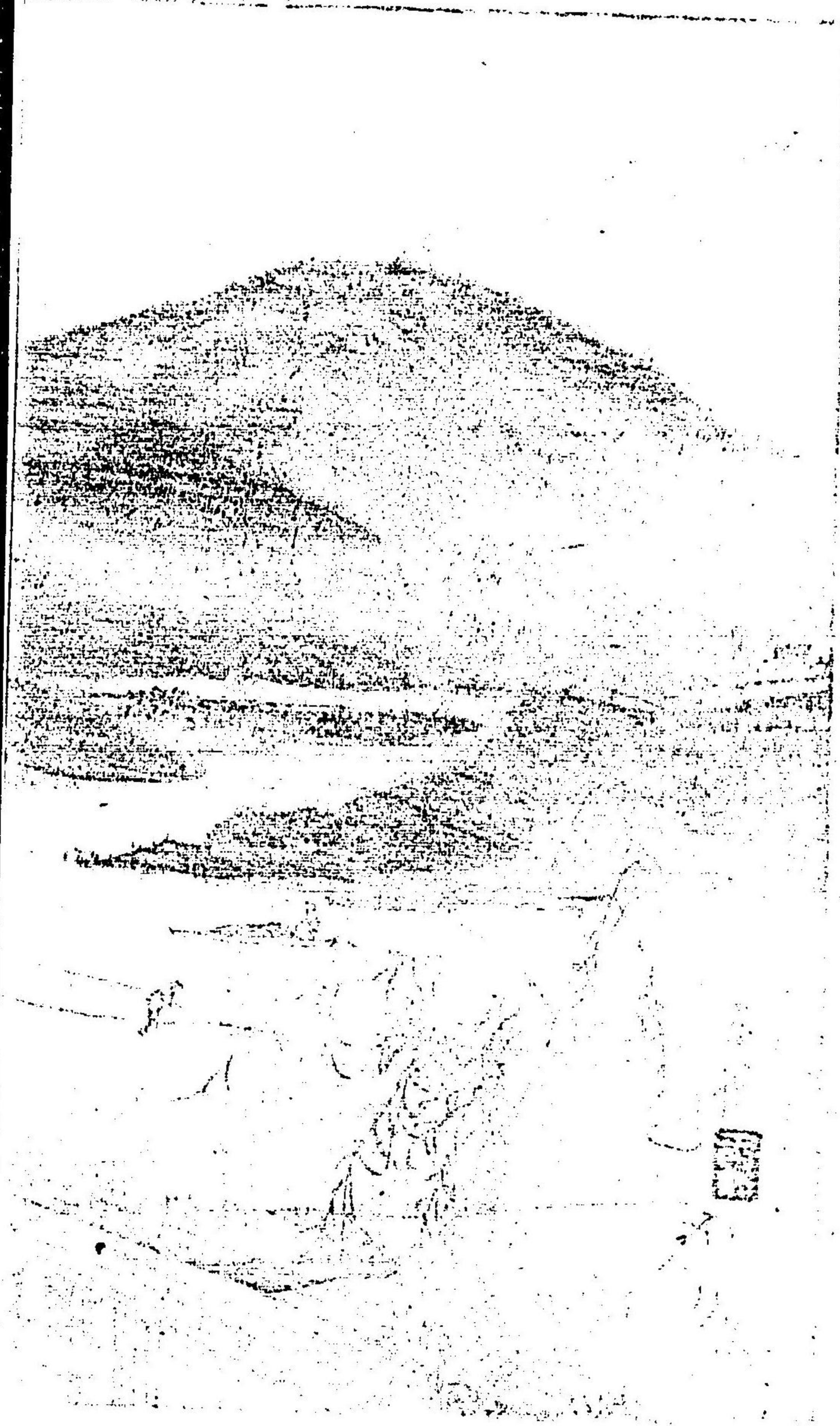
浮島の塔 むかし宇治の綱代のありしところといふ弘安九年十月高五丈の十三重の石塔をたてし事帝王編年記に見へたり

宇治川の古戦場 此地は京都に事あることに必争のところにて源頼政の治承の





宇治橋圖



役源義經の義仲を攻めし軍承久の役延元の役其他幾回の戦争のありし舊址にて
國史に詳なり人麻呂の歌に物部の八十氏川のあしろ木にいさよふ波のゆくへし
らすもと今はたゞ混々長流逝て歸らざるを見るのみ此外山吹の瀬供御の瀬など
の名勝多けれど略す

跳鹿灘いさご 宇治橋より上流凡一里ばかり跳鹿橋の上にあり大水滔々巨石に
挟まれ縮みて一丈許となり奔鹿これを過ぎ一躍して險也へしといふにより跳鹿
灘と名つく又上ること数町にして浙米灘あり奇石錯落して流勢一頓怒號澎湃碧
水碎けて白沫となる浙米汁を瀉くに似たるよりかくは名つけしとそ

宇治橋

宇治川に架す木製にて近年改造せり大和街道に當れり此橋は大化二年丙午僧道
昭始めて造りしところにて事は宇治橋の銘に詳なり其碑は橋寺の内に立てたり

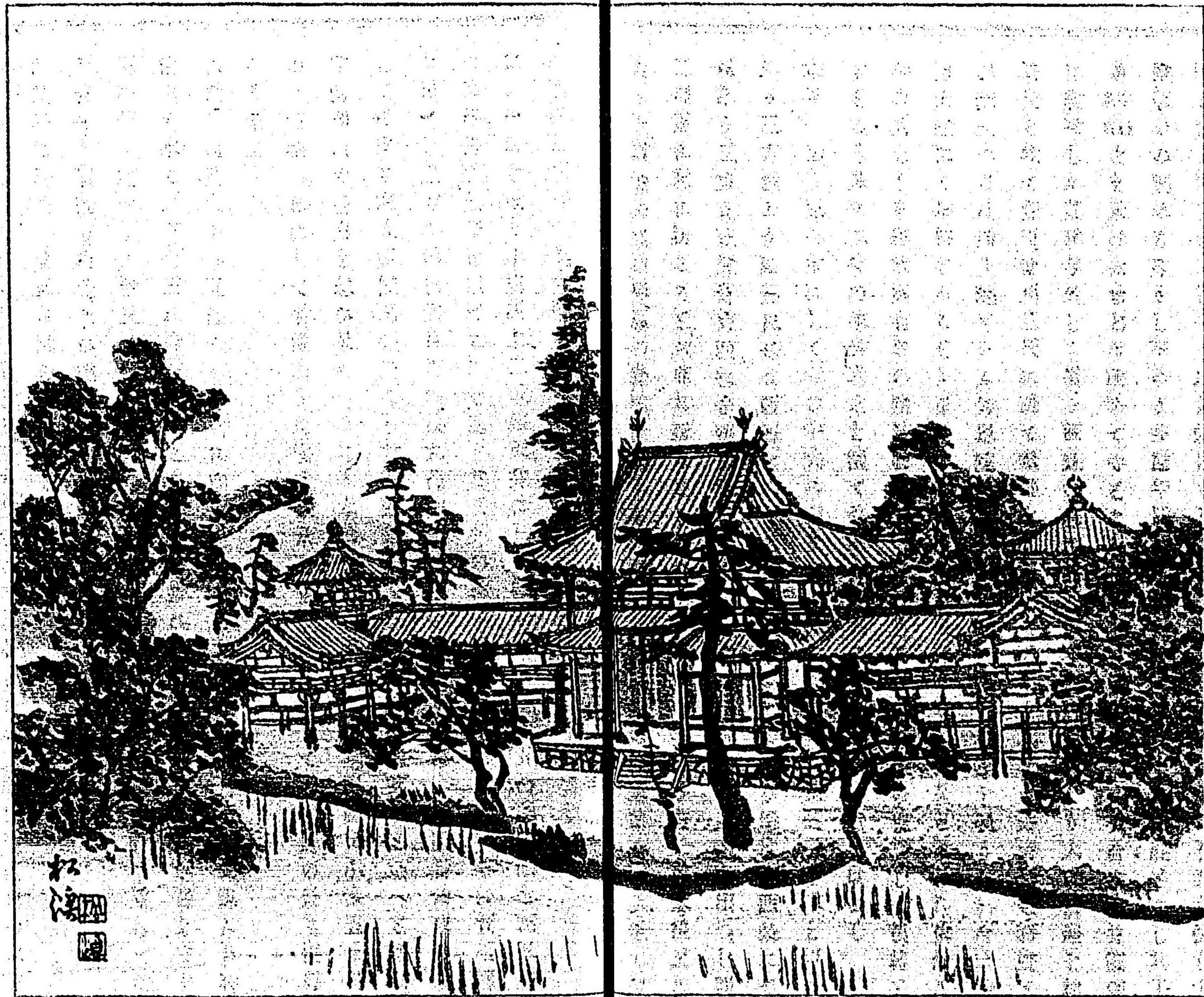
平等院

宇治橋南

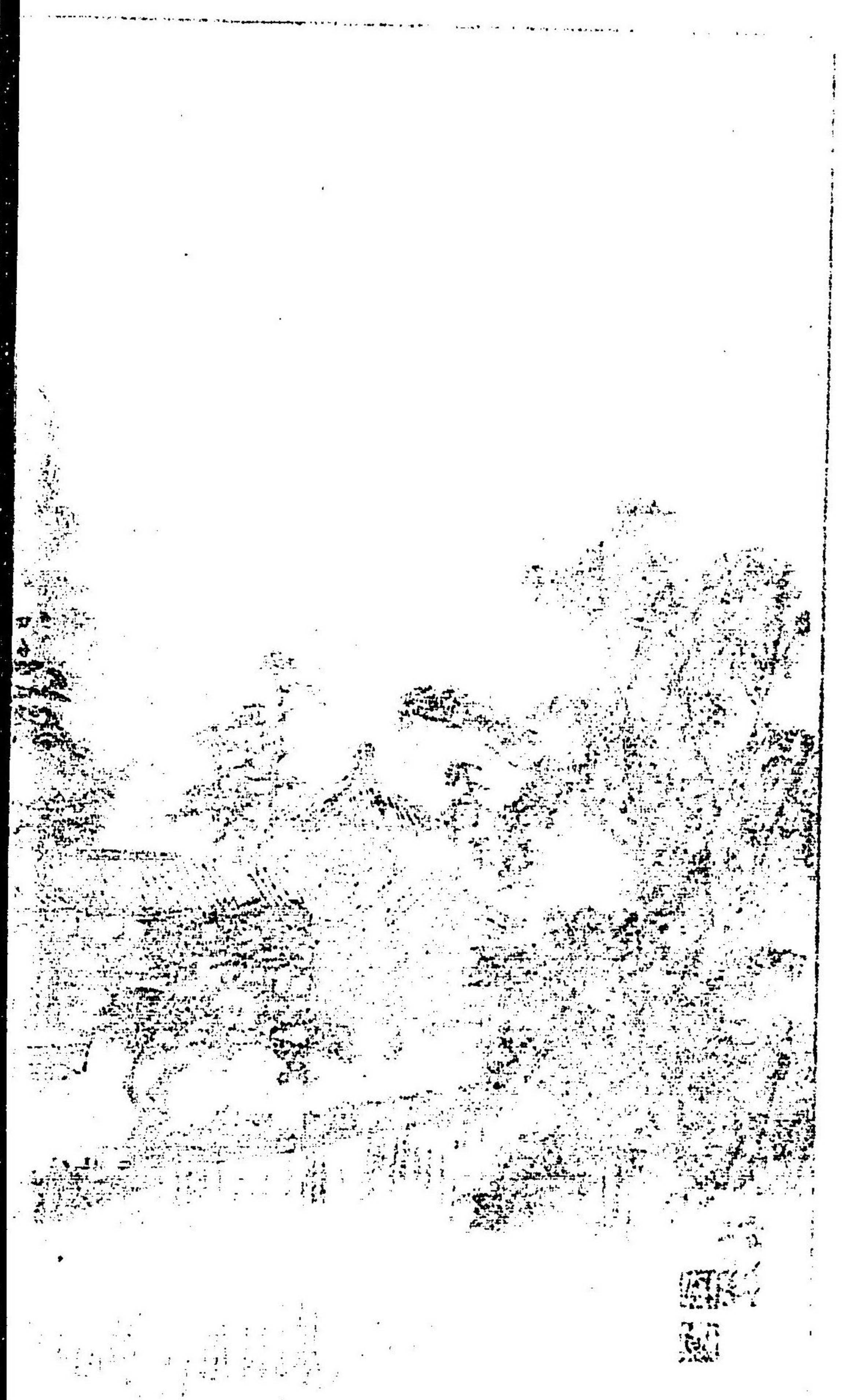
左大臣藤公富貴を極め已に六條に河原院を營み奢麗を窮極し又栖霞觀を嵯峨に

建て更に此地の勝をトし別業となせしか其後陽成帝行宮を建てたまひ世に宇治
 院と稱す宇多帝朱雀帝これを離宮としたまひしこと古記に載せり又六條左大臣
 雅信公の別業となりし事あり長徳年間藤原道長御堂請ひて其山莊となし其子頼
 通字白之を承け永承七年改めて寺となし平等院と號す宗旨は天台宗三井圓滿院
 に屬せしか荒殘年久しく屢々回祿に罹れり明應年間近衛家より大に修理を加へ
 塔堂を建て豊臣徳川二氏に於て修理を加へしことあり其天台の寺は最勝院とい
 ひ浄土の寺は浄土院といふ知恩院に屬す二寺輪番にて寺務を執りしか今は殆ど
 浄土院にて維持することゝなれり本堂即ち鳳凰堂は幸に其災を免かれ依然八百
 年の久しきを經我國有數の建築物にして好古家及び美術家の稱贊して模範とな
 すところ殊に海外の來游者之を觀て我國古建築の美妙に驚かざるはなし
 本堂 即ち鳳凰堂にして寺の中央にありて北面す堂廣方五間圓楹十本を以て成
 れり三方縁あり廣五尺基は版石を以てこれを築き瓦を裝せり屋は東西築にて搏
 風造り二重瓦屋屋背東西に金銅鳳凰を對立す左右に步廊あり東西に出つ七間廣
 二間更に北に折ること六間其折るところの上に小樓を架せり方二間堂後又步廊
 あり十間餘全體の形、鳥の雙翼を張り尾を曳くか如し故に鳳凰堂といふ平安城大

平等院鳳凰堂圖



松
海
印



内裏時代官府の制大略此式なり此堂も蓋しこれに倣ひしものなるへし内部は南位に佛壇を設く小組折上二重格天井にして楣間には二十五菩薩の像を刻せり総て黒漆丹雘五彩を以てこれを飾り其天井の格子及び佛壇には嵌するに寶玉螺鈿を以てし三方の扉板羽目板には九品淨土の圖を畫けり其繪は繪所長爲成の筆にして經文も左大臣俊房の書なり其莊嚴華麗なる今は大に剝落すといへども當時宇治關白の勢力を想ひ見るべきなり本尊は丈六阿彌陀如來周圍に小像五十餘軀あり定朝の作にして名像なり此堂は永承七年の構造にして古建築の最も優等なるものなり

釣殿 内門にあり瓦屋にして北に向ふ是も數百年の建物にして世に傳ふ昔時宇治川の水この下を流れ源融公はこゝに釣を垂れしと現時春日作觀世音を安す

扇の芝 傳へいふ源三位賴政自殺の所なりと一片の碑は觀音堂畔に立ちて故跡を表せり賴政の鎧兜及び畫像後世描くも等は寺に存せり

駒繁松 鎧懸松 共に故跡の傍にあり

阿字池 本堂の前にあり惠心僧都の造るところなりといふ昔は宇治川の水をひきしといふ

鐘樓 境内に在り鐘は名品にして日本三鐘の一なりといふ
阿彌陀水 鐘樓の下壇にあり又法華水は方丈の西竹林に在り

橋姫祠 久世郡宇治町

神祭并に鎮座歳月定かならず初め二社雙ひ立ちしか一社は洪水の爲めに漂流せしとそ古今集さむしろに衣かたしき今宵もやわれをまつらん宇治のはし姫の歌に依りて祭神につき種々の説あれとも其詮なきよし定家卿もいはれたり

縣神社 久世郡宇治町
上福町縣の森

平等院の後門に當り社あり祭神は木華開耶媛命、永承中關白賴通公の勸請にかゝり往時平等院の鎮守あり木葉開耶媛又名吾田津姫といふにより吾田社と稱せしを訛して縣社となりしといふ例祭は五月五日にして京阪人の參詣熱鬧を極む

巨棕神社 久世郡小倉村

本社は延喜式に見へ春日の神を祭る當村の産土神なり九月十日例祭を行ふ

伊勢田神社 久世郡小倉村
伊勢田

祭神詳ならず延喜式社にして貞觀元年正月從五位下を授くること國史に載す社格は村社なり毎年九月九日を以て例祭を行ふ

巨棕湖 久世郡小倉村

一名大池といふ東西凡三十二町南北二十七町周回三里餘ありむかしは宇治川の流域こゝに滙して巨浸となり南の方淀川に連る萬葉集の歌に「おはくらの入江とよむなり射目人のふしみの田ぬにかりわたるらし」とありてむかしより名高きところなり豊太閤伏見城造營の時大堤を築き湖河を區分しまた觀月橋より南小倉村に至り湖の東部を横斷し道路を通し大和街道上古は宇治橋を渡り平等院の西かきなりとなしたるより湖面は劃して二分となる西部最も潤く湖水渺茫として風光明媚なり春風の朝秋月の夕は西湖二十四橋の風景を想見せしむ東部は湖面小にして水稍淺く蓮花水に滿つ七八月盛開の頃舟を買ふて湖中を徘徊するに雲錦萬丈清香衣を撲つ花瓣殊に大にして徑尺餘に至る葉の大なるものは三尺餘なる

あり例年水高き時は舟中に坐して遠近の花を看るへきも早天には舟中に立つも花葉屑を没することありまた河骨白菱同時に花を水面に泛へ幽娟愛すへし看遊の客は前夕より夜涼に乘し伏見にいたりて一泊し拂曉の花を賞するものあれども大抵は午前二三時より車を驅り曉行するもの多し堤上の茶店に命し扁舟を僦へは一隻にして凡五六人を容るへし旅店飲食店は不十分なれども宿泊飲食等に差支なし

又この湖中魚鱒に富み漁法も種々あれども看遊の序にはハス釣り最も興味あり前夜より幾百となく釣竿を流し置き翌朝竿を拾ひ上くれば五六寸の銀鱒獲刺として釣に上る大抵一竿に一尾を得るまた消夏の一樂なり但し前夜より漁父に命しかかされは間に合ひかたき事あり

久世神社

久世郡久津川村大字
久世小字鷺坂小録

日本武尊を奉祀す鎮座年代詳ならず中古若王社と稱したりしか維新の後社號を改む明治六年郷社に列し久世村の産土神とせり例年十月七日祭典を擧ぐ鷺坂 社地は即ち往古の小篠峯鷺坂に當れり大和本紀に日本武尊薨りたまひし

とき白鳥となりて西方さして飛ひゆきて此所にとまり給ひしよししるせり故に鷺坂といふと昔の大和往來にて名高きところなり萬葉集の歌に山しろの久世の鷺坂神代より春はもえつゝ秋はちりけり又しらとりのさきさか山の松かけにやとりてもかな夜はふけにけりぞあり

長

池

久世郡富野村字
長池

國史にいほゆる栗隈の池の址にして南北三町あまり東西二町ばかり名を長池といふ村名これより起れり池は今田となり橋に水を留むるのみ相傳ふ往古此池に毒蛇住みて人を害せしか一異人來て之を斬り衆庶その堵に安せしとぞ

玉津岡神社

久世郡井手村
玉津岡

社傳に天平三年橋諸兄公二社を創始せらる一は椋本天神と號し社なり一は高天神と稱す即ち式部本社祭るところは下照比賣命高彦根命素盞鳴命少彥名命天兒屋根命なりと舊八王子神社と稱せしか近年今の社號に改めたり明治十一年井手石垣水無の諸村に分祀せし春日田中八坂天神四社を合祭せり

玉水 級喜郡井手村

玉水の驛は大和街道に當りて稻市街の形をなせり豊公のとき開きたる道にして右は東の方井堤の里を通行せしといふ橋を渡りて東十間許に清泉あり即ちいにしへの玉水なり橋諸兄公此河邊に多くの山吹を植ゑられしといふ諸兄公の別業を以上村盛と呼ぶ其後祖斷廢近時まで存せり又同所南上村の東に小丘ありて地を大門口といひしを此等又此川に一種の蛙井堤の蛙住みて夜ふくるはとに鳴きつれたるはいみしう心も清みて物哀なる聲にてなむ侍りけると鴨長明の無名抄に記せとも今は其聲を聞くこと稀なり

井手玉川 同上

我國名所六玉川の一にして一に井堤川といふ東二里許和東より流れ來りて井堤里を過ぎ玉水驛を西に流れ木津川に入る川底高くして平時水なし故に土人水無川と呼ぶ又同村に玉水あり傳へいふ諸兄公遺愛の井なりと形は堀汲せりといへば存せり色葉集に往來の人これを拵ひて渴を醫し賞めて玉水と稱せし由を記すは此處なるへし和歌には之を玉の井と詠して古來秀逸抄からす

有玉山 級喜郡井手村

井手村の東なる山間にあり有王谷ともいふ有王とは諸兄公の曾孫にて公の別荘のありしにより此に住す依て有玉山といふと元弘の難後醍醐帝の六波羅追兵のためとられたまひしところなりといふ

光明山 級喜郡井手村東南

光明山寺のありし所なり今鳥居と稱し高倉宮の在る地は昔此寺の鳥居ありし舊址なり山上に國見嶽あり西面廣瀾眺望に佳なり國見觀音と名つくる一字なり本尊觀音佛は地中より發現したるものなりといふ

高倉宮 相樂郡福倉村字鳥居東

後白河帝第二の皇子以仁王高倉宮と稱す治承四年源賴政と謀りて平氏を滅さんとし事敗れて此に薨し給ひぬ今民家を距る六町許の地に形はかりの一社を見る

は是れ土民か王の怨魂を吊らひて建てしものなり

蟹満寺

相樂郡初倉村字
綺田

一に紙幡寺といふ普門山と號し宗旨は眞言に屬す本尊釋迦佛八尺の座像を安す
寺傳に百濟傳來なりといふ靈容圓滿にして天智時代の餘風を帯ひ本邦釋尊像中
希有の名作なり又寺傳に云昔この郷に住める某一人の娘をもちけるか幼少より
普門品を誦して慈悲ふかく一日野に遊ひて郷人の蟹を殺さんとしけるを買ひと
り放しやりぬ後此女蛇の爲にみいられしを何處よりか多くの蟹來りて其蛇を
殺せしかは其父喜ひて一寺を建て蟹満寺と名つけ殺されたる蛇を此處に埋め
りとなん縁起奇なればにや人の能く知れる寺なり

神童寺

相樂郡高麗村大字
神童寺

眞言宗にして一に金剛藏院といふ本尊藏王權現八尺の像は金精明神童と化現し役
行者と共に作りし像なりと寺傳に見えたり神童寺の名稱これより起れりといふ
開山堂には役行者の像四十二歳の時自作を安し子守勝手の兩社並に金精の社は本堂の東

二町許にあり

境内風景頗る佳なるより吉野山に擬して北吉野の稱あり伊賀の上野に達する道
こゝに由る祠童越といふ

泉橋寺

相樂郡泊村

行基菩薩天平十三年泉川に橋を架せしとき供養を修するため建立せし所なり今
泉橋院と號す律宗にして本尊地藏立像二尺五寸の作聖觀音立像一尺二寸を安せり別に一
體の石地藏あり行基の手に成る千餘年の古佛にして非常の大石像なり大平肥に
古津の地藏といふは是なりとと聖武帝行幸の時泉川の橋にて拜觀の民萬歳を呼
ひしとは此橋の事なり往古は堂宇善美なりしか今僅に残れり

高麗寺舊蹟

同上

木津町より川を隔て北十餘町の田間にあり用明帝の勅により高麗の高僧惠辨
此に住せりと舊と稀有の巨刹にして七堂伽藍皆備はり輪奐の美を極めたりとい
ふ今尙其殘壘の形を存し又其邊より殘礎古瓦を出すことあり此邊に三韓入朝人

の館ありしか今詳ならず催馬樂に狛のわたりの爪つくりとあるは此わたりのことなりといふ

木津川

木津川一に挑川といふ垂仁帝の時大彦命の武埴安彦に戦を挑み給ひし古跡なるより此名ありといふ又山背川、輪韓川の別名ありて古歌には多く泉川と稱せり其名最も高し萬葉集に楯なめていつみの川の水尾たえずつかへまつらむ大宮所の歌あり其他名歌いと多し水源は伊賀國山田郡より發して淀川に入る川底すへて白砂にして水緑に砂明に白帆點々其間にかゝれるなど得もいはれぬ景色あり天平年間行基菩薩此川に橋を創設し供養を營みしこと泉橋寺の古記に見えたり中世久しく木津の渡延喜式に神井渡といは此なりといふとて舟を用ひしか近年更に木橋を架せり

木津町

和樂郡

町村制實施の際木津梅谷市坂鹿背山を併せて木津町といひ戸數七百有餘郡役所警察署養蠶傳習所等あり山城國南方の一繁華地にして大和街道の一驛なり奈良

を去ること二里弱京都をさること九里弱、西木綿を産業とする者多し始め泉里と呼ひしか聖武帝の御宇南都大佛殿造營のとき諸國より運送する材木此處に着せしより木津の名起れりといふ

一の坂念佛石

和樂郡木津町南

山城大和の國境を一の坂といふ坂の南に土俗の土講座と呼ぶ所あり是れ即ち念佛石なり相傳ふむかし南都大佛殿再建のとき法然上人導師となりて供養を營み此石上にて念佛の功德をあらはしたりといふ

加勢山

和樂郡南部

一に賀世又鹿背に作る山上に城跡あり世に木津の城といふ誰の築きしものなるか定かならず古歌に都いてくけふみかの原いつみ川かは風さひし衣かせ山後鳥羽帝の御製に泉川かは波しろく吹風にゆへすしきかせの山風の如き古來名歌甚多し

瓶原のぼり 相樂郡木津町東北

木津より川に沿ひ笠置山に行く道の左にして岡田郷の西にあり北は海住寺の山を負ひ南は木津川に臨み其間數村あり古跡甚多し彼のみかの原わきて流るゝ泉川いつみきとてか戀しかるらむの歌より童幼も能く知る所なり古は三日原三香原養原御鹿原等に作り今瓶原と書けり

瓶原宮址 同上

續日本紀に和銅六年同七年天皇養原離宮行幸の事を記し又天平十一年三月甲午天皇行幸の事あり此ころ離宮のありし所なり宮殿の跡いまだ定かならねども其郷中には大礎石又千年前の古瓦いつる所ありその舊址たるを知るへし

國分寺 相樂郡宇河東

瓶原郷の中に舊と國分寺村あり其邊巨大の礎石古瓦多く出つといふ

相樂頓宮址

江家次第に齋宮京に歸りたまふとき奈良坂を過ぎ相樂頓宮に至り給ふことを載す今の蛸蛉井といふ所其遺址なりといへども定かならず

恭仁の都故址

續日本紀に天平十二年十二月右大臣橘宿禰諸兄先つ發して山背國相樂郡恭仁郷を經畧す遷都を擬するを以てなり云々又曰く天平十三年正月癸未朔天皇始めて恭仁宮に御して朝を受け給ふ宮垣未だ就らず繞らすに帷帳を以てすと案するに此都は鹿背山以東を左京とし以西を右京とすとあり今其地につき舊址を尋ねるに國史の記するところと合はぬ所あるか如し此都は僅に數年の間にて間もなく荒はてたるものと見ゆ萬葉集にみかの原くにの都はわれにけり大宮人のうつりいぬればの歌あり其後は和歌の名所となり古今の詠頌る多し

海住山寺 相樂郡瓶原村大字

聖武帝の勅願所にして往古極めて旺盛なりしこと舊記に見ゆたれども其開基歲月等を詳にせず中興の祖解脫上人は深く後鳥羽天皇の御歸依を受け替て其德行を嘉みしたまひて七種の靈寶を賜ひしことも寺傳に見ゆたり宗旨は眞言に屬し本堂には本尊十一面觀音を安し地蔵毘沙門を侍せしむ又奥院にも十一面觀音を本尊とし左右に解脫上人慈心上人高麗の二像を安す本堂の西一町許に二基の塔を見るは是れ兩上人の塔なり又文殊堂には本尊文殊菩薩と共に役行者の像を安置す一尊に行者を當寺の開祖其他三重塔に安せる佛舍利は招提寺の始祖鑑眞和尚漢土より齎して聖武帝に上りたるものなりといふ
寶物に絹本着色畫釋迦文殊普賢三幅外古佛畫の見るべきもの多し

岡田離宮址

相模郡賀茂村

賀茂岡田は同じ地なり古書には岡田の賀茂と稱せり續日本紀に曰く元明帝和銅元年岡田の離宮に行幸したまふと今舊址詳ならず

岡田鴨神社

同上字北村

郷社岡田鴨神社は建角身命を祭れり延喜の制に大社に列なり月次新嘗新年接上の官幣に預かれり貞觀元年從五位上を授けたまひしこと古史に載せたり風土記の畧にいふ可茂社を可茂と稱するは日向香之高千穂峰に降り在ます神にして建角身命なり神倭磐余彦尊即ち神武の前軍を將ゐて大和葛城嶺より山城國岡田の加茂に遷り山城川に隨ふて下る葛城川と加茂川と會所に坐ます云々とありし岡田の加茂とは此地なりといふ

淨瑠璃寺

相模郡小田原

また九品寺といふ寺傳に天元年間多田滿仲の草創にして行基作の樂師佛を安置す其後六十餘年を経て義明上人錫をこゝに留め佛工定朝の作なる阿彌陀佛九體を安し之を本尊とせり二條帝深くこれに歸依したまひて秘密莊嚴院の宸筆を賜ひ又源實朝もこれを崇信して多くの親捨を爲せしことあり古昔は境域宏大堂宇學院も多かりしか漸次衰廢せりされども現存二三の建築は當時のものにして其構造優美古佛像多し

笠置寺 和樂郡笠置村

笠置寺は天武帝の創立にして千百数十年を經し巨刹なり其宗旨は眞言新義にして智積院に屬せり寺傳によるとに在昔天武帝此山に御獵ありしとき俄に最と大なる鹿飛び出て帝に迫れり帝天に御祈りありしかば御馬一躍して其危を免かた給ふ帝大に御喜ありて此山に伽藍を起し其恩に報いんとて其時御したる御笠をとりてそこにおかせ給ひしより笠置山とは名つけしとなん其より寺基を開き堂宇を建て遂に壯麗なる巨刹とはなりぬ山中巨巖大石多く數丈の高に及ふあり乃ち其巖も大なるものを擇ひ其面に佛像を刻し之を本尊と崇め其上に大風を構へ木堂とす其他方丈諸堂燈樓山門子院にいたるまで棟を並へ礎を連ね山上に充滿せり聖武帝の御時良辨僧正此山に於て勅命を奉し秘法を修せし事あり其後一旦衰微せしを解脱上人之中興せりといふ此山は萬山中に突兀として獨峙し直立凡八百尺麓より上ること八町石運羊膺山上巨巖相倚り錯落崩れんと欲す南は大和につらなり北は笠置川に臨み峭絶奇拔の勢ありむかし元弘元年後醍醐帝北條氏の難を避け此を行在所となし給ひしか九月廿九日賊軍の爲に陥れられ一山兵燹



に罹れり爾後荒蕪すること久しかりしか徳川氏已來藤堂家の領地となり箱中興の運に際し山上數個の寺院を營せり其後地廢の爲めに顛倒し幾はくもなく明治維新に及び益々衰頽して山上僅に一寺を存せり今先づ其入口より記さんに笠置村より笠置川の渡笠置の渡といふをわたる木津川此に至り激して深潭となり其水紺碧色をなせり川をわたりて北笠置に入り斜に左し又右すれば其坂口なり下の堂上の堂 古昔は共に堂宇ありしといふ今は僅に一小堂ありて遊人の憩ふところとなる

大門の址 名切地藏といふ大門のありし所なりとそ此邊元弘の戦足助次郎重範の弓勢をあらはししところなり此に元弘忠戦の人名を刻せし大石ありしか地廢に埋れしかは其上に地藏を安せしなりといふ

笠置寺 山下より八町の上にあり古昔は二十餘院ありしか僅に一寺を存し福壽院といふ今之を笠置寺と稱す古昔は寶物も多かりしか中古の騷亂兵火に失せて今は僅に残れるのみ寺の内外花樹をうる牡丹特に著名なり

鐘樓 寺の門外にあり其鐘は建久七年八月解脫上人の鑄しところ高三尺徑二尺二寸細字の銘を刻せり山城國中にて有數の古鐘銅色蒼老音調清亮なり

毘沙門堂 寺の上におり楠公靈夢の徴により信貴山毘沙門天を彫刻して此寺に安置せられしを此に祀りしなりといふ

薬師石 高四十四尺廣三十一尺文珠石は高二十二尺廣十六尺彌勒石高五十二尺廣四十二尺なり是は此寺の本尊にして皆自然の巨巖駢立せるものゝ表面に單線にて佛像を刻したりしといふ元弘兵火に燒け今は彌勒佛のみ隱々として見るへし其前の大石に柱礎の痕あり傳へいふ此大石佛の上に大屋を架したりしか元弘の兵火に災したるなりと其結構雄壯想ふべきなり

虚空藏石 高四十二尺廣二十四尺石面に虚空藏を刻せり嵯峨帝の御時弘法大師求聞持法を修し之を作れり

胎内竇 屋大の巨岩相層なり遊人身をかゝりて其石隙をすく

平等石 胎内竇をすき斜に山頂をめぐりて亂石の間を攀ちて登る平等石は高二十五尺廣三十六尺平かにして登るへし眺望最も佳なり此邊を驥の戸渡りといふ行宮址 山の絶頂にあり其地平坦にして約三百餘歩樹木叢生せり即ち彌勒石の頂上に當れり此所乃ち元弘の行在所址なり

笠置石 行宮址の側にあり薬師石の上に當る天武天皇の御笠を置き給ひし石なり

りといふ山中古跡甚多く奇巖壘々として相望り木鼓石は之を叩けば壘々として鼓の如く搖き石は周圍三十尺の大石にして手を以て之を推せばゆるきて將に落ちんとする勢あり金剛界石胎藏界石は屋大の巨巖にして其間に窟あり千手窟又龍穴といふ聖武帝の時良辨僧正の秘法を修せしところなり貝吹岩は元弘の役此上にて貝を吹き諸軍に號令せしところにして四望壯快全山景色一瞬に入る千手窟は清水千手觀音の出現の地なりといふ此他駒止松菅公冠掛松解脱上人墓など多けれど之を略す

行宮遺址碑 山の西面半腹にあり高二十五尺廣二十尺天然の立石に行宮遺址の四大字を刻す字大さ四尺五寸其左に二品彰仁親王書之七字あり字皆填むるに金を以てす明治十五年地方有志者の發起になれり

宇治町より東南宇治田原郷の口和東を経て木津川の上流に出て又湯舟を経て江州栗太郡にいたる

宇治白川

久世郡宇治町大字 白川

平等院の東南凡二十町にあり南方より流れて宇治川に入る水底すへて白砂にし

て宛然布を曳くか如し白川の名はこれより起る山城に白河二あり此川は京の巽にあるを以て白南河と云ひ愛宕郡にあるを北白河といふ

宇治田原 綴書郡

平等院より凡五十町ばかり東南にありて四面皆山自から一區をなし内に敷村ありこれを宇治田原といふこれより郷の口村をすぎ鷲峰山の下をめぐりて和東湯舟に出て近江の栗太郡にもくへし又南の方布當川に沿ひて木津の上に出つへし四山屹立形状詭異多くは赭石にして草木なし溪谷深阻地勢甚だ險なり其峰頂に登れば西南を瞰下す之を國見岬といふ

天武天皇祠 綴書郡宇治田原村宇治

傳へいふ天武帝龍潛の時近江朝廷の兵を避け東國に遁れ此郷を過ぎりたまふ時土民奉るに糧粟及び燭粟を以てせしに帝手つから粟を土中に埋め我事成らば發芽せんと宣ひしか聽て帝は天位に昇りたまひしに其粟果して發芽し年を経るに従ひ一大茂林となれりと此縁故により當社を奉鎮せりといふ

田原天皇社 綴書郡宇治田原村宇治

光仁帝の御父施基皇子天智帝第二皇子を祀れり然れと縁起詳ならず皇子此地にゐませしによりて田原の皇子といふとそ

禪定寺 綴書郡宇治郡

關白忠實公の創立にして平宗上人の開基なり普陀落山と號す當初は巨剎にして宗旨は華嚴真言を兼ね南都東大寺に屬せしか中世大に荒廢せり其後月舟和尙これを再興し改めて曹洞宗となす本堂は圓通閣と稱し本尊十一面觀音を安し脇佛は文殊普賢二菩薩に加ふるに四天王を以てす又本堂の東に南面せる地藏堂には本尊延命地藏を安す境域山に據り積翠伽藍を蔽ふ南面明豁眺望に佳なり

信西塚 綴書郡宇治郡

少納言入道藤原信西を葬むる所なり信西平治の亂をさけ所領大道寺まで遁れしか其免かれかたさを知り自から土中に埋れしを出雲前司光安來り其首を斬り信

頼に送り遺骸をこゝに埋めしと云信西蓋世の英資を以て敷奇此に終る荒野中一片の塔影に對しては誰か其末路を憐まさらん大道寺の址も此に在り

猿丸大夫祠 縣郡宇治田原村字 眞定寺東奥山田

此地は山澗屈曲別天地を作し靜趣いはんかたなし猿丸大夫の奥山の紅葉ふみわけの和歌を詠したるは此所なりといふも故なきにあらす東に山城近江の國境ありこれより江州戸塚に出つ之を猿丸峠と稱す

金胎寺 相樂郡東和東村字 原山

山は鷲峯山と號し南山城第一の高山にて天竺の靈鷲山に擬し其山の巔に釋迦阿彌陀岳彌勒岳寶生岳阿闍岳盧空藏岳不空岳妓樂岳の名を寄せたる靈區なり白鳳四年役小角はしめて當山に登り巖頭に座して五七日の修法を爲し其後養老六年越の白山の行者泰澄法師その遺蹟を慕ふて登山し七堂伽藍を造營せり東の山腹は即ち二師か密法修験の故趾にして登山の徒必ずこの處を巡拜し俗に呼て行場といふ宗旨は眞言なり

本堂 本尊彌勒佛行基の作を安し開山堂には開祖役行者自作の像を安し又多寶塔には愛染明王を安せり此塔は伏見帝の御建立なりと傳ふ寶物に唐金舍利塔等あり

伽藍殿樓の壯觀は固より舊時の如くならずと雖とも奇峯雄崖の間に架し雲樹陰森殆ど人をして別天地の思を爲さしむ殊に地勢城州中の高山なれば北は京洛の諸山東は琵琶の湖西は志貴生駒金剛の諸巒或は摩耶六甲の蒼翠瀧水淡海の渺茫たる共に一眸の中に收むへし其他山中勝地多く池多輪東眼行道石千手瀧五光瀧降三世瀧鐘懸胎内瀧登岩仙人窟石塔岩舍利石佛岩水晶山熊倉黑白岩安住岩天狗岩龜石兜率瀧老瀧加持水馬足洗水養生芝等著名なり絶頂を空鉢峰といふ泰澄法師遺鉢を埋めしより名つけしと云寶篋塔を建て北斗星の拜所となす又當山は晉て伏見帝の行幸したまひし所にして行宮の舊跡は盧空藏岳にあり

大智寺 相樂郡和東村字 小杉

百丈山と號す禪宗にして永源寺に屬す大觀禪師の開基なり千山の中別に靜境をひらけり

本堂 釋迦佛を本尊とし文珠の像は今方丈にあり別壇に後水尾帝の宸牌を奉安せり

座禪石 ひかし開基大鏡禪師此上に座禪せりと云ひつとふ方丈の東十町許にあり大凡高三十間横幅十七間巨巖にして頂上は截り取りし如く五間はかりの平面あり文殊岩雄峙これと相對す又布引岩あり和東川其間に流る寔に絶景なり

淀町より八幡をへて木津川の南のかた相樂におもひき歌姫越より奈良にあり又木津川にいたり本道と合す

淀城址

久世郡淀町

淀城は始め岩成主税助の築く所にして此に據り織田信長と戦ひしことあり豊太閤の側室淺井氏こゝに住して淀君と稱せらる當時水に臨み茶亭を築き頗る風致に富みしといふ又世に淀の水車といふは此時水車にて淀川の水を轉し城中の便に供したるに始まれりといふその後松平定綱稻葉正知相繼て此に封せられ戊辰の役一部は兵燹にかゝり維新後に毀却せり

稻葉家祖神の祠 天主閣の址にあり近年の造營に係る

八幡町

綴喜郡にあり元郷より五里一丁

八幡山の東麓にあり淀川に近く舟楫の便あり舊時は神領に屬し本郡第一の都會なり町數十一戸數千餘人口五千餘高等小學校警察分署郵便局其他百般商賈を始め旅舍割烹店等大略具備せざるなく古來著名の神廟あるを以て四方の旅客往來を接せり

八幡山

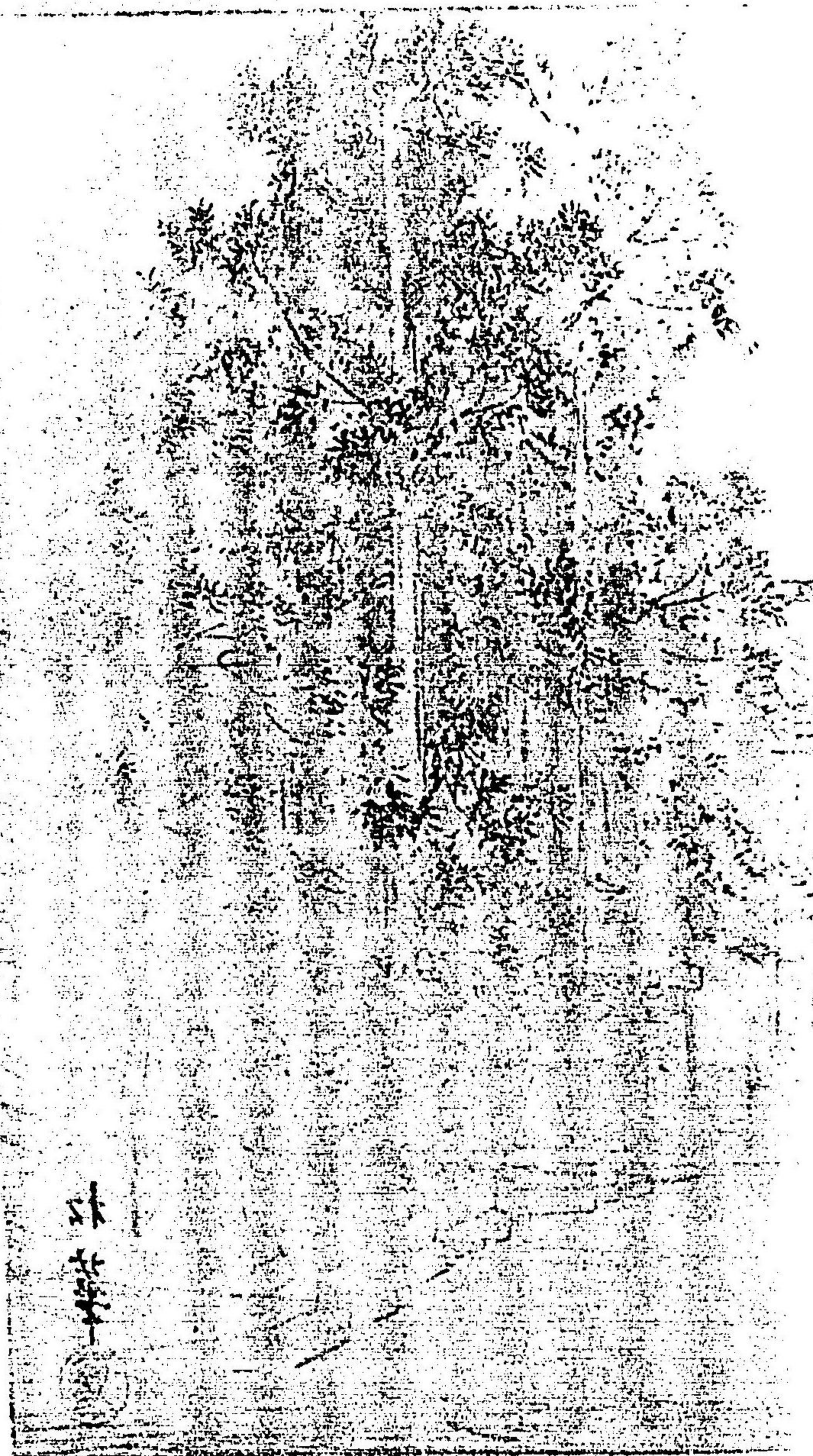
綴喜郡八幡町

男山一に雄徳山に作る官幣大社八幡大神鎮座の靈地なり麓より絶頂に達する大凡十五町京攝の諸山と對峙し淀木津宇治桂の四川は山下を環流し巨椋湖は近く脚底に朝し京都は遙かに眉睫の間にあり山河襟帯の形勝より近畿の山川みな指掌すへく山秀水麗風光爽潤名狀すへからす又南朝以降屢汗馬喋血の戦區となり登臨憑吊の情にたえざるものあり園郡第一の名山なり

男山八幡宮

綴喜郡八幡町男山上

官幣大社にして清和帝貞觀初年宇佐神宮に準し木工細允橋良基に勅して六字の
 神殿を創建せしめたまひ翌年に至つて成れり社傳に初め僧行教豊前の宇佐に突
 し大乘經を轉讀せしに此時大神教を垂れ帝都の邊に鎮座せば永く實跡を守護せ
 ひと宜したまふ行教京に還る日山崎に奉祀せしに一夜靈夢により奏請して此地
 に遷し奉れりと云ふ貞觀十一年新羅の寇賊を祈りたまふ宣命に嘗祭神を太祖と
 崇めたまふことあり朱雀帝天慶五年平將門等誅滅の報賽あり神寶歌舞を奉せら
 る是れ石清水臨時祭の創始なり天祿二年東遊走馬を奉り爾來毎年三月中旬日此
 祭あり終に永式となれり圓融帝天元二年車駕親しく隔したまひ男踏歌の遊あり
 男山行幸の始めなり後三條帝延久二年勅して放生會神幸の儀を行幸に準し神輿
 に扈從せしめたまひ其後恒例となり毎年八月十五日其式ありしか今九月十五日
 を用ひ男山祭と稱しこれを行はる男山祭のこもは祭の中に詳なり後宇多帝弘安四年新院龜山
 本社に幸し神樂を奏し蒙古の寇を禱りたまふ海風大に起り賊艦盡く沈没し天下
 其神驗を仰かざるものなし貞觀以降登極には必ず幣を奉り早災兵亂夷狄侵寇に
 は必ず使を遣はし祈禳したまひ歷朝御崇敬甚た殿なれば世本社を第二宗廟と稱
 す神徳の赫々たる瞻仰すへきなり源賴義義家殊に尊信して武勳を建て其後賴朝



本社



石清水八幡宮圖

兵馬の楯を握り尊崇最も深く諸國に別宮を置き源姓の武士みな氏神となし海内
往く所として八幡神祠わらざるなし徳川綱吉亦大に崇敬を加へ本社を再營し神
封を増加せり又放生會も久しく中絶せしに社僧痛くこれを慨し幕府に建言して
其舊式に復したりといふ大政復古の後官幣大社に列せらる

神殿 南面中央に應神天皇東座に比咩大神西座に神功皇后を奉祀す神殿を内外
二字に分ち其前に幣殿舞殿相連なりまた其前に樓門あり其南を拜所とす皆葺に
檜皮を以てし塗に丹青を用ひ五彩繪金碧燈燭たり内外殿の間に架する鍍金の
雨樋あり黄金の外樋と稱し世に名高し又神殿の四方に木造瑞籬あり腰より上組
格子にして下は花鳥を彫り樓門の左右及び東北西の三面廻廊あり外椽欄干造
りなり廻廊の下石を疊み高さ八尺許りなり

武内社 又高良社と稱す廻廊の内本社の後にあり武内大臣を祭れり

水若宮 廻廊外本社の東にあり菟道稚郎尊を祭る

若宮 本社の北にあり仁徳帝を奉祀せり其東に若宮殿といふあり社記に姫神を
祀るといふ

住吉社 本社の北西にあり祭るところは攝津住吉と同神なり以上攝社なり其外

末社尙数字ありこれを略す

南門 本殿の正南にあり左右に土塀を築きて四方を圍み四方各門あり門前東側に鳩嶺書院神庭羽車舎風箏舎文庫あり西側に社務所神厨等あり第三石鳥居に至る二町許の間西傍無數の石燈籠林立せり

石清水社 本社の東門を出て坂路を下ること八九町許にあり攝社の一にして祭神は天御中主命なり銅に石泉あり屋を設け之を覆ふ清泉混々として萬古涸れず石清水の號の出るところにしてその起原は八幡宮勸進以前にありといふ

狩尾社 本社の西五町許にあり天照皇太神大奈母智命天兒屋根命を祭る舊記に本社遷祀以前の鎮座なりといふ今攝社となれり

御旅所 山下字宿院第二石鳥居と第一鳥居との間に在り神事の時神輿遷幸の所なりもと疫神堂のありし所といふ

高良社 御旅所の傍にあり祭る所二座東間は武内大臣西間は住吉神にして二社にして下の社は玉垂なりとあり攝社の一なりまた相屋殿は第二石鳥居の北に在り神事に際し假に相屋を建て神幸のとき舞樂を奏するに用ふ此外尙舊址古跡等數多あれどもこれを略す

本社は所載は種々あれと其中にて繪卷二卷太刀一口を最とす其他はこれを略す

小野頼風塚

藤原郡八幡町字金剛寺前町

民家の後にあり又女郎花塚も同町南字清水のにあり世に傳ふむかし頼風といふものあり此里に別業を構へて美姬を蓄ふ京なる妻これをさしたつね來るに頼風出逢さうしかはうらみて終に放生川に身を投げて死せり其地に女郎花生出て其花根を含める風情あり頼風これをかなしみ亦水に淪みて死す後人其ことをわはれみて塚を築き入水の所を泪川とよふと案するに古今集の布留今道か女郎花うしと見つゝを行過る男山にし立りと思へばの歌より後人の附會せし物語なるへし人のよく語ることをなれば其大畧こゝに掲ぐ

橋

本

藤原郡男山西蔵

橋本は山城河内兩國の界にして淀河を隔てゝ乙訓郡山崎と相對し淀河乗船の客こゝに上陸し男山神廟に詣つるもの多し地は京阪街道に添ふ一小驛にして市坊清潔眺望もまた佳なり往古山崎大渡しに架けられし橋のありし所にして橋本の

名は此に初まれりといふ今も上下の渡しあり山崎と通せり

正法寺

綴喜郡八幡町字志水

徳迎山と號す浄土宗にして洛東百萬遍に屬す開基は圓誓上人天台宗なりしか中興聖譽上人の説法後奈良帝の聖旨にかなひて勅願寺となれりといふ
本堂 南面阿彌陀佛悪心の作を本尊とす額正法寺と題せるは門に掲ぐるものと共に後奈良帝の宸翰に係る

祖師堂 本堂の東にあり圓誓聖譽の像を安せり

妙勝禪寺

綴喜郡田邊村字新

正應年中大應國師の草創せし寺にして康正の頃一休和尚之を中興す故に禪宗にして紫野大徳寺に屬す

本堂 東に面し釋迦佛を本尊とす文珠普賢その左右に侍せり

開山堂 本堂の後に東面し中央椅子に凭り拂子を持つは大應國師の像なり

酬恩庵 一休禪師常寺に住せり方丈にかゝくる酬恩庵の三字中央祖影堂の間に

掲ぐる慈揚二字の額皆一休の筆なり庵中にある禪師の像は生前良工に命して之を作らしめ鬚髮は生身のものを以てし竹篋を持って椅子に憑り長さ三尺五六寸許なり

一休和尚墓 禪師入寂せられ遺骨を方丈の東南に葬りて石塔を建て覆ふに堂宇を以てす生平所持の笠杖を此處に藏せり近年皇子の墓に列せり

筒城故都址

綴喜郡西賢寺村字多々羅西北五町許

南北山を以て圍み方三町許の疆土を都谷と稱す是れ筒城の故都址なり筒城は今綴喜に作る古紀に仁徳帝三十年九月皇后宮室を筒城の丘の南に興して之に居ると繼體帝五年十月都を山背の筒城に遷すとあるもの皆此地を指す山城國に於ける皇居の創始なり山上に段々良不動堂あり弘法大師の作なりといふ

祝園神社

相樂郡祝園村字宮ノ前

俚俗春日明神と稱す貞觀の始め從五位を授け賜ふ延喜の制に大社に列し月次新嘗祈年の幣に預る明治六年郷社に列せられ祝園村の産土神にして祭日は十月十

七日なり相傳ふ祝園は即ち波布理晉能にして崇神帝の御宇彦國珥命（珥）地安彦を輪
韓河に破り斬獲甚た衆し死屍水上に浮ふ故に羽振苑といふ是れ地名の因て起る
所なりと今社地を柞森（はすのき）とよへり
本社 南面健御雷命、齋主命、天兒屋根命を祭る本社背後に數字の末社あり其他
拜殿鳥居は本社南にあり

土

師

相樂郡祝園村
南一里許

土師を呼ひてはせといふ往古土師氏の住せしところなり土師氏（野見宿禰の由此姓
見ゆ）の墳墓といふもの此邊に多し往々古土器を掘出すことあり

藤原百川公墓

相樂郡相樂村
字吐師

延喜式に相樂墓贈太政大臣正一位藤原朝臣百川淳和太上天皇外祖父在山城國相
樂郡兆域東西三丁南北二丁守戸一畑とあれと其所在古來詳ならず公は桓武帝援
立の大勳あり其功績世に存するを以て今度遷都紀念祭を執行するにつきては公
の墓を考査して之を表彰せんとて其郡の有志者熱心に搜索せり相樂郡に二個の

古墳あり一は田間にあり兆域削滅せられて僅に存せり一は小山の上にありて舊
形を存せり然れとも共に考據に乏しく査定しかたかりしか今其田間にあるもの
を公の墓と定め其近地を收買し其地城を定め修築完成してこれを表彰すること
とし應分の義捐をなし更に京都市よりの補助を得て其工事を興せり此地は相樂
村字吐師にあり山田川に臨み南に面するものゝ如し大小二塚あり其一は公の夫
人の墓なるへしといへり

丹波丹後

両丹は山城と國を異にするも同じく京都府下なれば山城國記事の下に附記すその順序は丹波街道より老坂を過ぎ山陰道線と逐ふて進むこととせり土地遠隔なれば今特に其の彰著なるもののみ二三をかゝく

金剛寺

丹波國南桑田郡曾我部村字穴太京郡元標より凡七里

曆應年間佛國國師の草創にして福壽山と號し禪宗臨濟派天龍寺の末寺なり延寶八年本山開祖夢窓國師十三世の法孫虎岑和尚之を中興し以て現今に及へり寶物に丸山應舉の山水人物等の畫幅夥しく所藏するを以て世に名ありすなほちこの應舉か天明年間京師大火のとき奮里并に當寺檀徒たるの所縁を以て寺内に寓したる時揮毫せし名品にして紙本淡彩五十三軸の外更に二枚折屏風一雙あり元來本堂の壁に貼せしものなりしか明治九年保存の爲めかく卷物に仕立てたるものなりといふ本年洛東南禪寺塔頭歸雲院に陳列して衆庶の縱覽に供すといふ

穴太寺

南桑田郡曾我部村字穴太

天台宗にして開基は慶雲二年にあり此時天下疫癘流行す左大辨大伴古磨藥師如來を彫刻して之を祈り靈驗殊に著し文武天皇此由を聞て召し乃ち本尊を敕封して之を崇めたまふ其後村上帝應和二年當國桑田郡曾我部の住人宇治宮成の祈願として京都の佛師威世長三尺三寸の聖觀音菩薩を刻し本尊と并安す爾來西國二十一番の札所に列し四民の渴仰大方ならず寺運隆然として榮え以て今日に至る境内三面は山を以て達らし仁王門を入れは左に二重の塔右に念佛堂あり本堂は正面にあり八間四面にして壯觀なり寶物頗る多く中にも聖觀音大緣起一軸は狩野永納の筆にて詞書は粟田二品親王の手に成る金泥普門品一軸は光子内親王の筆般若十六善神は張思恭の筆黄金の板佛三尊來迎の御姿は和田義盛の守り本尊とて皆稀世の珍品なり

常照寺

北桑田郡井戸村字大野にあり京郡より麻ヶ峰周山を經て十里

當寺は光嚴院の開基したまひし著明の大伽藍にして大雄山と號し禪宗臨濟派の

一本山なり始め光嚴院この地に屏き剃髮し自ら無頼禪師と號し當寺を創めて之に住給ふ崩後堂後の山上に葬り南禪寺長老清溪和尚第二世をつゞ天正十年明智光秀當寺を劫掠し堂舎殿堂を燒毀して一山鳥有に歸す後陽成天皇幕府に詔して再興を圖らしめ給ふ慶應二年二月朝廷當寺の格を進めて紫衣着用とし且住職は必ず開山法皇の法系たるへき給旨を賜はる境内甚た廣く河を渡りて行くこと三四町にして下馬門あり坂路敷町を登り較額門ありその間兩側は古松盤垣道を蔽ひ靜寂愛すへし門を入れは池あり橋を渡りて更に迂回曲折して進めは本堂に達す方丈書院庫裡は其右傍にあり開山堂其後にありみな萬延以降の建築にして結構宏壯なり林泉清絶にして書院の後には一條の瀑布かゝる開山光嚴法皇の御陵は本堂の後方一堆の丘上にありて後花園後土御門兩帝の御骨を合葬せり寶藏中開山法皇御襟掛の御守佛黄金四十三牀厨子入一基は稀世の寶物にして同法皇親贊御畫像一軸支那畫十六羅漢十六幅も亦見事なるものなり此他一休和尚の眞蹟一軸陸仲淵筆の羅漢定中圖一幅欽王筆の赤壁圖一幅并に宸翰等多し

舞

鶴

丹後國加佐郡京都より山陰道船井郡橋瓜山家等を経て二十三里三十五町

東西一里餘南北二里餘の大灣口にして灣内水深八似大艦巨舶の碇繋に便なり市街繁華人口萬餘あり北海重要な軍港にして北遙に露國を睥睨す現時敷設中の京鶴鐵道落成せば四通五達の形勢を成し繁盛今日に倍徙するに至るへし

普甲山

加佐郡京都より二十五里

與謝の海の南方に峙てる一山脈にして一名を大山といふ和泉式部の歌に「待人は行とまりつゝあちきなく年のみこもる與佐の大山」とあるは此地なり南麓内宮より順まで凡二里此間に二瀬川あり左の方に千大ヶ岳鬼ヶ窟ありこれを大江山といふ其東に普甲寺の址あり

宮津

與謝郡にあり京都より山陰道福知山を経て三十三里二十四町御鶴より六里

宮津は當國第一の都會にして人口凡一萬二千餘灣口水深く波濤穩にして舟船輻輳商況殊に盛なり舊城は天正五年細川忠興の築くところ上宮津の傍なる宮村八幡山にあり後田邊に移り京極氏之に治す今の市中に城跡あり寛文以降永井阿部奥平本庄等の數氏茲に封せらる絹紬繭を重要物産とす之より天橋立に行けは沿

道傍近に種々の名所あり愛宕山山王社如願寺大堂雞塚等なり

天橋山智恩寺

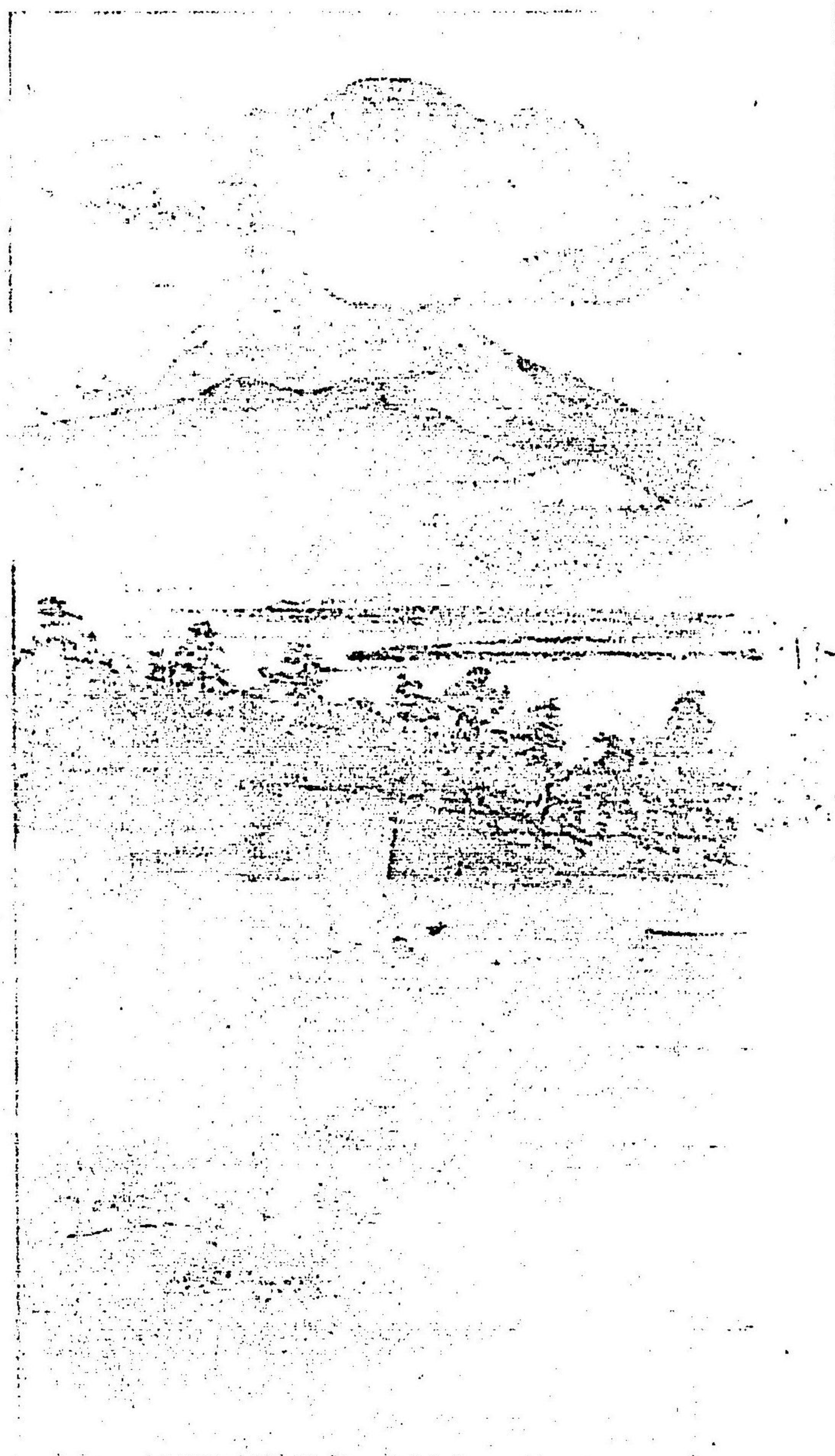
與謝郡文珠村

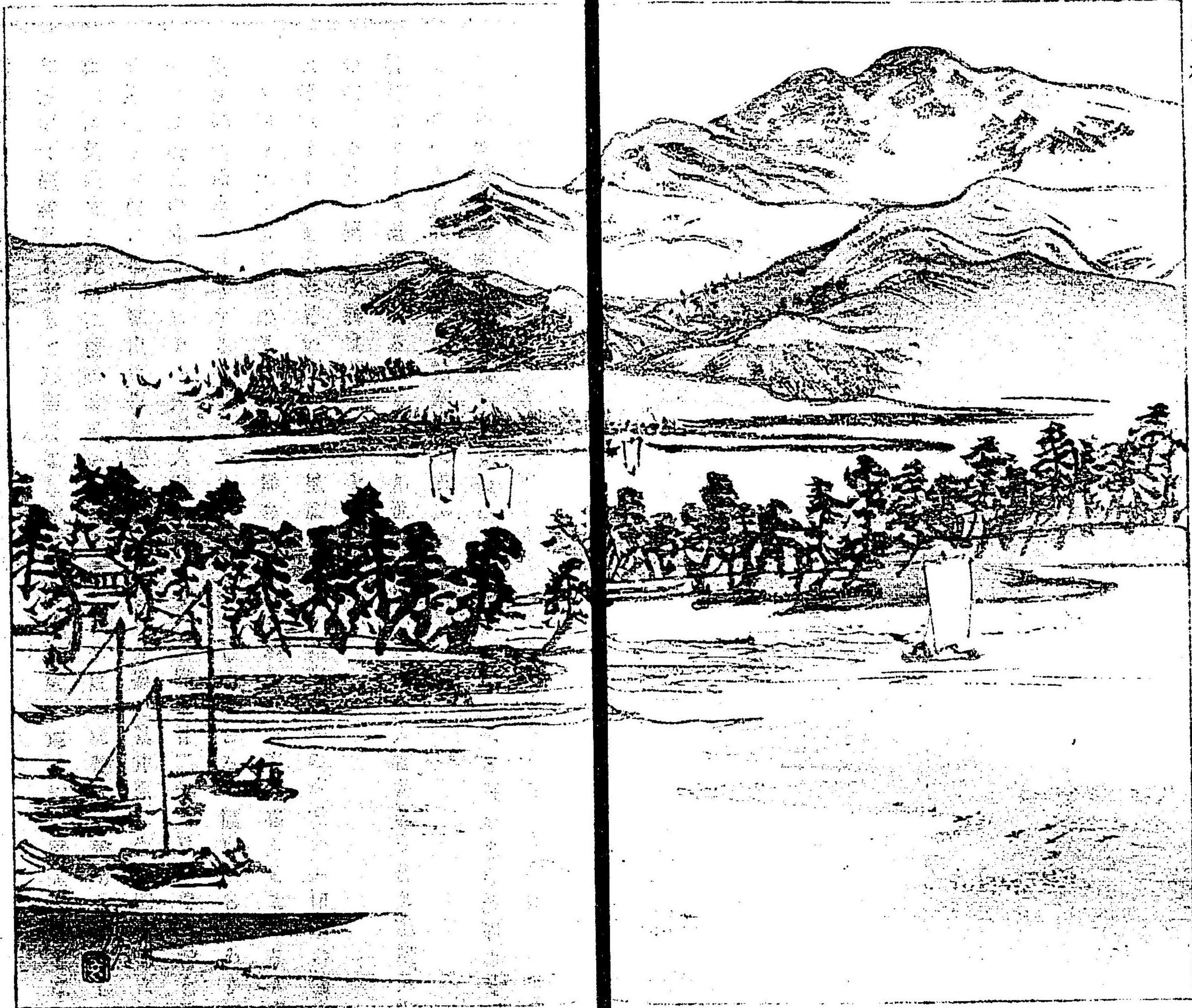
開基分明ならず延喜四年勅を以て今の名を稱ふるに至れり後京都妙心寺に屬し寺領五十石を食む本尊文珠菩薩は寺傳化人の作にして脇士は毘首竭摩の作なり本堂の左に和泉式部の塔あり金葉集の歌の前書によれば和泉式部其夫藤原保昌の當國國守となりし時從ひて此國に下りし事あり此所に塔所のあるるゝるんか無相堂の本尊地藏菩薩は傳へて定朝の作といふ境内の右方海中に天女島無字塔ありこれより南二町餘昔は殺生禁斷の地なり

天橋立

與謝郡江尻村

與謝海の中央に當りて北の方成相山の麓より南の方智恩寺の近傍まで突出せる一條の長洲にして丹後風土記に其長二千二百二十九丈幅九丈二尺とあり青松疎に其間に並列して白波蒼瀾と相映し漁舟布帆左右を往來して勝景殆ど名狀すべからず所謂日本三景の一なれば地は北海の邊隅に僻在すれども内外遊人四方よ





天橋立圖



り到り其名宇内に聞ゆ源俊頼の歌に浪立る松の下枝をくもてにてかすみわたれる天の橋立赤染衛門の歌に思ふことなくてや見ましよさの海の天の橋立みやこなりせば藤原定家の歌にふみも見ぬいくのよよとにかへる雁かすむ波間のまつとつたへよと其他古人の歌擧げて教ふへからす

智恩寺より天橋立に渡るところを九世の渡又切戸といふ古書には皆久志濱久志の渡と記せり橋立明神は豊受大神を祀る

天橋立より西を内海といひ方凡一里ばかりなり其東を外の海といふ伊瀬の浦より宮津まで長さ五里の入江なり兩岸の景色盡くか如く舟客の喜ぶところなり惠慶法師の歌にいさりするよさのあま人いてぬらし浦風ゆるく霞度れるとあり又一宮は橋立の北数町にあり豊受大神を祀る始め雄略帝廿二年九月豊受大神を眞井原より伊勢の度會郡山田原に遷し祀るとき其分靈を眞井原に留りしに後歳大に頼敗せり此時に籠神社といふ社のありしかは茲に豊受大神を合祀せしか其後更に籠神社を別ちて別殿となし遂に其の籠神社の地を以て豊受大神となし當國の一の宮といふ

眞井原 與謝郡成相寺村

一の宮の北松樹叢生林をなせるところを比沼の眞井原の舊蹟といふ此地は即ち神代のむかしより豊受大神の鎮座ましますところにして同神は今の伊勢外宮なり

成相寺 同上

眞井原より大谷寺阿彌陀降等の名所を拾ひてゆくこと一里許にして寺門あり仁王は運慶の作といふ本堂は猶一段高きところにあり本尊は正觀音にして眞言宗なり舊寺領二十二石むかしは七堂巍然たる大伽藍なりしか慶長以降遂に廢頽せりといふ

當寺は眺望尤佳にしてこれより眼を東方に放てば與謝の海は渺々として天橋これに横はり風浪其岸に激すれば青嵐銀を飛して松濤怒り應し老幹幾千倍屈蟠錯して長脚上に列するの様宛然蜈蚣の蟠々然として向來るか如し晴雨寒暖夜陰白日各其風景を異にすといふ古人これを嚴島鹽釜の勝と並へ稱せしは故なきにあらず

當寺の末寺に國分寺ありこれより南國分寺村にある一小寺院なれども即ち往古當國の國分寺の趾にして行基菩薩の開基なれば其名尤も著るし

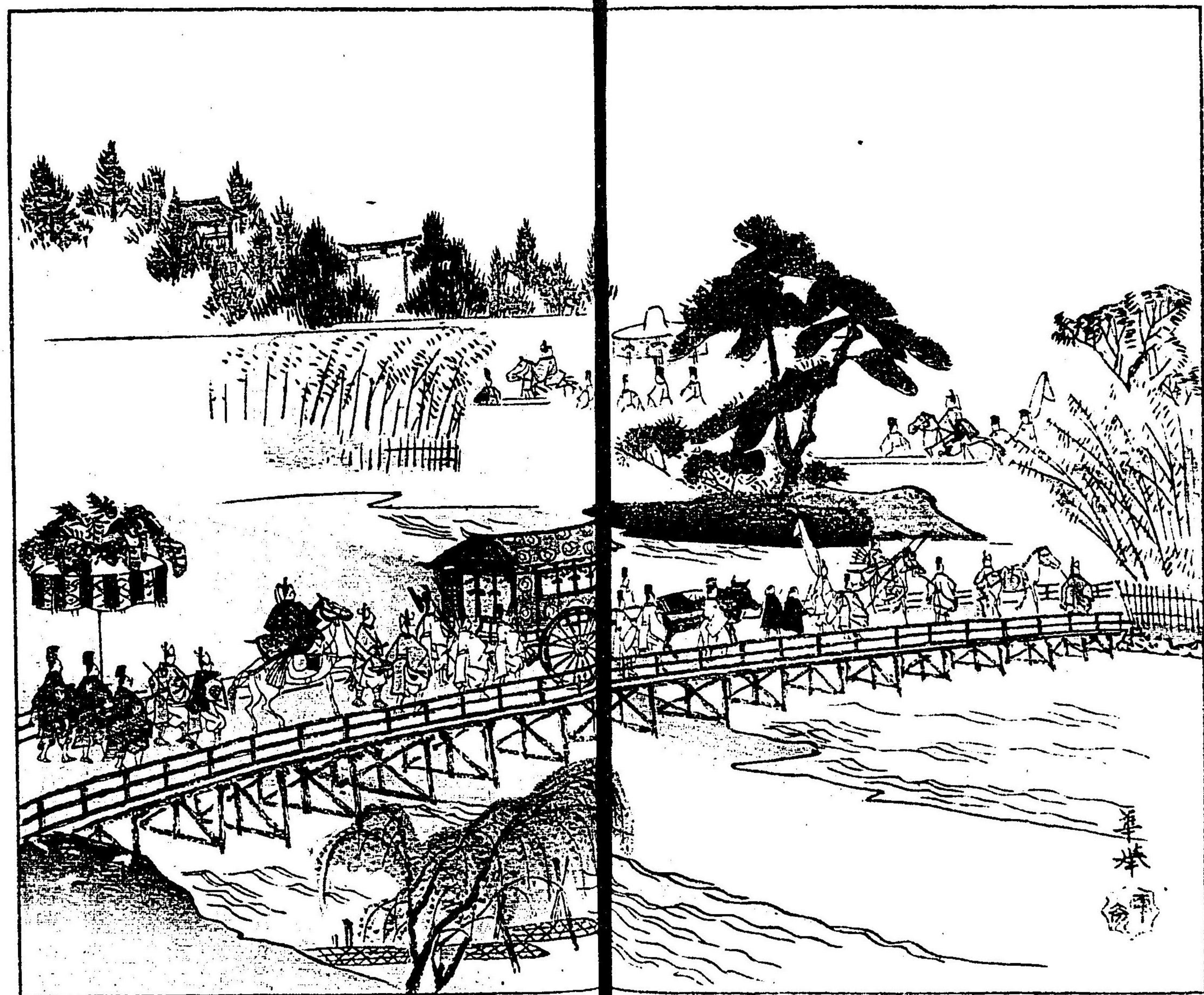
祭事

吾京都には名神官社多く其祭事は古來の禮典法式ありて其儀最も盛なり賀茂葵祭の如きは一年の盛典として祭といへば必ず葵祭の事と定まり故實家の傳ふるところ其説甚密にして舊記史乘の記するところまた多し男山祭の如きは一種の古實ありて其儀最も嚴なり共に官祭の大なるものなり其他加茂御蔭祭は其式最も優美なり其賑しきは八阪祭を最とす山鉾の美海内に冠たり稻荷松尾北野等の官社より今宮御靈等府郷社に至るまで各々賑しき祭事ありて寔に京都の花ともいふべきなり故に今別に此項を立つ最も優美にして盛なる儀式をばしり其他賑しき祭事を記せり

葵祭

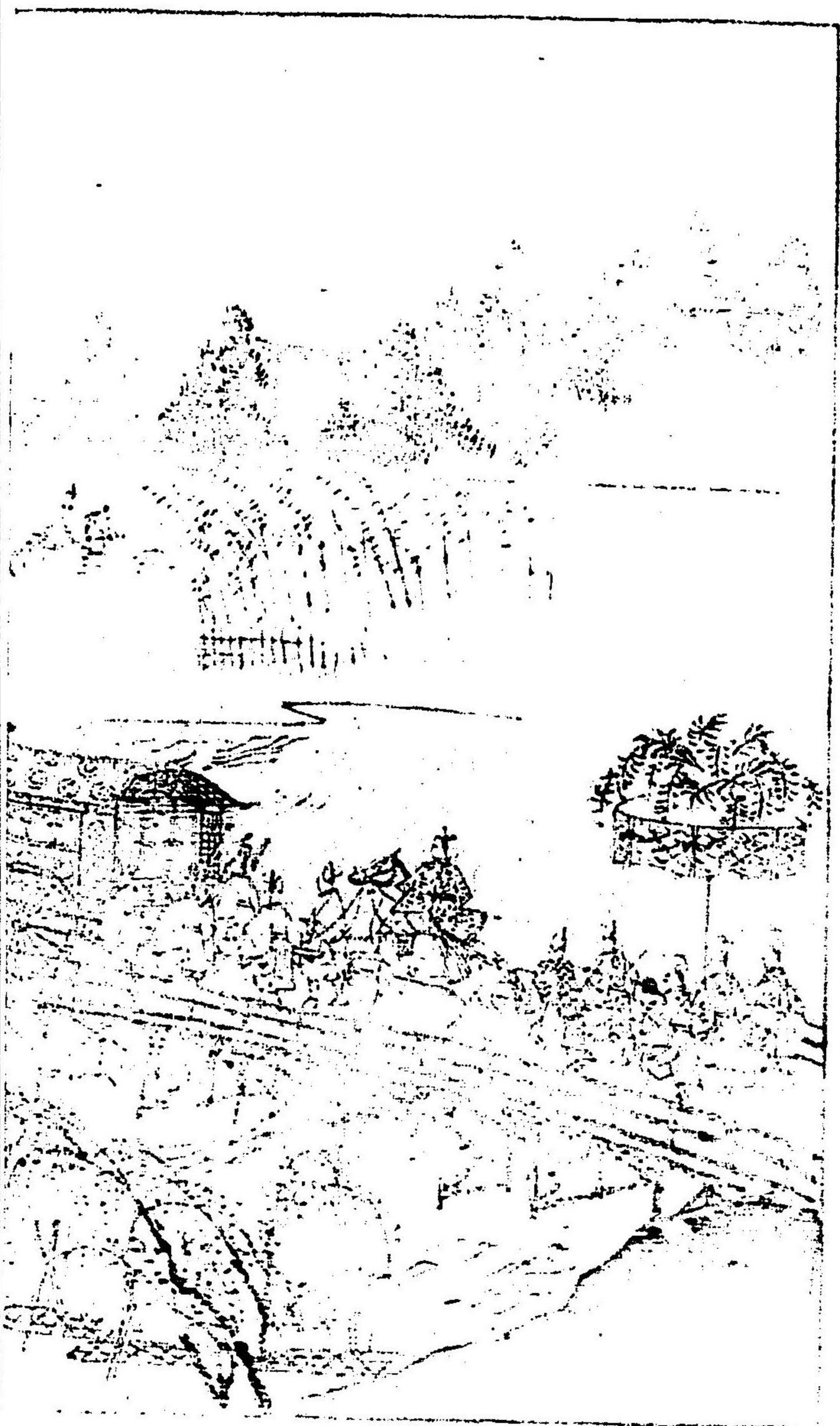
葵祭は其禮儀の正しき祭典の備はれる我國第一の優美高尚なる祭事にして古來其名最も高く世に聞ゆたり其始めを尋ぬるに在昔欽明帝の御時天下風雨烈しきことあり當社の祭ならんとて四月の吉日を擇ひて馬に鈴をかけ人に猪頭を蒙ら





賀茂葵祭圖

華
林
印



しめて駈馳の状をなし以て祭を行ふ後夢の告によりて祭日神に葵をさしけ人々葵桂のかつらをかこれ即ち葵祭の灌漑にして官祭の大禮なり應仁の亂より久しく中絶し元祿七年社司の願によりてこれを再興せり文化十年聊か其式を改め維新の際に至り一時中廢せしを明治十八年より再興ありて連綿今日に至る祭日に先たち宮内省より勅使奉行其他の職事を命せられ習禮あり勅使一人内蔵使代一人山城使代一人檢非違使代二人舞入六人陪從七人以上は舊公卿の輩之を勤め馬寮使代一人内蔵寮史生代二人看督長代四人火長代四人主水司代一人衛士代二人權代四人列奉行一人下列奉行四人以上は舊社人及び舊官人之を勤め衣紋方は九人なり奉行は宮内官吏にして近時主殿寮出張所長之を勤むるを例とす掛員には同所屬官之に當たり其の式を擧ぐ服飾行装みな古代の正式を用ひ實に祭儀の盛觀を極む

葵祭は舊時は四月十五日なりしか今は改て五月十五日と定りぬ當日午前四時三十分勅使以下京都の皇宮に參集し裝束既に終れば奉行祭文及び幣物を内蔵使に渡す又調度係をして祭の御馬を馬寮使に渡さしむ七時三十分列を整へ八時に至り宜秋門より進行す第一に警固の爲め警部騎馬にて二行に進む次に看督長代二

行に進み次に檢非違使代一人は騎馬火長代二人は二行又檢非違使代一人は騎馬火長代二人は二行にて進み調度掛兼鋒持等これにつく次に山城使代騎馬にて進み馬副手振前後に従ふ次に重雜色取物舍人白丁退紅等これにつく次に衛士代二人二行に進み次に御幣櫃三基白丁各三人を以て之を昇ぐ次に内藏寮史生代二人騎馬にてこれにつく各雜色白丁馬部六人を隨ふ次に馬都及び白丁走馬二頭を率く馬寮使代騎馬にて之につく其次には御車なり御車は所謂御所車にして粧飾をつくし飾り半にひかしめ半銅の重鞭をとりてこれにつく口付白丁雜色これに従ふ又替半あり次に和琴退紅二人之を奉す次に舞人六人各騎馬なり次に櫛代二人其次には勅使とす勅使は騎馬東帯にて其馬には鞞鞍をかゝ舍人居調馬副隨身手振これに従ふ次に櫛代二人次に率馬次に小舍人重雜色及び取物人白丁次に陪從七人各々騎馬なり次に内藏使代騎馬なりこれ其行列の大略なり宜秋門より南に進み建禮門の前を東にゆき清和院御門より廣小路に出て梶井町を北に出町に進み鳴川の葵橋を渡り下鴨神社に着く神社にては官司以下午前八時社頭出仕して神殿を粧飾し葵桂をかけ朝の御料を獻す河合社以下皆此の如し既に勅使以下參向すれば官司鳥居の内に出て、之を迎ふ勅使及び内藏使代は二鳥居内にて下馬

し他は皆其前赤井橋の東にて下馬し檢非違使之を警固し監督長火長等其次に列す山城以下史生衛士馬寮使内藏使等は皆其所管の物件を定め所の所に置き其身は便宜の所に候す此より先き奉行既に社頭の櫛舎を出て内に進む舞人陪從等之に従ひ陪從小調子を奏す次に勅使手水の儀あり主水司代之を行ふ次に勅使被櫛につき解除の式あり神官之を行ふ解除畢りて社頭に參進し舞人陪從等相從ふ樓門に入る時陪從一二歌を唱ふ勅使前を過ぐるとき檢非違使代以下床を起ちて敬禮す勅使乃ち進みて樓門内西方の簷下に至りて劔を解くこれ當社は祭神三座申女神あるを以てかくなすと云ふ故に上加茂にてはかゝることなし是より先に山城使代内藏使代以下樓門を入りて舞殿の東庭に西而して候す次に衛士幣櫃をかき舞殿の東北にかゝ史生代之を取りて内藏使代に捧ぐ内藏使代乃ち中門左右の案上に置く次に勅使舞殿の南階の下に立ちて内藏使代に目す内藏使代祭文を勅使に捧ぐ勅使舞殿の南階より昇りて再拜し祭文を奏し又再拜す次に官司祝詞を申して拍手す勅使之に應じて拍手す畢りて官司神祿として神前に供へたる葵を取り舞殿北庭の案上に置き階の東方により斜に勅使に向ひて之を申し更にその祿をとりて舞殿の北階より登りて勅使の前に前み之を捧ぐ勅使乃ち取りて之を

挿頭し起ちて南階を降り祭文を内藏使代に授く樓門の西廊に入り帯剣し更に出
て舞殿東南庭に立て西面す舞人は舞殿の南庭に東上北面して列立す陪從勅使
の南に進む次に陪從一二歌を唱ふ次に馬寮使代御馬二匹を牽きて拜殿を三匝す
次に陪從駿河歌を唱ふ舞人舞殿に登り駿河舞求子を奉仕し其曲半にして陪を降
り跪きて右を祖き更に昇殿して其曲を畢ふ舞終りて殿を降り其位に復す陪從勅
使以下次を以て退出す是祭儀の大略なり是より走馬あり料林の馬場にて二頭
の馬を走らしむ是に於て式全く畢り官司玉串を上り幣物神饌を撤し閉扉の式を
行ふ勅使以下は更に行列を整へ葵橋を渡り西川端の加茂堤を經御茵橋をわたり
上加茂神社に着す其式粗下加茂神社に同じければこれを略す
葵祭はさきにも述へし如く我國第一の優美高尚なる祭事にして式は記録或は物
語などに古來其記事甚多く其日には一條京極鴨河原など物見車ひしと連なり物
あらしひなどのありし事などあり今も宜秋門前より料林にいたるまでさながら
立錐の地もあまさず人の山をなせり今の式は文永の古巻物により定められしも
のなりとそ

御蔭祭

毎年五月十二日下鴨神社にては日中に行ひ上加茂社にては夜間にかこなふ然れ
ども上加茂の儀式は簡易にして記すへきものなし下鴨の儀式は葵祭につける賑
ひにして當日午前八時社頭より車通として御蔭社に向ふ小目代二人大杖をつけ
て先行し次に警蹕次に葵黨堤黨各々十六人素襖を着く次に樂人九人夫より官司
神馬これにつく叙山の麓なる御蔭神社に詣りて神饌を奉り奉幣奏樂などあり次
に神牀を遷御し更に行列を整へ本社に還幸し奉る料川の東なるところに祭場を
設け各々粧飾をなしこれをまつ神幸已に成れば祭場にて其式あり神馬の上に
神座を設け其上に絹蓋を懸し設けの場は神馬を維き其前に於て奏樂東遊等の儀
あり其式古雅にして最も優美なり夫より還立の式ありて神牀を本社神殿に納め
奉るなり

上加茂社競馬

武徳殿に於て天皇臨御し衛府の騎を叙覽ある事は恒例の儀式なりし堀川帝寛治

七年五月五穀成就の爲め此式を移して社頭にて行はれしを始めとすといふ其後後白河法皇の勅にて神領四十餘所より始めて十番二十疋の馬を出せり後鳥羽上皇の御心願により建保二年四月當社に參籠し給ひ臨時競馬七番あり尋て上下兩社に於て之を行ふ爾來沿革あれ恒例となりて久しく行はれたり明治維新後他の祭典の中絶せしものわれと此儀は替ることなく行はれ明治十八年宮内省より金千圓を下賜し其裝束を新調せられたり裝束は八具にして赤黒二種とす赤を左方と云ひ黒を右方と云ふすへて古風にして甚美麗なりかくて騎者は當日時刻に至れば酒殿橋に馬を揃へ之を日輪の形に立て、乗り出し一の鳥居の前に至りて又之を月輪の形に立て並へて下馬し鳥居を入る加茂の陰陽師なるもの社頭より出て、乗人を祓ふ乗人は是より本社に參拜して奉幣の儀あり其式古傳ありて嚴重なり畢りて鳥居の前にて乗馬す馬場ウマバタの中央の東の芝生に頼宮を建て其前に神旗と鉢とを立つ騎者一番つゝ馬場ウマバタに入れば口取つきをひて馬場ウマバタの頭をめぐると七度これを小振りといふ頼宮に向て馬上にて拜をなし更に馬場ウマバタの頭にかへり一齊に轡を放ては兩騎鎧を鼓ち鞭を加へて先をあらそふ頼宮の前を先にすくるを勝となし頼宮の東に物見の櫓を立て階下太鼓と鉦鼓を打て其勝負を報す乗人は事終りて馬を下り頼宮の前に入りて太刀と鞭を脱き更にカマキリを執り拜禮をなす勝ものには白絹を與ふ第一番は神馬にて勝敗なくこれを勝とする例なり加茂の競馬は千年の舊儀にして其式勇壯活潑にて且つ古風優美なればむかしより名高き神事にて古書にもいしるしく今も其日は馬場ウマバタの西側に棧敷を設け貴賤上下打つといひ雜沓を極む

男山八幡宮祭

男山八幡宮の例祭は舊との放生會にして代々其式行はれ延久元年八月十四日勅して上卿以下六衛府馬寮行幸に準して神輿に扈從すべく定め給ひ權大納言源隆國を遣はして祭事を修めしめ八月十五日を以てこれを行はる此より放生會永く恒例となれり延元以後の大亂に遇ひ中絶せしを徳川氏にいたり延寶七年これを再興し維新後に及び改めて大祭と定め九月十五日を以て行はるゝ事となれり此より先き宮内省にては奉行を命し上卿以下の職事を任せられ各々其式あり當日午前一時宮司以下社頭に參集し東西橋樹の下にて庭燎を焚き風聲を出し奉る上卿以下禮堂の邊に先着し上卿參議代辨次將代外記代史代官掌代召使代順次に着

坐す奉行掛員に問ふに儀衛の具否を以てす掛員其具備を答ふ奉行乃ち上卿に神幸の旨を告ぐ上卿以下各起坐して南門を出て、行列につく其行列は御前八人大紋にて進み次に総代直垂従者同直垂二十二人次に火長総代火燈総代等次に弓、櫛、鑼、鉦、銀幣、神寶の御鏡、唐櫃、獅子、駒形、主典、樂人、左右衛門府使代、左右兵衛尉使代、召使代、官掌代、史代、外記代、辨代、參議代とす次に上卿次に神寶の御劔次に第一の鳳輦にして御袖釣御綱引等またこれに従ふ次に第二の鳳輦にして御袖釣御綱引等またこれに従ふ次に第三の鳳輦なり已に頼宮に着御あれば之を舞臺に安置し奉り頼宮神寶を頼宮に移し神僕及ひ花を供ふ此際奏樂あり次に官幣あり其儀内蔵寮官人御幣物を出しこれを宮司に渡す宮司之を捧けて内殿に納む次に上卿起ちて禮堂より舞臺の中央に進む宮司其前に出つ上卿祭文を宮司に授く宮司受けて進みて之を神前に納む尋て祝詞を奏し畢りて拍手す上卿以下之に應ず次に神馬二疋を曳き舞臺をめぐること三度此間奏樂あり宮司神寶の樂器三管を辛櫃より出し樂人樂舍にありて奏樂す畢りて神僕を撤し其儀を畢ふ

還幸は同日午後五時にして宮司奉行等皆幄舎につけば奏樂の間に神僕を供し次に宮司祝詞を奏し又奏樂の間に神僕を撤し頼宮神寶を出し神官之を鳳輦に遷し奉り次に行列の次第を整ふ是より前上卿以下皆禮堂にあり是に至て座を起ち下廊を前にして舞臺の西方に入り北上東面して列立す鳳輦三基を舞臺に安し還幸あり其儀皆行幸と同じ路次絶へず還城樂を奏す上卿以下列を離れて前行し南門を出て絹屋殿の東側に列立して之を奉送し鳳輦通過の際敬禮す行列本社に着すれば鳳輦は舞殿に安し頼宮神寶を内殿に納め奉る奉行及び掛官は間道より還りて内廊に着床す宮司昇殿すれば頼宮以下鳳輦を大床によせ奉る次に鎮座の式あり一同殿を下りて内廊に着床し宮司舞殿に至りて開扉の祝詞を奏し畢りて其旨を奉行に告ぐ是に於て式全く畢り參列の諸員退散す

この祭禮は古來最も著名なるものにして往時放生會と稱せし時は勿論現今にありても當日の賑ひは非常にして京都及近國より群集し山上下境内到處人の山を築き八幡町數十の旅店は宿泊者充填して其混雜一方ならず見世物興行晝夜に亘りて熱鬧を極む實に盛大なる祭事なり

又一月十五日より十九日まで五日間辰神齋と稱して災厄解除祈願のため京坂各地の士女類に參詣して雜沓すること殆ど放生會の時に似たりこれは當社の私祭なり

松尾神社祭禮

例年四月中の卯日又は下の卯日を以て神幸の式あり洛西第一の祭事なりこの日午前十一時官司以下神職一同潔齋して先づ開扉供饌の式を擧ぐ此間絶えず奏樂ありかくて四足門外へ並へ立てたる六基の神輿及び唐櫃を神殿の階下によせて御靈代を遷し奉り殿拜を昇き廻ること三回之より順次出門して七條通桂橋の上流凡二町許の所に船を熾し神輿をかきのせ桂川を渡御あり東岸の河原に暫く休憩し神饌を供し神輿の内四基及び唐櫃は七條村字西七條の旅所に一基は京極村字川勝寺の旅所に一基は京極村字郡の旅所に着御し神職三方に分れて之に供奉し各祭事を行ふ還幸は五日上の酉日又は中の酉にして此日七日開きと稱し御旅所にて能樂ありて洛の内外より群集し境内雑沓す古來奏祭と稱し神殿を始め各所に葵を飾り又供奉のもの皆葵を飾ることすへて賀茂祭に似たり午前十時神職三所の御旅所に向ひ各祭典を施行し直に三所の神輿及び唐櫃西七條の旅所に會し之より直に還御の途につき供奉の多勢神輿を守りて桂川を渡ること神幸の時の如し之をツハルの御供といひ殊に壯觀なり當社は舊葛野郡一百八個村の産土

神なりしかは祭禮の如きも最盛にしてこの日參詣の士女河渡を拜せんとするもの數萬人の多きに及びさしも廣き桂川の西岸宛然人の山を築きたるか如き状あり

御田植祭は七月中時日毎年一定せず行ふ所にして山城國中最も珍しき祭禮なり其式最古風なり此日松尾村字松尾谷及び上山田並に川岡村字下津村の三村より各植女一人を貢し稻苗移植の式あり植女は饒みて盛飾美觀を盡して頭には花蓋をいたしき壯夫の肩によりて神前に供へる稻苗を持ちつゝ拜殿を巡ること凡三回にしてそれより携ふる所の稻苗を散布すこの苗を栽うるときは蟲害なしとて衆人争ふて之を拾ひ非常の雜沓を極むかくて能樂の催等ありて晝夜の賑ひいはん方なし

稻荷神社祭禮

毎年四月第二の午日にこれを行ふ此日午前十時本社より伏見街道五條東洞院七條より不動堂の南を九條の御旅所に神幸あり還幸は五月第一卯日なり其道筋は大宮松原寺町五條より伏見街道をへて社頭へ還幸あり其行列甚だ美なり先づ先頭には蜀江錦の大旗二流を翻して唐櫃及豊榮組其他の信徒之に従ふ次に大楠御

弓、御箭、大幣、御劔等次に下部青侍又次に五色錦の大旗五流信徒鈞蓋御錦蓋鳳鳥等之につき次に神官及氏子各組の行列とす其次には田中社上社中社下社四大神社の五基の神輿整々として進み神馬馬部其他行列奉行等之に従ふ當社の神輿は全國第一の神輿にして全國寶物取調局の調査にも優等と定まりしものにして全部の金物燦爛光輝を發し日に映し目を奪ふ實に希世の神輿なりこの日洛中洛外より見物に群集するもの夥しく道路絡繹纒るか如し

祇園會

祇園會の濫觴は清和帝貞觀十一年にあり三代實錄によれば是より先貞觀五年五月廿日御靈會を神泉苑に修め雅樂寮の伶人をして樂を奏せしめ侍臣兒童及良家の子をして舞人となし雜伎散樂を奏せしめ爾後毎年夏秋之を行ふを以て例となせしことあり然るに其十一年夏に至り天下大に疫せしかば六月當社々司卜部比良麻呂に敕し六月七日六十六本の鉾を建て文正同十四日洛中の男兒及び郊外の百姓を率ひて當社神輿を神泉苑に迎へ御靈會に倣ふて之を祭れり祇園の本縁錄記する所の説是なりこれより氏子毎年これに倣ひ六月七日同十四日を以て永世

の祭日と定む足利氏の季世一旦廢絶せしか織田信長資を興へて之を中興し連綿以て今に及ぶ其飾鉾は即ち前記の貞觀中立てし所の六十六本の鉾に淵源せしものにして山棚は大嘗會の時悠紀主基立つる所の標山に擬せしものならんと云ふ標山とは仁明帝紀天長十年十一月の條に戊辰御豐樂院終日宴樂悠紀主基共立標其標悠紀則慶山之上栽梧桐兩鳳集其上從其樹中起五色雲雲上懸悠紀近江四字其上有日像同上有半月像其山前有天老麟像其後有連理吳竹主基則慶山之上栽恒春樹樹上泛五色慶雲雲上有霞霞中掛主基備中四字且其山上有西王母獻盃池及偷王母仙桃童子鸞鳳麒麟等像其下鶴立夫とあるものにして其裝飾の狀現今の山棚に髣髴たり蓋し是より種々考案を附し設けたるものなるへし現時鉾六本山棚十三基あり結構宏壯粧飾華麗にして美術の精華を盡くし金碧燦爛として人目を眩躍するに足る其詳細は下に之を列記せり

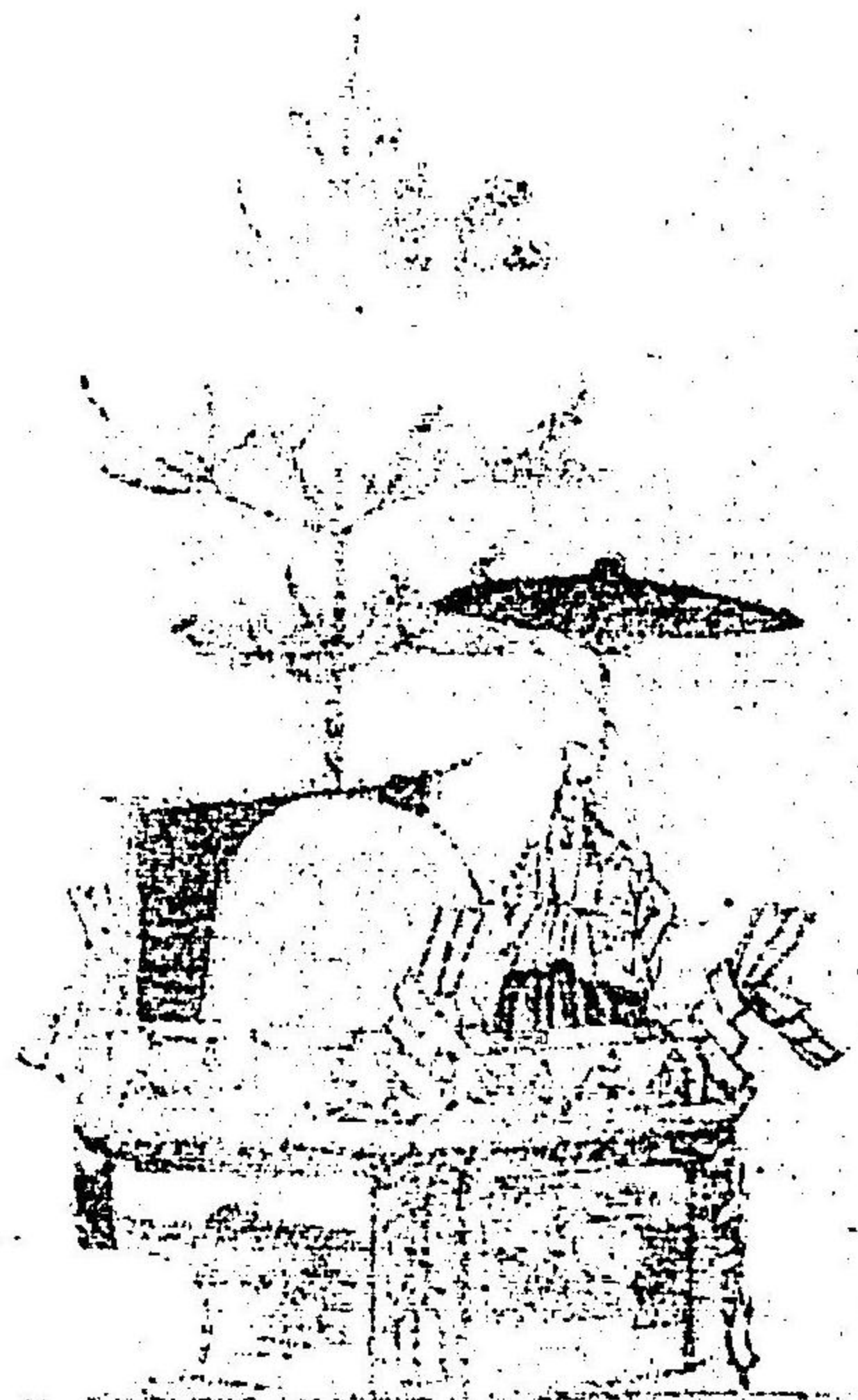
七月十七日御輿迎ありて神輿三基御旅町に渡御し同廿四日還幸の儀あり其神輿の往復には山鉾及び氏子の供奉あり先づ七月十日に御輿洗の儀あり同夜氏子総代世話方等神輿を四條橋の中央に迎へ種々の裝飾せる提灯及び松明を出し神官稱を清水に浸して之れを神輿に注ぐ式終りて還幸す古來十一日には練物と稱し祇園町の藝妓等は種々の扮

時をなし行路を作り途上演戲するもいふ近十六日の夜は宵山と稱して氏子の町々には皆神燈を軒前に掲げ幔幕を引き屋内には種々の屏風を立めくらし花を活け遊戯の具をおき競うて飾附をなし山鉾は市内各町に裝飾を終りて萬燈を照し各々祇園囃をなす町内至る所さながら人の山をなす

さて十七日の當日に至れば午前には山鉾の行列あり午後には神輿の行幸あり其山鉾は皆式の如く裝飾し祇園囃を奏し漸次氏子の各町を巡り其神輿は供奉を備へて同しく各町を巡行し四條京極角の御旅町に神幸あり今左に當日の山鉾及び神幸の函簿を記す

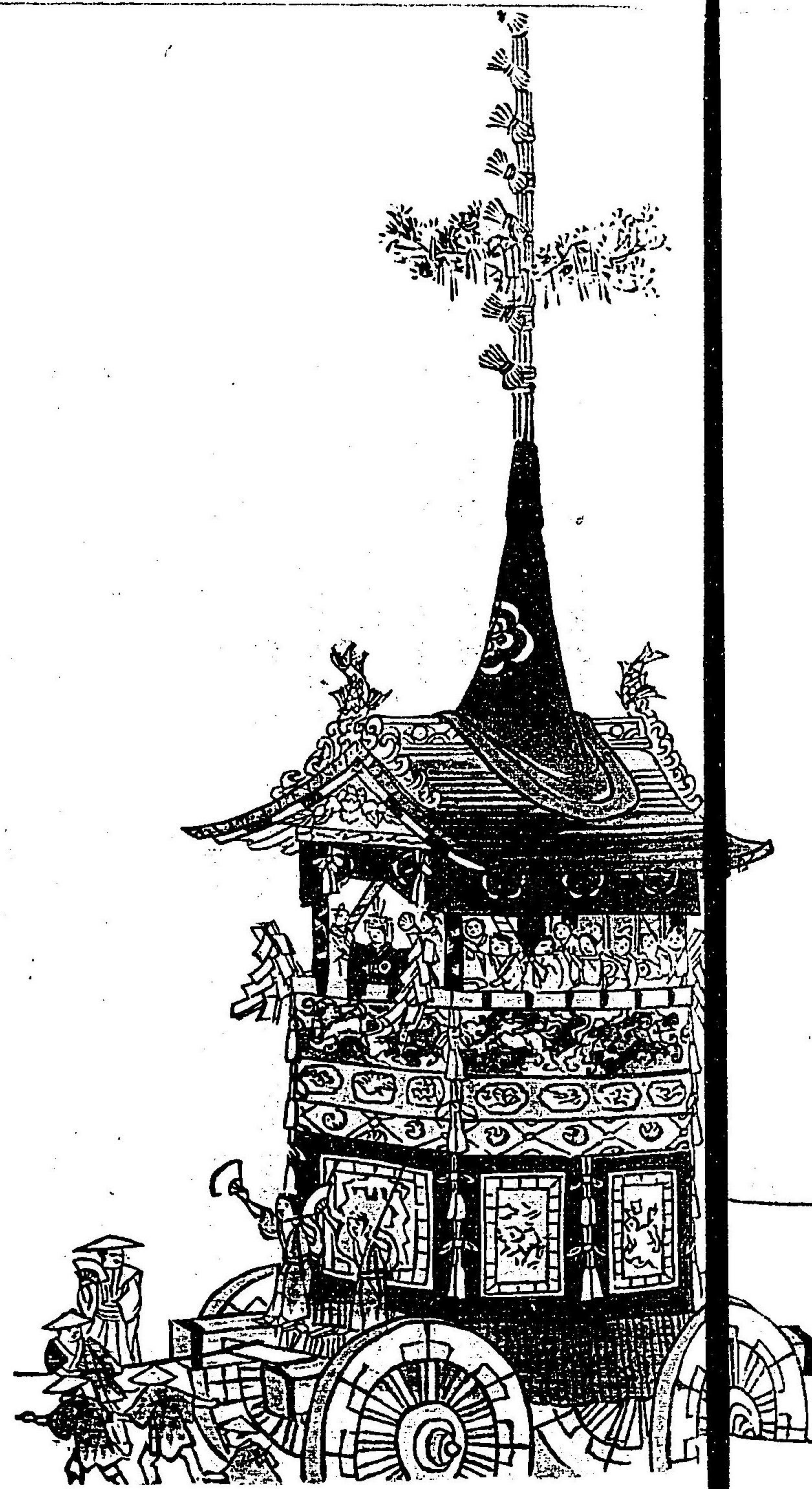
長刀鉾 四條通烏丸東入町より出づ舊と三條小鍛冶宗近作の眉尖刀を鉾頭とせしか今は之を寶物として保存し代ふるに和泉守金道法師榮仙合作の者を出す破風の彫刻は片岡友輔刀にして表に舞樂裏に小鍛冶の長刀を鍛ひ居る姿を現す屋根裏に景文の畫あり

占出山 錦小路通烏丸西入町より出づ其人形は神功皇后松浦にて釣をたれ給ふの體なり見送りの地織綴の錦に花鳥の模様ある甚た美なり



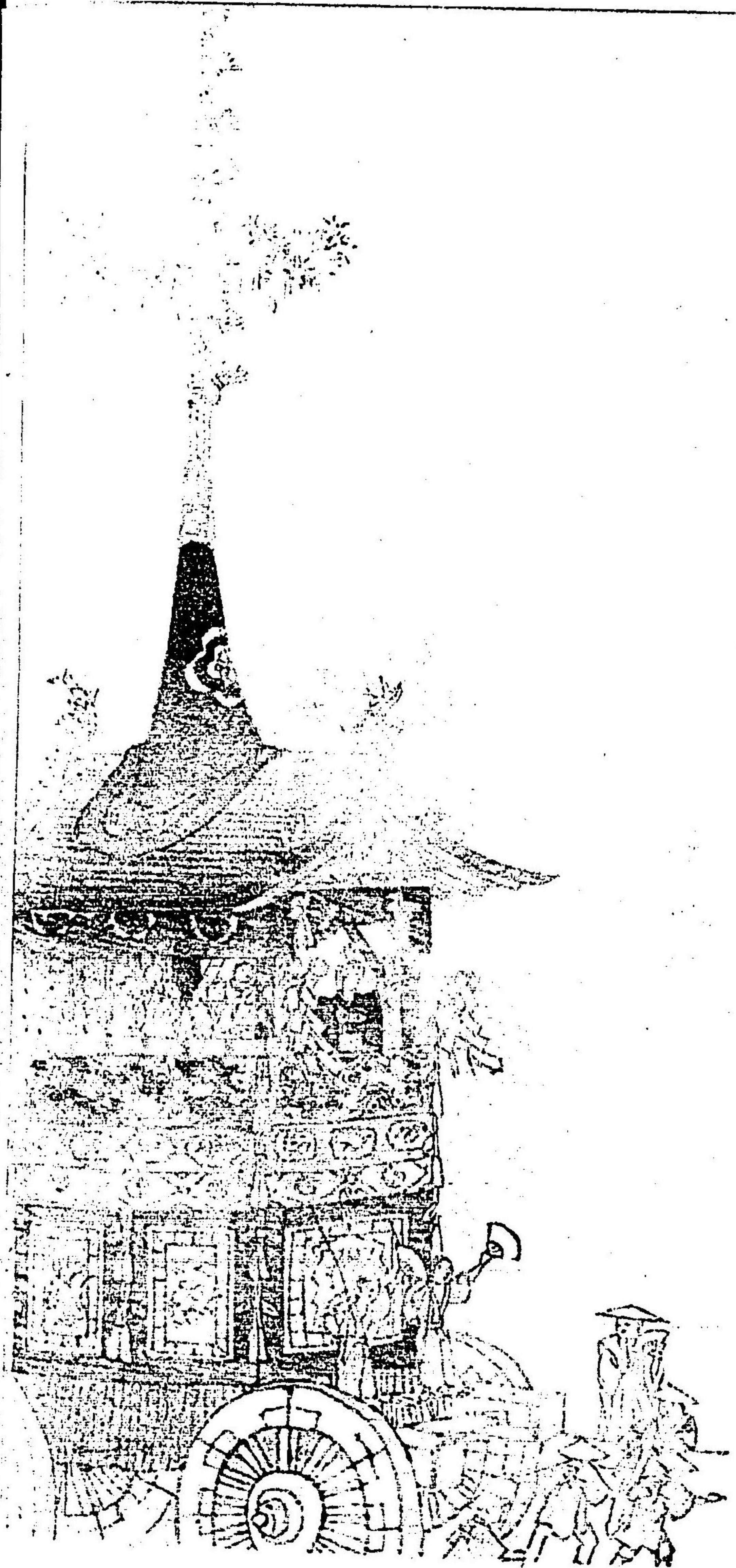
華樂會

祇園會山鉾圖



祇園會山鉾圖

華樂繪



半天神山 油小路通綾小路下る町より出つ天満宮を勘詰す見送りは天竺織明
黄地人物の模様なり

太子山 油小路通佛光寺下る町より出つ人形は聖徳太子の木像にて運慶の作
といふ胴巻は阿蘭製模様花鳥見送りは綴錦模様五爪龍なり

函谷鉢 四條通烏丸西入町より出つ前掛は天竺織といふもの見送りは紺地の
銃絹金泥明人の文字あり舊は弘法大師筆なりしか顔破せしより別に之を保
存し神事の時町内に飾り縦覽せしむ

白樂天山 室町通綾小路下る町より出つ烏榮道林禪師白樂天問答の人形あり
胴巻の前掛は天竺織と稱ふるもの左右蝦夷織水引は唐織見送りは唐綴れ錦
に百子の圖現時破損し大修理を要するより來明治三十五年までは出さずと
す

伯牙山 綾小路通新町西入町より出つ晋の伯牙琴を善くす武陵王之を召す伶
人にあらずとて琴を破りし古事を人形とせり因て一名を破琴山といふ前後
掛共に綴錦にして前は人物文字後は人物の模様なり

郭巨山 四條通西洞院東入町より出つ人形は郭巨及び童子前掛紅地綴れ織、胴

卷は左右金糸の繡漬見送りは綴れ織剪裁牡丹の模様なり
難鉢 室町通四條下る町より出つ人形は住吉の神にして木像五寸許甚古作なり見送りは古渡のゴフアン織にして胴巻に方六尺許の萬曆氈を用ふ皆稀世の珍といふ

山伏山 室町通錦小路上る町より出つ人形は山伏峰入の體なり前掛見送とも和錦綴織に雲龍の模様あり水引に養蠶の圖を摸出す近頃繡の見送りを購へり頗る佳品なり

霰天神山 錦小路通室町西入る町より出つ永正中火災の時霰降りて其火を消す時に天神の像出現せしかば之を祀りしなりと云ふ前掛毛綴に人物左右掛は綴錦牡丹に蝴蝶後掛は綴錦龍にして四隅金物は鍍金梅花なり

木賊山 佛光寺通西洞院西入る町より出つ木賊薙の翁を人形とす相傳へて春日作といふ前掛は金地綴錦に飲中八仙胴巻水引共に綴錦に仙人の模様其他欄楯の金物皆佳作なり

月鉢 四條新町東入る町より出つ人形は月讀命海を治め給ふ狀を摸す飾り附物裏板に極彩色草花の圖あり應擧の筆なり破風及び葦股の彫物は左甚五郎

の作といふ水引は應擧筆十二禽を繡模様に出したるもの胴巻は波斯製の毛氈前掛は明代の唐繡子繡に山水の模様後見送は綴織唐子遊の圖等美麗なり
蘆荊山 綾小路通西洞院西入る町より出つ人形春日佛師の作にて蘆荊人物なり前掛は天竺綴と稱ふるもの左右は唐繡雲龍模様後掛は金色錦織にて美麗なり

放下鉢 新町通四條上る町より出つ鉢頭金の三光星にして高さ十二間五尺一寸祇園鉢中最も高し上水引は地織金地の丸龍下水引は地織金地に蕪村の筆になれる人物琴棋書畫の圖なり

孟宗山 烏丸通錦小路下る町より出つ人形は孟宗の雪中笥を探る形にて胴巻は地織綴の錦なり

保昌山 東洞院通松原上る町より出つ人形平井保昌にて見送地織綴の錦胴巻は狸々緋地に應擧の下繪なる人物虎羊の繡模様最も著名なり

岩戸山 新町通佛光寺下る町より出つ人形は天照大神戸隱明神伊弉諾尊三神なり水引は緋羅紗に雲と鳥との模様胴巻は毛織に獅子唐草の捺様見送りは唐織に唐子遊の捺様等美麗なり

船鉾 新町通綾小路下る町より出つ人形は神功皇后住吉大明神鹿島大神及海神にして水引は紅地金絲織込前掛白羽二重に菊形等全牀を船にかたどり近年再興したるものにして粧飾華麗なり

十七日午後一時供奉の諸員皆式の如く装束して社頭に参集し既に神寶を神輿に遷御し終れば直に行幸を始む先づ太鼓前導となり棒突及び使番武者各々二人二列に進み次に武者三十騎甲冑を穿ち太刀を佩き大なる飾帶をかけ種々の色衣を纏ひ大将同じく甲冑を装ひ太刀を佩き母衣を負ひ弓矢を携へて馬に騎す之を絃召とよふ竹曳禮服之に従ひ榊臺見座武者六騎御輿組兒眞榊等相踵て進み次に幸鉾白丁八人にて之を奉しつぎに鼓篋、箏、横笛、荷大鼓、荷鉦鼓等樂人の一隊之に踵て進み次に神馬三頭各々口取白丁二人之を護りて進み次に供奉十人麻上下にて進み次に御鉾三基御楯一枚御弓三張御矢一箠御劔一振御幣二本錦蓋鶴鳥菅蓋各一挺順次にすゝみ次に玉巻の御劔は承應三年徳川氏寄附する所にて出羽の大椽國路の作なり白丁二人之を奉し直垂を着たる供奉のもの凡二十五人之を警固し次に御板次に駒形童一人騎馬にて進み之より神官一人騎馬官司は輿にて白丁八人童之に従ひ次に氏子組々の者供奉して三基の神輿次第に進み次に又神官二人

騎馬にて進み祇園町より繩手を北に三條通を西に河原町を経て四條通に出て御旅所に着す其裝飾華麗にして殆ど人目を奪ふ

廿四日還幸の式は畧は十七日行幸の状と同一にして午前山棚の巡回午後神輿の還幸あり但山棚の名稱裝飾左の如し

船辨慶山 蛸薬師通鳥丸西入る町より出つ人形は牛若辨慶なり永祿六年七條大佛師康運の作にしてあした金は天文丁酉山城國信國の作なり稀代の名作にして十數貫目の重量ある牛若の人形を欄干上に装置し僅に一足を以て繋留せしめたるは殊に巧妙なり前掛は蝦夷錦花色地龍模様左右掛は綴織にて葵祭の圖を摸出す

鯉山 室町通六角下る町より出つ人形は素盞鳴孫にして別に鯉の淵登りを刻せり左甚五郎の作といふ水引前掛見送り共にヨプラン織にして山水人物の模様あり

八幡山 新町通三條下る町より出つ八幡宮を勸請す見送りは蝦夷錦に龍の模様前掛は和絨納戸地に人物左右掛は薄茶色綴織に龍水引は金地繡波に仙人の模様あり鳥居の上に二羽の鳩あり左甚五郎の作にて著名なり

行者山 室町通三條上る町より出つ人形は役行者葛城の神前鬼の三像にて前掛は淺黄地に牡丹蝴蝶左右は唐織綴の綿龍の模様見送り二様あり一は唐織淺黄地は人物山水の模様水引は我邦綴錦の發明者讚岐國西山勘七の京都に在りて織りしものにて最も著名なり

鈴鹿山 烏丸通三條上る町より出つ人形は瀬織津姫命通稱鈴鹿御前にして見送りは雲龍の刺繡明代のものにしてもと軍旗なりしといふ

淨明山 六角通室町東入る町より出つ人形は筒井淨明一來法師の二像なり淨明の着たる具足は楠木正成の遺物と云ふ其板袖は正平元年の製に係る珍しき正平革なり見送りは天鵝絨鼠地に人物の模様縁は波の彫刻にて佳作なり

黒主山 室町通三條下る町より出つ人形は大伴黒主にて前掛は朝鮮人の官服をきたる畫なり左右掛は綴織淺黄地に蝴蝶の模様縁は猫々緋にして見送りは綴織花色地に百子模様あり

觀音山 二臺あり一は新町六角下る町一は新町蛸薬師下る町より出つ共に楊柳觀音を安す恵心僧都の作と云傳ふ裝飾亦壯麗なり

神輿還幸の巡路は御旅所より四條通を西に東洞院に至り西殿の神輿一基は東洞

院を北に二條を西に大宮に出で御旅所に入り中殿の神輿二基は烏丸を南に松原を西に大宮に出で御旅所に入る其より三基相合して御旅所を出で三條通を東に寺町を南に四條を東に社頭に還幸す

凡そ當日賽詣の群衆雜沓はいふも更なり祭日の前夜なる宵山より山鉦は一齊に提燈を吊るし所謂祇園囃を奏し各町内戸々軒燈を連ね不夜城の觀を成す時恰も鳴川の夕納涼に際すれば四條通最も熱鬧を極め肩摩殺撃殆ど立錫の地なし祇園社頭及び傍近の如きもまた人の山を築けり

今宮神社祭禮

此祭禮は百歳抄に久壽二年四月京中の兒女風流をそなへ鼓笛を整へて紫野社に參る世に之をやすらぬと號つくとあるに始まるものにして疫神を追ひ拂ふさまにならふものなり現今は四月十日に之を行ふ此日午前九時花棒一名は十アケと云へる櫻椿の枝に幣を添へたるものを本殿三座攝社若宮等に供し又八つの御饌と稱して楕圓形の赤飯顆を折敷にもりて本殿西の座に供ふこれより古代の風流を學ひて一種の行粧となす其概要を云はゞ鉦持四人狩衣をきて前にあり囃子方

六人赤衣を着て其内二人は烏冠を冠し四人は赤毛黒毛の冠を冠し極めて盛飾せる大傘をさしかけ其後に太刀持数人ありて寂蓮法師作るどころの歌を誦ひつゝ踊り行くを例とす此日社内及び氏子の町々群集雑沓して甚だ賑へり
又私祭は五月十五日にて同月五日に氏子中より例式によりて其行を整へ神幸ありて大宮頭の御旅所に神輿を渡御す其神幸の次第前後敷町にわたり種々の鉾数本あり氏子町中を巡行す中古衰頹せしを徳川桂昌院の保護によりこれを中興し今は儀式嚴重に且つ美麗なり牛車を出す宛も賀茂祭の如し同十五日神幸の式の如くにて御旅所より社頭に還幸あり

上御靈神社祭禮

五月十八日にこれを執行すまづ四月廿八日三基の神輿を神庫より出し廿九日之を裝飾し五月一日御出の神幸あり十八日午後一時に至れば氏子各町の供奉するもの皆社頭に参集して十四本の鉾次第に境内をねり出て神輿を奉して氏子各町の間を巡り夜に及びて還幸あり
凡そ都下幾多の大社其祭祀に當りては大率山鉾の供奉あり然れども其鉾の如き

いまた當社のものゝ如く著名なる由緒を有するものなし太刀鉾は最も古くして伏見帝の御寄附に係り龍鉾は後花園帝枝葉鉾は正親町帝鯨鉾菊鉾は後水尾帝龜鉾は明正帝寶鉾は東山帝の御寄附なり紅葉鉾は新廣義門院後伏見葵鉾は東福門院若荷鉾は伏見宮柏鉾は有栖川宮の御寄附鷹羽鉾は津山の少將牡丹鉾は近衛關白矢的鉾は細川忠興の寄附なりといふ其見送り共に皆名品なりかく當社の鉾皇室に關係ある所以は社地の皇居に近きにより其の産土神として御崇敬ありしものか

下御靈神社祭禮

五月十八日にこれを執行す行列の鉾は石竹、扇、葵、橘、菊、桐、重菊、枝菊の八本を氏子各町より出し午前は氏子の東部を巡り午後は西部を巡る維新前は中御靈の御旅所にて神事ありしか中御靈の合併せしより此事なし

太秦の牛祭

毎年十月十二日廣隆寺に行ふところの牛祭は亦希世の祭事なり相傳ふむかし總

3
209



覺大師入唐の歸路順風を多摩羅神に祈るよりてその神を叡山の西麓に祭り後當寺に此神を分祀せり牛祭は即ち此神の祭禮にして其式甚奇異なり其夜村民五人五大尊の形に表し異形の面をかけ風流の冠を着し一人は幣を捧げて牛に乗り四人は前後を圍み從者は松明をふりたて行列して本堂の傍より後に廻り又西の方より藥師堂の前なる壇上に上り祭文を讀むこの祭文は一種の文體にして寺傳道昌の作といふ奇文なり太秦の牛祭とて群衆の人甚多し祭事中の最奇なるものといふへし往時は深更に行ひたれば戻りには京へ連れなし牛祭り^のの句もありしか今は九時頃に始め十一時頃には終ることとせり
此外北野の芋^ま芋^ま祭は芋^ま芋^まと野菜干物とを以て神輿を造り神幸をなす其製作極めて巧なり岡崎栗田新日吉惠比須晴明諸社の如き各神幸あり神輿鉾などありて賑はし藤森神社には氏子中胃騎馬にて神事をなす皆各社の記事にあり

3
209



